

好きと想うと、透き通る塔と。

tkbungei

## 第一章

---

好きと想うと、  
透き通る塔と。

佐々木 亜竜者

### 第一章

四人の生徒が学校から姿を消した真相。なんて見出しの、生まれたての校内新聞の産声は、部屋に一人たてこもる私だけの耳に届く。今、私は塔の上に立っている気がする。そしてそこから、起こっていること全てを、一望している気さえする。塔から見えた風景を文字に変えてしたためた私の新聞は、真実を求める生徒の元に、届けるばかりとなった。

ただ、一つ気になることがある。

行方不明者四人のうちの二人は、その名が学年中にとどろくほどの人気者だ。二人の失踪は、大きな話題となるだろう。だが、その失踪は、その前に起きた別の二人の失踪に引っ張られるようにして起きたのだ。しかもたちが悪いことに、先に失踪した二人は、不登校中だと皆思いこんでいる。この二人の真実を伝えなくては、今日の前にある新聞も、砂上の楼閣のようなもの。センセーショナルたり得ることはできない。日常に、波紋を呼び起こすことはできない。だが、あの二人が今、世界の変わり目、日常の切れ目を作りだしていることを、いったい誰が、信じるだろう？

あの二人の真の姿なんて、誰も知らなかった。私たちが勝手に作りだした二人の人間像に、結局は踊らされていたということも。そして気付いたころには二人は、世界の端にまで辿りついてた。世界の、端をなぞれば、それはすなわち輪郭となる。こうしている間にも、世界は動かされている。そんな気がする。

だが、その事実は私しか知らない。私は発信者になれる。四人の失踪の反響は、私によって引き起こされる。中学校に入って三年、ようやく脚光を浴びるときが来た。

私は、印刷済みの大量の新聞を抱え、一人部屋を抜けた。

皆は知ることになる。

なぜ、四人が失踪したのか。

印刷室を抜け、あの部屋を廊下から眺めてみたその時、急に、既視感に襲われた。

全てはここから始まった。

歩くにつれ廊下からは、明るみが抜け落ちつつある。夜の暗闇は、もう目の前に迫って来ている。

まだ、何か起こる。私がこうしている間にも。

そんな気がした。

だけど何が起こるか知る前にまずは、これまでに何が起きたのか、知ってもらわないと。

廊下をつきつた先にある外れの、ほの暗い一室は、今では既に教室の役割を終えていて、普段使われることもない。我が新聞部は、あえてそこを選んだというよりはむしろ、周りの視線から逃げたすえに選んだのだろう。

ヒカルが廊下より中を窺うに、もうかなりの数のひとが、集まっているのが分かる。

「遅かったな、ヒカル。」

ちらとヒカルに目を向け言うタクヤは、いつにもなく鷹揚であった。もう使われていない黒板の前までつかつか歩み寄ると、バーン！教卓を感情に任せて叩き、注目が集まっていることを確認するかのよう、ぐるりと当たりを見渡した。

「俺が今回、わが三学年の新聞部を呼んだのは、当然重大なニュースがあったからだ。君たちはもう、三年五組の、木本カオリが学校に姿を見せなくなったことはきいていることと思う」

傾いた日の光が差し込む窓側の一帯から、外をのぞいている新聞部部員と部長であるタクヤの間柄は、べつに親しいものでもない。それだけに、頼みごとをタクヤからすることは意外だった。しかし残念なことに、「ニュース」を聞いた後の、部員の反応をヒカルが見ても、何の驚きをも、そこには見出せなかった。飛び出したのは、タクヤの言葉を突っぱねるような発言ばかりだった。

「木本カオリって、あの木本カオリだろう？周りが見えない、見ようもしない、始終ポーっとしているあの。あいつが、学校に来なくなったのは不思議なことじゃない。どうせ不登校とか、そんなもんだろ？それに俺たちに何の影響がある？」

当然ながら脇で聞いているヒカル本人は、木本カオリのことに関しては、何も知ってはいない。なにせ大きい中学校なのだから。ヒカルもタクヤも、友達百人つくるような努力、なんて、しないたちであったものだから、一学年の生徒全員を、すきとおる水槽みたいには眺められない。逆に窓辺の人々は、学校における人間関係について精通している様であって、木本カオリについても例にもれず、と言ったところか。

タクヤが、何も反論しないのをみて、他の部員もいつものようにブーイングという行動に出る。ヒカルの目線からみても、彼らが、たとい部長相手であれ、自己の要求を通すことに、確かな正統性があるように見えた。

「おい、タクヤ。それがお前の言うニュースか？いくらクラス数が多いとは言えな、カオリのクラス以外にもそのことは広まっはいる。だけどそれは、日常の続きだ。ニュースじゃない。わざわざ新聞になるような事件性なんてない。彼女と最近接した同じクラスのひともみな、同意見だ。そこに、タクヤ、別に同じクラスでないお前が、立ち入るゆとりはあるか？」

「僕の言っているニュースは、カオリが休んだという事実じゃない。彼女が学校に来なくなった本当の理由が、おそらく不登校じゃない、ということなんだ。まあ、まだ証拠があるわけじゃないから、すぐには記事にできないだろうけど」

言っている内容はいったん棚に置いて、あの無口で、いつもおどおどしているタクヤとは、およそ考えられぬくらいの健闘ぶりにヒカルはまたも驚いた。その勇気をたたえ、ヒカルはタクヤを何となく応援していた。ただ良くは知らないが、木本カオリが不登校になったことにつ

いて、窓辺の人達はさして関心を寄せていないように、ヒカルには見えた。木本カオリという、一人の人間が失踪しても、気をとめる者はヒカルとタクヤだけで、他は何も変わりはない。

「大体、」

声の出どころはバスケット部のようだ。

「木本カオリとの接点なら、俺の同じ部活のヤマキの方が、あると思う。彼も、不登校だと言っていた」

ああかわいそうに、タクヤ。君は、木本カオリについて、良く知る人たちが、目の前にいるのに、出すぎたことをしたな。どんなにあの連中が、突飛なことを言うきみを、馬鹿にしたことか。もし、タクヤきみが、学校を休んだら、きっと彼らは、頭がおかしくなったんだ、と訳知り顔で言って、それで終わりだろう。

と、思った時ヒカルをおそったのは、自身が、終始何者かに上からじっと見下ろされているかのような、えもいわれぬ空恐ろしさだった。「正直、タクヤもそうなりつつあるけれど、自分も木本カオリと同じになってしまうかもしれない。学校をもし、自分が休んだとしても、人に波風立てることなしに、学校の人々の認識の奥深くへ沈んでいってしまうかも分からない。」

いや、だから、なのかもしれない。タクヤがこうして、カオリの失踪の記事を書くことに熱をいれているのは。だって、自分もタクヤも、多分カオリも、似たようなものだから。

ヒカルはドアの近くに立ったまま、タクヤを眺めていた。

「もう、帰っていいか。俺たちの仕事じゃないだろう？そんな無意味な人調べは」

誰が言ったか知らないが、まあ窓辺のだれかだろう。誰でも同じことだ。あの連中、みんな窓ばかり見ている、やる気のかけらもない。けどもそういうあいつらも、いちおう新聞部、という肩書になってはいるけれどもね。

話はすこしややこしくなるが、新聞部員中、新聞部のみにはいっているのは、ヒカルとタクヤだけで、じゃあ他の連中が何かと言えば、他の運動部と掛け持ちしている二股なのだ。かれらは、新聞部の部員を増やし、廃部の危機から助けている一方、それと引き換えに、各々の入っている部活の記事を新聞に載せることを強制している。部長たるタクヤも、しかたないこととして、黙認してはいるものの、我々が新聞は、スポーツを褒める言葉の嵐で埋め尽くされて、一種のスポーツ新聞になり果ててしまっているのが、悲しい事だが現状だ。

その運動部の広報役達が、窓の外の空と、その下に広がるどこまでも砂に覆われた校庭を眺めているのも、本業の運動部に戻りたいことを身体ぜんたいでアピールしていることであることぐらい、きっとタクヤもわかっているはずなのだ。

「では、今回の新聞の記事の案は、なしということで。はい、解散」

ヒカルとタクヤ以外のものは、校庭に、あるいは体育館に。いくら部長とはいえ、スポーツに全力で取り組もうとしているものを、とどめてはおけないだろう。解散するしかなかったのだ。

さみしげになった部屋に残されたのは、ヒカルとタクヤのみに気付くとなっていた。二人は他の部員みたいに運動部には行っていないので、そのまま直帰する流れに。

「しょうがないことだよ、ほかの部員が反対したとなっては。また、ほかの記事を見つけるとしよう。」

ヒカルの同情の辞は、前を向きながら、歩く足を止めないタクヤをとどまらせることはできない。

「いや、俺ら二人になったとしても、絶対このことは果たさないといけない。これは、絶対的な任務だ」

ええ？ほかの部員が反対している時点で、もはや絶対的ではないんじゃないの？と一抹の疑問が脳裏をかすめたとはいえ、今まで、これほど自分を押し通そうとしたのは、初めてのようにヒカルには思われたのだ。中学三年になったぐらいで、人の性格なんぞはそう簡単には変わらないことぐらい、心得ている。それ以上の何か、が彼にはあったと見える。

何があったんだ？

疑問は、無意識のうちに、ヒカルの口から飛び出していた。

「なんで、そこまでして木本カオりにこだわるんだ？」

「え？」

目の前に、何かが見えるのかと思うくらいに、タクヤの目線は動かない。

「まさかとは思うけれど、『個人的な問題』じゃないだろうな」

いいながら、ヒカル自身、愚問だったことに気恥かしさを覚えたのだが。そういったことに縁のある人ではないことくらい、考えれば分かる。

「個人しか、分からないこともある。たとえ大多数の人が反論したとしても、個人の意見が真実のことだってあるのさ。塔がある街を考えるがいい。街に住んでいる人、その人それぞれ目線から、見ているものは違う。でも、塔から街を見下ろすひとは、そのすべてが一望できる。高い塔に人間が惹かれるわけだ。俺たちの、新聞は塔になれると俺は思う。全てを見通す塔に」

そういいながら、こちらを覗く顔が、いつにもまして勝ち誇ったようにもみえた。これは、そう、運動部に行く時のうちの部員の顔とそっくりじゃないか。彼のこんな顔を見るのは、おそらくはじめてだ。君の、自信は、どこからやってくるんだ？震源地はどこなんだ？

「なぜなら俺は、おそらくカオリを、本当の意味で、最もよく知る人間だから」

キャッチボールで、ボールをあさっての方向にすっ飛ばしたのと同じくらいに唐突な会話の終わり方だった。と同時に沈黙が二人を包み始めた。二人ぼっちでずっといると、だれしものが経験するところだろうが、特に話すことがあるわけでもない今回は、なおさらである。仕方がないのでヒカルは空ばかり見ていた。太陽は既にそこにはないが、赤みの余韻は残されていて、空の色もしたがって、うす紫の織物が太陽を覆っているようで、いまひとつ釈然としない。ひたすら前を見るタクヤと、視線を空一面に泳がせ続けるヒカル。部活で周りを走っている人々の存在は、二人の中から消えていた。

正直ヒカルは、タクヤが言わんとしているところが良くわからなかった。だからなにか良くも考えずにピンボケな返答をするわけにもいかない。黙りこくるわけだ。最初に会話を再開したのはしかし、二人のどちらでもなかった。

「おい、タクヤ」

ヒカルは呼ばれたわけでもないのに、二人ともが、驚いて横の体育館を見やる。

「聞いたぞ、ヤマグチから。タクヤ、いつにもなくナンセンスな記事を書くらしいな」

ヤマキナオヤだった。ヒカルももちろん知っている。がっしりとした大柄な体躯は、口で語らずともスポーツをしていることを身体全体でアピールしているようなもの。彼は、バスケットボール部で活躍中だが、ありとあらゆるスポーツをたしなんでいるらしい。青春という名の時期においてスポーツに身を投じ、活躍することが正しいことは、時々思いだしたように新聞を申し訳程度に書くだけの生活が、正しくないのと同じくらい自明なことだ。ヤマキはそればかりか、学年委員長など、様々なトップに躍り出て、学校を動かすエンジンになっている。

そんな人物を前にしても、タクヤの態度は揺らがない。

「本当の真実は、理解されないものさ」

ヤマキも別にひるむ様子は見せなかった。

「みんなそうだ。タクヤ、お前を含む人々を、俺が観察しているうちに思ったことだが、だれしも、身の回りのだれも知らないことを見つけ、発信することに夢中だ。ネットなんて、その塊じゃないか。そしてお前もだろ。新聞には、自分だけが気付いたスバラシイ事実を載せたい。そして、みんなに読んでもらいたいってね。この、自己中が」

「だが、」

タクヤは負けじと反駁する。

「そういうお前こそ、今こうやって、人間の隠された本性を人に発信して、喜んでいるんだろ」

「俺は、お前に気付いてもらうためにやってやろうとしてる。お前が、カオリという人物に対して、どんなイメージを持っていようと勝手だが、新聞を書くんなら、周りの人の意見も聞け。新聞はお前だけの物じゃない」

「相変わらずのおせっかい。おまえは、いつもそうだな」

ヤマキは、少しの動揺すら見せずむしろ、逆にその目は餌を目の前にした獣そのもの。

「ほら。俺を、そうとしか見ない。君の理解なんてそんなもんだ。確かに俺はそう見られること、多々あり、だ。だが、本当に正しい事は、理解されないものさ」

「俺は本当のカオリを知っている。てか逆にカオリだけなんだ。俺が本当の姿を知っているひとは。だから、俺は、誰も辿りつかない真実にも、辿りつけるとさえ思っている」

「自分だけが特別。そんな妄想に囚われているんだろ。今特に取り柄のないお前にとってはそれなしには堪えられないものな。出しゃばるなよ。特に、カオリが、不登校じゃないことを証明する道具があるわけでもないのに」

言いすぎだろ、さすがに。そうヒカルが思うや否や、どんとヤマキにつきだされたのはタクヤのか細き両腕で、ヤマキに注意が注がれ、た一瞬に、タクヤはひとりでに駆けていってしまった。

この後、タクヤが学校に来ることはなかった。

☆

辺りに伸びる、周りのビルも高いことには高いけれど、わたしが目指す建物も、それでも近くに寄ると結構なもので、ほら、ながっぽそいそのたたずまい、まるで塔のようじゃない。それは

そうと、建物の高さ、広告の大きさ。そんなものにかこまれている人間、それを見てるとなぜか人間が小さくなった気がする。それに、いっぱいいるからありみたい。

みかけ、すこしぼろっちいその塔に足を向けていると、髪を、黄色がかった茶色に染めている、二十歳ぐらいの女の人が、中より出てきて、一言言ったの。

「あなたが木本カオリさんね。ようこそ」

わたしはこれからここに暮らすことになる。

そして忘れものに気付く。

「あのう、特に泊まる用意とかそういうの、してこなかったんですけど、だいじょうぶでしょうか」

「あとから、さる人に、買ってもらったらいいわ。行きましょう」

でももう地上に足をつけることもないのかも。わたしは、ちょっと逡巡し、もいちど塔を見上げてみたところ、はだいろのコンクリのかべには、こまやかな切れ込みがされていてゴチックっぽく、やはり塔と呼んだ私のセンスも、あながち間違っではないのかしら。ともかくも、見納めに、後ろを振り返りみたけれど、やっぱり高いビルが林立していて、その景色のみえるところは、五十メートル先まで。わたしの見たいものはここからじゃ見ることもできず。

ぼんやり辺りを散歩しつつ、一通り見てみたあとでまた、塔の前に戻ったら女の人、まだ入り口に立っていて、

「用事が済んだのなら、そろそろはいりましょう」

と、あんまり腹も立ってない様子。今思えば、私にしては珍しく、やけにおちついてたかも。こういったの、私は。

「ええ、もう大丈夫。思い残すことはないから」

塔のわきには、白い巻貝を思わせるような螺旋階段が付いているのが横目で見えるけど、お飾りのようなもの。使うことはないだろう。あまり、人目についてもよろしくないから、上にあがるときはエレヴェータで。透明なガラスの扉が、うやうやしく私たちを通すと、正面の大理石の白い壁に、エレヴェータが収まっているのが見えたの。

もちろんその後私たちは箱の中に入る。箱入り娘たち。エレヴェータはのろのろで、やけに時間がかかる。その間にも、どんどん沈黙が満ちていく。二人ぼっちというのは、いつもそうだけど、沈黙をつくってしまうもの。聞きたいことはあるけども、わざわざ二人の時に言うほどのことでもないから。

定まらない視線を泳がせつつ考える。いつもは、沈黙の中、どこを見ていたかしら？そう、今の位置を知らせるライトや、ボタンとか。

でも、今何階かは、どこ見てもなさそう。訊けないよ。いいや、こんなことでも、いまはこんな沈黙から逃れないと。

今気付いたことのように自然に、言葉を滑り出す。

「どうしてボタンが無いんですか？」

「必要ないからよ、私たちには上の階しか」

上の階しか必要ない。それ聞いて思い出したのは、横浜の、ランドマークタワーなる塔のこと。

私がエレヴェータに乗ると、青い制服に身を包んだお姉さんが、最上階のボタンを押すの。そのエレヴェータは、展望台行き専用でしかも、世界最速と銘打ってあるから、最上階の階しかいらぬ。他の階はいらぬ。そんなものかしらん、このエレヴェータも。

「着いたわよ、カオリちゃん」

言葉とともに唐突にもドアが開くと、カーペットがしつらわれたロビーがまず先に目に入り、続いて大きなガラス窓もみえた。その窓に向けられた黒いソファに座る数限りない人。今までの、私の生活していた場所と、あまりにかけ離れている光景に目を見開く。

「ようこそ、カオリさん、あなたが、今度選ばれた新入りなのですね」

スーツを着た偉そうな人の質問にはい、と一応口にはしたものの、今話していること、それ自体がまるで嘘のように思っているから、したがって、自分が選ばれたとは信じられない。なら、それをはっきりそのまま言ってしまえば良かったのに。その癖は、結局昔のまま。

もう話は聞いていると思いますから、と言われるがままに、わたしは、一つの窓の下に連れてこられた。そこでやっと気付いたのだが、窓だと思っていたものは、水族館の大水槽の、ガラスのように、大きな大きなスクリーンだったのだ。

その窓、じゃなくてスクリーンに映っていたものは、つい数日前まで私の通っていた学校のあたりの上空の映像だった。ふとモニターにかこまれた周りを見渡すも、そこに映る場所は、モニターによって違っている。まるでガイドマップみたい。

わたしのための席だといわんばかりに、きゅるきゅるとキャスター付きの椅子を差し出して男の人は言う。

「では、よろしくお願ひします」

「あっ、ちょっと待って下さい。私、何も持ってきてないんですけど、大丈夫でしょうか」

「ちゃんとお知らせしましたが、忘れたんですか？あなたは、これから先、塔から出ることは許されぬのですよ」

やっぱり、もう戻れぬんだ。

「はい、すいません。ちょっとポーっとしてまして」

「後で指示します」

そういって不満げに、私をほったらかしに、去ってしまった。

そう、包み隠さず言うならば、昨夜私はゲームとかをぶっ通しでやっていたがために、寝坊して、あわてて家をでて、なにもかもわすれたのだ。そんなわたしの失敗も、ミスとか、欠陥とかしかとってくれぬ。だったら理由、言ったほうが良かったかしら？おそらく無理。多分ここの管理人さんにとって、私のプライベートなんて、どうでもいいに違ぬないのだから。

「ねえ、あなた、仕事しぬいの？」

声の主は、わたしの隣の席の人。仕事？何のことかしら？全くわからぬ。かといってここの人たちを責めるといふわけにもいぬないのだ。というのも事前に配られていたマニュアル的なものを、すっぽかして来てしまったのだから。

「あの、すいませんが、何をしたら、よろしいのでしょうか」

もし、紙が配られていぬかったら、聞くのは当然と思うほどに、目の前にある機械は恐ろしくい

かめしい。これを、どう使えというのだろう。

隣の女の人の、白い皿かと思うほどに起伏に欠けていた顔が、こちらを向いた。

「人を幸せにする、それだけ」

次の一言を待たせられど来なかった。せつかく隣になった縁だけど、友達にはなれなそう。だけど、地上を離れた今のわたしに、友達と呼べる人は何人いるかしら？

世に言う職人さんは、師の仕事は見て覚える。ならば、たとえ隣の彼女でも、見て学ばんとする。

彼女は画面に映る人に、とにかくカーソルを合わせて、ボタンを押していた。

「わかった？こうすれば、人は幸せになっていくという仕組みだから」

「誰人構わずですか」

「私たちは、みんなを幸せにする」

単調な仕事だなあ。だとしたら。画面に映った人にカーソルをあわせる。ボタン押す。それだけだから。もし、わたしの目の前にある街並みが、見知らぬどこか遠い街ならわたしだって、そうするしかないけどさ。そうしてわたしは、窓の外を見やる。そう、わたしの住んでいた所は、画面右手、うっそうとした森の脇。あの団地の一角からわたしが毎日、中学校ってところにかよっていたの。一日は、そこのドアを開けることから始まっていた。名前もないような、ほっそい川を、まずはこう、つーつとあるいて、次第に、そう、小さなお店がひしめき合う道路にでる訳。

当然、チェーン店と言うのはない、っていうか、なくても、十分繁盛してた。うえからじゃあ見えないけれど、店の名前は大体覚えている。もっといえば、パン屋さんを通る時、ふわっと甘いにおいがしたり、かつてこの店においてクラスの生徒が集まって、わいわいさわいだことも、わたしはみーんな知っているのだ。で、ちょっとこんもりとした森の奥にあるのが、私が通っていた学校。そこで起きたさまざまだって、みんな知っているのだ。そうなのだ。わたしは、ついさっきまで、この中にいたのだ。この画面の中に。みーんな幸せ？そんなものは、当事者じゃないからいえることであって、世の中、見てるだけでわかるように単純明快、なんてものでは決してあり得ない。と同時にわたしは、横からの威圧感がまるで消えるように無くなっていく気がしてゆく。ただでさえ、起伏に欠けていた彼女の顔が、どんどん薄っぺらに思えてくるのだ。

隣の方、わたしは、あなたより、もっと一杯のことが見えるんですよ。それこそ思い出が洪水になって来るように。みんな幸せって考え方は、そりゃ支持はするけども、それは簡単なことではない。

と言ったところで、きっと分かってくれないんだろうな。あんな無表情な人じゃ。わたしを大切に思ってくれる人がいるって、分かんないんだろうな。

わたしは、ゲームをして、忘れ物をするだけの人間じゃない。わたしには、過去や、思い出があるのだ。そしてわたしを大切に思ってくれる人がいるのだ。だけれども、わたし一人がそう言っても、何の説得力もない。どうしよう。このままだと、何の素敵な思い出も持ち合わせていなそんな人の中で、わたしの思い出が沈んでいってしまう。

来てもらわないと。来て、あの時みたいに、わたしを支えてもらわないと。偶然か必然か、とにかく、この席がわたしにあてがわれた、という事実が、わたしを行動へ導く。この部屋に満ち

ている透明な虚無感からわたしを救ってくれるのは一人しかいない。本当のわたしを知っているのも。

この塔には、普通の人をよんではいけない決まりになってるらしいけど。

構うものか。

ここから連れ出してくれるなら。やさしさで、わたしを不安から救ってくれるなら。

わたししか知らない、彼を呼ぶ隠密の行動は、このように始まった。チャンスが巡ってきたのは、お昼を、少し過ぎたあたりくらいかな。

「竹西様の指示で参りました」

何の変化もまだ起きない画面から、目を外すとそこには細い針金でできたような眼鏡を身に付けた、若い男の人が立っていた。大学生くらいに見える。バイトでここにきているのかしら？わたしの仕事は、知っているのかしら？

「服を、取りに行きたいと、そういうことでしたよね？」

「はい、出来れば、ゲームとかマンガとか、なるべく退屈しないものも合わせて頂ければ」

「と、いうことはやはりご自宅へ伺えばよろしいでしょうか」

「ええ、ちょっと待って下さい、今リストを書きますから」

そう言って、紙と鉛筆をもらい、大学生をいったん遠ざけるとわたしは、じっと白い紙と対峙した。もちろん、欲しい物リストは迷わず書けたけど、問題はその後。先ほどの気持ちが、文字になって紙の上に浮かび上がったものを見てわたしは、本当に恥ずかしくなって、ペンを持つ手が震える。

大丈夫、きっと分かってくれる。

でももし、手違いで、他の人に読まれてしまったら。恥ずかしい。きっと変に誤解される。だから恥ずかしい。

試行錯誤の末にたどり着いた妥協の島は、ミユキさんに、手紙をそれとなく彼に渡してもらう作戦。成功率はたぶん低い。でも他に方法なんてないし、モニターの、幸福にするシステムがあれば、何とかなるかもしれない。

とにかくくださないと。これを渡したら、何らかの形でわたしのいた世界に波紋を広げることになる。これで、もしわたしが書くことを諦めれば、わたしは、世界と関われなかったことになる。

振り切るように、一気に書き終えた。

欲しい物リストは、今はもう、手紙になった。

さっきの男の人を、もう一度呼ぶ。

「これを、わたしの家の人に届けて。あっ、あと、何が書いてあるか、見てはだめ。それはプライバシーだから」

「家の人、というのはご両親で？」

「あっ、いいえ姉です」

「わかりました」

この男の人は、行く途中で、見たりはしないだろうか。彼の、生真面目そうな雰囲気からす

れば、心配することはないのだけれど。というか極言すれば、あの人の所に行けばいい。

「すべからく」

こう言い残して、大学生はエレヴェータの扉の中に消えた。

わたしはモニターに、すかさず目を移す。まず、わたしの家を見る。今日は多分家にいるはず。一応大学生ということにはなっているけど、彼女が動き出すのはもっと日が暮れてから。わたしの生活習慣は、おそらく彼女に影響された、と思う。

おっ、ついに、わたしの送りこんだ大学生の姿が、画面のはしから現れた。いよいよだ。手紙は、見ていないようで、緊張のひもも、ほどけ始めた。十数分もしたら、彼はもう、家の扉の前に立っていた。手紙を片手に。その時、関係ない事だが、わたしが思い出したのは、わたしの家の、ミユキさんにしてもらった話だ。

「さかのぼること約千年。時の平安貴族らは、渾身の和歌をしたためこっそりと、想う人へと届けたものだよ」

彼女は、大学では、国文学を学んでいる。

そんなことはさておき、わたしは忘れることなく、彼女と大学生、そして彼に、あらん限りの幸福を、授けたの。それは酷く一瞬だったから、もし監視カメラが付いていようと、まあ気付かれない。周りの人も、もちろん気付かない。だってみんな無関心だから。この、世界にたった一人、それを知るわたしの心臓が猛り叫んでいるかの様に、わたしの皮膚を突き刺していることに。エキサイティングなことだ。ここにきてから初めてだ。こんなに生きて良かったと思ったことは。

扉が開いた。

## 第二章

---

### 第二章

翌日、タクヤは学校に姿を見せなかった。

そして当然と言えば当然なのだが、誰も騒ぎはしなかった。...二人を除いては。

ヒカルは、少なからず、後ろめたさを抱えていた。彼の後ろに何があるかと言えば、もちろん昨日の集会いみたものである。「これだから人とかかわるのは面倒だ」タクヤが、学校に来ないのは既に確信している。特別な事情云々より、あそこまで絶望的な別れ方をして、次の日、昨日のことはどこ吹く風の面で学校に来るほど肝が据わっているとは思えないからだ。だとしたら、ヒカルは、過去を引きずって生きなければならない。タクヤが去った後、ヒカルは走っていく姿をじっと見ていただけで、何の手も打たなかった。それまでヒカルはタクヤとずっと二人で歩いてきたというのに。

「悪いか」彼の中で、この言葉が、BGMのように鳴り響いていた。「このわたしから別に近づいたのではない。そうだ。おんなじ部活だったというのも、偶然で。あまり時間と体力を削られない部活を、しぶしぶ選んだだけのことだ。そこには必然性がある」ヒカルの学校は、部活のどれかには必ず入らなくてはならないという、自由を阻む、足かせのようなしきたりがあった。

「そして、こんな羽目となってしまった。タクヤと、いろいろ接触したせいで、わたしの脳内に、彼に関する有象無象を産み付けられたのだ」

彼と過ごした時間が積もり積もって塔のようになってしまい、タクヤ以外の人、はるか下のかなたに見えてしまうほどにヒカルは、周りと隔絶したようなのだ。そのせいで、タクヤは姿を消した後も、ヒカルの脳内にはずっとタクヤのイメージが居座り続けていた。しかも、ヒカルだけの中に。「タクヤが学校から姿を消そうが消すまいが、わたしはタクヤの顔は毎日見ていることに変わりはない。しかも後ろめたさがなぜか残るのだ」

タクヤの失踪をも、うやむやにするかのように、傲然と学校生活は突き進んだ。タクヤは結局来なかったし、話題にも上らなかった。暦の上では五月になる。休みが終わると、体育祭が口を広げて待っている学校は、珍しい物ではない。ヒカルの学校もそうだ。とはいえヒカルは、もう三度目になる。大体の覚悟は出来ている。

しかし今年は、前二年とはどこか違う空気が立ち込めていた。

「体育祭実行委員からご連絡。これから体育祭までの2週間は、朝、昼、放課後の練習が認められました」

始まりはこの学活における発言からだった。これに対し、クラスでの顔は学級委員、部活では水泳部部长として御活躍中のサキハラは次のように述べた。

「最後の体育祭と言ってもみんな暇じゃないし、週で、練習する日を決めた方がいいと思う」この言葉は誰よりも、ヒカルの胸に、深々と突き刺さったのは言うまでもない。ヒカルは自由人として生きていた。サキハラの口ぶりは、暇じゃない人なら、体育祭の練習日程を決める権利があると、そう言っているようだった。気付いた時には、自由人ヒカルは、クラスのヒエラルキー

の底辺にまで押しやられていた。自由に生きてきただけなのに。

「う～ん確かにそうですね。みんな忙しいですよね。では、また日時を決めて連絡します」  
その時であった。

「おい」

サキハラが言った。

「なんか校庭に人が集まってるぜ」

腰の軽い人は直ぐに彼のいる、窓際にふわりと飛んでいった。そんなことヒカルはしない。どうでもいいことだ。

「体育祭の練習、もうしてんの？」

「あれは何組だよ？」

「まず、学級委員を探さなくちゃダメでしょう」

「あっ、あそこで大声で叫んでる人じゃなくて？」

「誰だ」

「ヤマキ」

それを聞くや否や、ヒカルも窓めがけて突進した。なるほど、確かにヤマキだ。ヤマキとは、タクヤがいなくなってからは一度も、まだ話していない。そのヤマキは今、クラス競技の二人三脚の練習の指揮をとっているのだ。仕切るのが好きなヤマキのしそうなことだが。彼の中に、タクヤは住みついてはいないのだろうか？それとももう忘れてしまったのだろうか？あの日のことを。

ガラガラッと音がするまでクラスの方は、先生の来るのに気付かなかった。

「席に着け」

静けさに包まれた教室に、先生の声が響く。

「学活はもう終わったか、サキハラ」

「とっくに終わっていますとも」

「なら静かに待たんか。じゃあ、これで学校は終わりだが、どうするんだ、体育祭の方から連絡があったろう」

「それは」

サキハラは躊躇せずに言った

「やりますとも。四組に負けてはいられませんからね」

☆

自由を阻むものから、逃げるようにヒカルは帰ろうとしていた。帰るときは、なるだけ人目に付かない方が良く。ヒカルがいるときに、ヒカルに注意を向ける者はいないが、いない時に限って、非難が向けられるのだ。校舎回りを、すすすと過ぎようとした時ヒカルは、蛇口で水を飲むヤマキを認めた。

「ヤマキ」

「お前は、タクヤの隣に立っていた」

「ヒカル」

「何の用だ、ヒカル」

「タクヤは今日、学校を休んだ」

「あ、そ」

ヒカルは睨みつけたあとで、言った。

「責任は感じないのか」

「俺はただ、本当に思っていることを言っただけなんだけど」

ヤマキは続ける。

「あんなところで、嘘ついたところで、どうにもならないだろ。だとしたら、俺たちは嘘をついて生きなくてはならない。何故、嘘をつかなくちゃならないんだ？」

確かにそうかもしれない。なにもタクヤを応援しているわけではないのだ。

「じゃあ、何でこんな、酷な練習始めたんだ？どうせ、練習の案を言った体育祭実行委員も、お前の手下だろうが」

「俺が、中心になってまとめていかなきゃならないだろ？他に誰がやるんだよ。それに、お前はわからないかもしれないが、何か、全体的な何か、それに時間と、労力をささげることをしないものは、本当に社会のお荷物だからな」

「お前にはわからないかもしれないけれど、束縛を、離れて、自由になることは、時間と労力をささげることよりも、ずっと大変なことなんだ」

「お前、本当にカオリと、タクヤの二の舞になるぞ」

「社会に、何もしない人が消されるとでもいいたいのか」

その時、昇降口に、着替え終わったクラスの人々の姿が見えたので、話は打ち切らざるを得なかった。

「おそらく、ヤマキを失った時、人は残念がるが、わたしが失われても、誰も悲しみはしないだろう。その代わりに、わたしは自由を得るのだ」と、そうヒカルは思った。そう思うしかなかった。

☆

そして次の日。平静を装って登校したものの、クラスの目はごまかせなかった。

「ヒカルさ、お前昨日練習休んだろ」

「いや、昨日は歯医者に行く用事があったから」

阿呆だ。昨日のうちにまことしやかな理由を言っておけば、良かったのに。そういう声もあるだろう。だが、ヒカルには、そういったことを気軽にいえる人がいないのだから、仕方ない。

「何回目だよ、それ」

背後から、声がかかる。

「みんな昨日頑張っていたのに、お前だけ」

クラスの態度は、あまりにも冷ややかで、鳥肌が、立ってしまうくらいだ。見ると黒板には自分の名前が書かれてある。日直なのだろう。そんなものを見ただけでも、げんなりと、肩の力が抜ける。了解もなしに、自分の名前が書かれているのだから。「私は人には迷惑をかけてないつもりだ。だけど、このクラスにある限り、怠け者のレッテルを、貼られながら生きていかなきゃならん」

「ビッグ・インパクト」

午前の授業中は、まさにそのことが、頭の上をくるくる回っていた。

「俺達は、一人だけでもいいから、自分を尊敬してくれる様な人を、見つけなきゃならない」

かつてタクヤは言った。

「でも、特技が無い俺達が、じっと待ってても、そんな人が、現れてくるわけがない。人が困っているところに、タイミング良く、助けを差し伸べることなしに、その願いは叶わない」

そしてこうまとめた。

「俺はそのチャンスを、ビッグ・インパクトと自分で名づけた」

ビッグ・インパクト。都合よく行くか、そんなに。と、ヒカルは考えた。ヒカルの目から日々を充実していると思われる人々、たとえばヤマキやサキハラ、彼らすべてがビッグ・インパクトを経験済みだというのか。「いや、違う。彼らには、スポーツがある」

ヒカルが思い出すのは、つい昨日の集会に集まった、屈強な男どもだった。彼らは、おそらく部活で遺憾なく自分の実力を発揮していることだろう。いや、部活だけにはとどまらない。体育の時間、体育祭、球技大会。そういったものは得てしてチーム戦。チームの中に、デキルものが入ればたちまちにして、歓迎を以て迎えられるのだ。そして大活躍と来ている。自分の価値が失われるとわかっているヒカルでさえも、つい、安易にスポーツという手に頼って、こう物事を一義的に見てしまう。「その点私はどうだろう。参加した所で、人の役に立たないばかりか、もうお荷物だ。かといって賢く不参加という手段に出れば、沸き起こるものは批判の渦」

それはタクヤも同じだった。そうでなければ、ビッグ・インパクトなんてありもしないものに思いを寄せんだろう。だが今そういう我が身も、ビッグ・インパクトについて考えている。

「もし、機会があったなら、俺にしかできないことで、助けられれば、なお、よい」

とうに昔の帰り道、タクヤはそんなこともよく口にした。

「何か、特技でもあるのか」

「それが、なかなか見つからない。ある、とは思うんだけどもね。運動神経のように、見つけやすいものでもないんだらうな」

私にしかできないこと。あるのだろうか。

その時、ヒカルの脳裏に一筋の、光明がひらめいた。一昨日、タクヤから聞かされた、突拍子のない仮説を聞き、またそのタクヤが学校に来なくなる前に、最後に彼を見たのはこの私。

これしかない。

崩壊しつつある私の人間関係、学校生活。そこに私は一縷の希望を見出したのだ。タクヤの考えを、パクるという形にはなる。だが、タクヤが今、とんでもない危機に見舞われているのだとしたら。

「勇者よ」

私の内なるものが、呼んでいる。

「これで、もしカオリとタクヤの失踪に絡む何かを見つけた暁には、きっと素晴らしい日々が、出迎えてくれるに違いない」

「ヒカル君がいなかったら、どうなっていたことでしょう」

まだ見ぬカオリさんはそう、答えてくれるかもしれない。タクヤは、そんなこと言わんで結構だが、今までより、敬意を払って接してくれるに違いない。

「真実を、白日のもとにさらしてやる」

そうヒカルは、英語の授業の、音読の練習の時に、みんなにまぎれてそう言った。「こんなと、私にしかできない」と、思いつつ。

☆

昼休み、図書室のカギを開ける。抜けた先はカーテンが、真昼の光を遮ることで、ひどく薄暗い。もちろん人がいるはずもなく。

ヒカルは、外の光も届かず、読まれぬ本が息をひそめるこの部屋の中でただ一人。だが、彼は幸せだった。携帯で話をする時を思い浮かべて頂きたい。人でびっしりの駅のホームから離れ、人気の少ないエレヴェータの近くあたりに移動する。するとどうだろう。携帯から発せられる音は極めて鮮明になり、実に聞こえやすくなる。ヒカルにおいても同じことが言える。すなわち、彼は図書室に来て、久しぶりに、己の存在の声を聞いたのだ。それは実にかよわいものであるから、普段は聞こえないものの、まだ死んではいない。

「俺は、三坂タクヤについては、いやというほど知っている。ということは木本カオリに秘密が握られているに違いない」

繰り返すが、ヒカルはカオリの名前しか知らない。

「それでもいい。これから知ればいいのだから。実際、彼女は私みたいにレッテルを貼られているだけで、まだ、本当の姿は誰も知らないのかもしれない」

そこで、不意をついて図書室となる。この学校の図書室人口は皆無に等しい。大抵は外に出ているし、僅かにいる本の虫は本は買うものと思っているから、わざわざ足を運ばない。なぜ、そんなところにヒカルが来たか。

あまり知られていないことだが、図書室の裏の顔は、生徒の個人情報が集まるデータベースである。ここならだれにも知られずに、人調べが出来るというわけだ。

「木本カオリ……あった」

引き出しの中よりいでし、一枚のカード。それこそ、カオリの貸し出しカードである。ヒカルは、図書室係であることに今一度、感謝をした。もし人が来ようと、怪しまれない。

カーテンを開け忘れ、電気もつけ忘れていた。実に閑としている。

まず目に飛び込んだのは、びっしり書き込まれた文字だった。たくさん借りた証拠だ。

まあ、間違いなく学校で二番。一番は、この私。

「二年生の一学期だけかあ、ここにきてたのは」

読んだ本の名前も、貴重な情報。一冊一冊チェックする。  
早速、文学少女の期待は砕け散った。

「少女マンガのタイトルみたいだ」

そうつぶやくとヒカルは、カードに書かれた本を、本棚から引っ張り出し、でんと机の上に積み重ねた。彼女の過去の情報が、塔のように聳え立った。

一応目は通してみたが、どれもこれも、表紙には女の子のキャラクターが陣取り、中身は私立中の学園物らしい。そもそも、何故こんなに冊数があるのか。需要はあるのか。謎だらけだ。

頭の中に広がるおとめチックな世界にいよいよ食傷し、本から目を離れたところ、図書室には、三人の人が散らばって座っていた。

「いつの間に来たんだ？カーテンくらい開けてくれよ」とヒカルは思い、変な疑いを立てられないよう、とっさに本をカウンターの下に隠した。

図書室に入ったことを気付かれないほど、存在感が無いのは、逆にすごい。ヒカルはそんな彼らを、心の中で「図書室難民」と名付けている。

図書室難民とは、クラスを追われ、図書室に住み着いた人のことを指す。休み時間になると、大抵の男子は歓声をあげて校庭でスポーツに興じる。一方ごく少数の男子は教室にとどまろうと試みる。ところが、周りを見渡すと残っているものは女子ばかり。ここでどう過ごせというのだ。肩身が狭すぎる。仕方なく教室を捨てて、図書室に逃れてきたというわけだ。

「なあ、少し聞きたいことがあるんだが」

カーテンを開けながらさりげなく、窓際の一人に切りだす。大丈夫。人から頼みごとをされて、不快に思う人は多分いない。

「木本カオリを知ってるか」

「ちょっとわからないですね、すみません」

「それなら」

ヒカルはカウンターからおとめチックな本を抱えてきた。

「この本が、読まれていたのを見たことあるか」

「ああ、それなら」

図書室難民の一人は心当たりがあるとみた。

「見たことありますよ。女子でしょう。最近はやせ姿を見せないけれど、そうですね、一年くらい前は良く来てましたね。一人で」

怖い怖い、とヒカルは思った。安全と思える図書室でも、顔は覚えられているのだ。

「あなたが斉藤くんねっ！」

ぎょっとして見渡したが、いるのは男ばかり。飛び跳ねる白ウサギのようにかわいらしく弾んだ声の出どころと思える人はいない。

「どこ見てるの斉藤くん。ここよここ」

やわらかな温かみを背中に感じるのので、振り向いてみた。一瞬、薄暗い図書室が、華やかな学校生活の表舞台とつながったとさえ思ったのも無理はない話。ヒカルの背中に触れる手は、モミ

ジのように小さくて均整がとれている。まっすぐ伸ばされた髪は、図書室まで、太陽の光を運んで来ていた。人の髪は、太陽の光に当たると茶色に見えるが、彼女の髪は、いつでも茶色なのだろう。

顔は、見なかった。というより見られなかった。見識のない女子から声かけられるというこの状況が、ヒカルにとっては未知であり、良く飲み込めない。彼女が口を開くまでの数秒間、ヒカルの脳は無秩序に回転していた。「自分が何かしら女子と関わった結果、女子から話しかけられるのは、道理に合う。だが、何もしていないのにこんなことになったのはなぜなのだろうか。理由がなくちゃだめだ。理由が無いと、自分はこれからどう生きればいいのか、わからない。ビック・インパクトはどうなる？」と思った後、

「斉藤君は、木本カオリについて、調べているんでしょ？」

「あ、それが何か」

ヒカルは仕方がないので顔を見てしゃべった。見ると、器量よしの彼女の顔には、心の底から浮かびあがった笑みがあるのが分かる。

「ナオヤから聞いたよ。タクヤとヒカルはカオリのことを本気で調べようとしているって」

そういうことか、と変に張りつめた気が、音もなくほどけた。

「ただ、三坂くんは見つからなかったけど」

あたりまえだ、学校休んでいるのだから。

「教えようか？カオリがどんな人なのか。うち、同じ部活だったから、結構知ってるよ？」

何故、わざわざ教えてくれるのか、そこの説明が省かれていたものの、にこにここと、笑みを浮かべるその顔に、裏はなさそうに見えたのだ。

「お願いします」

図書難民も、読む手をとめて、本の陰からじっと見つめている。

「どこからはじめようかな。まあ、一言で言うなら、カオリは、列の端っこかな。あ、分かりにくかった？つまりよ、うちらは、廊下を歩くときは友達同士、横に並んで歩くわけ。カオリは\_\_\_これはうちのイメージだけど\_\_\_その列の端っこみたいだったんだ。ほら、うちみたいに、列の真ん中にいる人が、急に一人ですっといなくならないでしょ？だって横に二人もいるし。その点、カオリは.....いつの間にかくっついていて、いつ離れてもおかしくないような.....そんな感じだったかな。

もっと基本的なことから言ったほうがよかったね。カオリは、うちらが、二年になった春に、ここにやってきたんだ。転校生ってところかな？あんまし話題にはならなかったけど。クラスはね、ずっとうちと一緒にじゃなかったけど、部活が同じだったから。そこで知り合ったというわけ。まあ、部活はさぼることも良くあったよ。それにさ、カオリは、一年の時の、きつい練習を経験しないで入ったから、すぐなじんだとは、言えないところもあるね。うちも正直よく思ってたし。カオリが学校にこなくなっただけ知った時は、あまり不思議には思わなかった。これくらいかな、どう？参考になった？」

「はい、とても」

それにしても良くしゃべる。自分の気持ちまで、余計に盛り込むし。

ヒカルを聞くと、本当に嬉しそうな笑みがきらきらこぼれた。

「これで、結構調査も進展を見せるんじゃない？」

と、得意満面で。最後のサービスのようにヒカルの顔の近くに行くと、口元に指を立てて、

「ナオヤにはこのことは秘密にしておいて」

とだけささやき、あれよあれよといううちに図書館から姿を消した。

「ああ、目の保養になった。あんなの最近見ないから」

と、図書館難民の一人が、まるで心地よい夢から覚めたばかりのような、陶然とした表情で言った。

「ヒカルさん、でも、彼女あなたに気があるわけじゃないですよ？ミズナさんが、ヤマキと付き合っているのは、大変有名な話です」

「そんなのは別にいい」

本当だ。ヒカルは自分に関係のない他人の話には、一切合切興味ない。

「ミズナさんしか知らない情報を、大量にもらえただけで、大満足だ」

こうして、カオリという人物を、より高いところから見渡せた気が、ヒカルはしていた。

## 第三章

---

### 第三章

空を仰げば、すでに日も暮れ、くろぐろとした暗闇で満たされている。道路に等間隔に並べられた電灯もともり始めた。

俺は歩いている。手に提げているインコ入りの鳥かご以外はなんも持たずに。

俺は歩いている。かれこれ三十分ばかり。

俺の歩いているところを見た人の一割が、インコをペットショップから持ち帰ろうとしているところだと思い、残りの九割が、頭がおかしくなっていると思うだろう。いや、俺もどうしてこんな行為に及んだのかのかよくは分からない。衝動と叫びたいのか。

今まで俺はほぼ毎日のように学校までの距離を飽きもせず一人で歩き続けていた。二年とちょっと。だが俺は、明確な理由をもってして、果たして歩いていただろうか。別に学校にいる誰かが、俺が学校に行くことで得するわけでもないし、喜ぶわけでもない。俺の行為に、意味はない。

目をアスファルトの地面からあげて回りを見渡してみる。夜になったばかりの街をそぞろ歩く人々。その一人一人に、何かしら歩く理由があるのだろう、と思う。だがしかし、彼らが歩くことを望んでいる人がいるだろうか。少なくとも俺は望んでいない。彼らは勝手に自ら、歩く理由をつくりだして義務付けているだけに過ぎない。深く考えず学校に通っていた昨日までの自分だってその一人だ。学校に通うのは義務、そうかもしれないけれど、それはあくまで、日本全国何万人の少年少女に課された義務で、俺だけのための物じゃない。

俺は前を見る。暗闇の中で、その先だけが、赤々と、燦然と輝いている。交差点の赤信号によって止まっている車の後ろ側のライトがそうさせていることは分かっているにしても、美しい景色に力がわく。

俺が歩いている今が初めて意味のある歩きのかもしれない。俺の行きつく先にはちゃんと、俺を待っている人がいると、確信できるから。たとえ、待っている人が遠く離れたところにいようが、俺にはわかる。まるで俺が空高くまで飛びあがって、そのまま空中に静止したまま、他の人には見えない建物を、見ているように。

昨日の夜を境に、俺は意味のある存在になった。そして上へと昇り始めたのも。

そう、あれは帰りの電車の中だった。

☆

もちろん、電車で学校から帰ったわけじゃない。一度家まで帰って電車で一度塾に行き、そして帰路に着いてから。

夜遅い時間でも、俺はヤマキの言ったことがずるずる後を引いていた。俺の知らないカオリについての何かしらをヤマキは知っているのだろうか？そう考えれば考えるほど、俺の知るカオ

りが、俺自身が作り上げた妄想であるように思えてくる。これは大変な問題だ。もし、本当に妄想だとしたら、俺の生活が危機にさらされることになる。

様々な邪推によって混乱をきたしていたものだから、京王線調布駅に止まっていた電車の、開きっぱなしのドアをくぐった時、なぜ、あの人の隣の席だけが不自然にも空いているのか、深く考えもしなかった。その若い女の人は座席の端を陣取っていた。俺がその隣に座ったのは、言うまでもない。なにしろ疲れていたからだ。肉体的にも精神的にも。

俺は席に座ってすぐに、今日授業で用いたノートを手にとったのち、眺め始めた。俺は阿呆だ。あまりに集中するあまり、横からの視線にも気付かないなんて。

ノートで顔を覆いながら読んでいる途中、いきなり左の方から手が遠慮のかけらも見せずに伸びてきて、肩をゆすったことに俺が驚いたのも、当然と言えよう。俺は初めて横に目を向けた。何この女。見たところ大学生のようだけれども、髪は染めているし、肌は焼けこげているし、露わになった太ももには、黒で描かれたどくろが散りばめられていて、手の加えられようが、半端でない。くわえて酒に酔っているようで、へべれけの姿からは、知性のかけらも浮かんでこない。とはいえこの時間帯には慣れているから、こんな、関わりたくない姿をした人は何度か見ている。注目すべきは、俺の肩に触れたことだ。これが勘違いでない事は、すぐ明らかになった。

「君、君」

と、衆人環視の中ではっきりと言ったのけたのだ。もちろん、俺は、こんな見るからにして悪印象の人とは知り合いでないし、関わりたくもない。何を言い出すのだろうか。キョウカツか。逃げようと席を立とうとした時には既に彼女の右腕が俺の左腕をつかんでいた。

「君のノート、見せてもらってもいいかな？」

と言って俺の右手からノートをひったくったかと思うと、ペラペラとページを繰り始めた。ちなみに、俺のノートの教科は古文だった。

へえへえへえとずっとにやにやししながらノートに目を通していている間、俺は恐ろしさのあまりただ見つめていた。

「こう見えてもあたし、大学で国文学を研究してんの。国文学って知ってる？日本の古典よ一言でゆうとね。源氏物語とか」

と、いきなり嬉しそうに話し始めたのだ。俺は初め、彼女の言っている意味が分からなかった。こんな雅とはかけ離れた女の人が、平安時代の女性と同じ言葉を学んでいるのがあまりにも予想外だったから。彼女が平安時代の女性と話しているところを想像できない。と思うと彼女が周りに聞こえそうなほど大声で言った。

「ねえ、あたしら友達になろうよ！古文が好きな者同士」

はあ？まだ、出会って数分しか経っていないのに、何てことを言い出すんだ、この人は。やはり酔っていて頭がおかしくなっているに違いない。そもそも俺は、好きで読んでいるんじゃないから、古文。

「あたしはもう、友達だと思っているからね！ねえ、訊き忘れてたんだけどさ、君、どこの中学校なん？教えてよいいっしょ？」

「上宮中学校ですけど」

これくらいなら言っても大丈夫だろう。さすがに彼女が中学校に忍び込んでくるわけではないし。

「上宮中！！あいつと同じところじゃん！」

「あいつって？」

「木本カオリよお」

息をのんだ。まさか、こんなところで、またカオリについての事実を拾うとは。ラッキーにもほどがある。

「てことは君、カオリの知り合い？名前は何中の、君」

「三坂タクヤです」

不思議な縁に気付けば俺のテンションも上がっていた。

「おおおおお！うっそ！やった！こんなところで会えっとは、私の運もつきまくりだわ」

そう言うと、彼女はまたにやにやし始めた。癖なのかもしれない。

「実はねえ、タクヤ君、カオリから、君あてのふみを言付かっているんだよお。ほらさ、平安貴族は、相手への想いをうたにこめてのち、ふみでやり取りしたことは知っているべ？何しろ好きなんだものね古典がさ」

「手紙見せてもらってもいいですか」

「当然じゃん君宛てなんだから。てかさ、手紙じゃなくて、ふみじゃね？古文好きならさ」

はいっ、と渡しながら大声で叫ぶものだから、周りの静かな目線が音をたてずに集まる。

「今見ていいよ？あたしは見ないから。どうぞどうぞ」

見たいのは山々だけれども、それより聞きたい気持ちの方が幾分強かった。

「あなたは、カオリとどういう関係なんですか？」

いつの間にか、自分から話しかけていた。

「あたし？そうね、言わなくちゃだよな、友達なものな」

少しの間後、彼女は言った。

「あたしは、カオリの姉さんをしておりますのよっ、てね、ははは。これからは姉さんって呼んでオーケー」

姉さん？いや確かにお姉さんしか年齢的にあり得なかったけれど、カオリを見てきた身としてはこれは意外。というのも人間は、兄弟の上か下になるか、はたまた一人っ子になるかによって、大体の人格が形成される、というのが、俺の持論だから。兄弟の上に立つ者は得てして、どこか抜けている、愛らしい人であることが多い。おそらく、弟妹の上に立っている安心感が、日々の注意力を削ぐからだと思われる。逆に弟妹は、しっかりやさんが多い。兄姉を抜かしてやろうという気概に満ちているからだ。そういう論理で俺は組み立てられていたから、カオリは絶対に姉さんだと思っていたんだけどね。まあ、今日の前にいるカオリの姉さんの方が、よっぽど抜けてはいるけれど。

「姉目線から言えば、君はふみを貰うにふさわしい人だと思う」

「お姉さんはふみ、見てないでしょう」

「大体分かるわそんなもの。カオリの中に、

君が巢食っているんでしょ。君を見てわかった。だって君はすごくいい人なんだもん」

「え？俺、別に何かに秀でてるわけでもないし、気も利かないって自分でも思うし、ましてや人からなんてほとんど」

「ねえ、ちょっと君」

お姉さんの俺を見る目には、真剣な、何かが宿っていた。誰かに乗り移られたのかと思ったほどだ。

「あたしは、君をいい人って言ったの。すごいとも、かっこいいとも言ってない。そこ勘違いすんな。でも、君はいい人だっていうの、それは確か。だって、あたしと友達になってくれたんだもの」

タイミングがいいのか悪いのか、俺が降りる駅に、それでも電車はいつも通りに止まってくれた。潮時だな、そろそろ。

「俺はもうおりるんでさようなら」

すっかり俺は、お姉さんがカオリと、同じ家族だということを忘れていた。

「何言ってるの。あたしも同じ駅で降りるに決まってるじゃん」

改札口への階段を伝いのぼりながらまた彼女は長広舌に話し始めた。彼女の口から言葉は、詰まることなく滑り落ちていく。

「そう、やっぱ君はいい人だよ。あたしはさ、電車に乗る時は、必ず横の人に話しかけるんだ。たとえ素面の時でもさ」

「ええ？迷惑になるんじゃないですか？」

「だって、せっかく隣に人座ってるのに、じっと読書だとか、ゲームとか、自己完結的なことさせといたら、本当に世間から消えちゃいそうな気がするっしょ？あたしは、そういう人を救いたいなとか、前から思ってたんだよね。ま、当然だけど、こんな格好の人に心を開く人はいなくてさ、友達もできなかったわけ。電車では。君はさ、あたしみたいな人とでもさ、話してくれんじゃん？だからだと思うな。カオリの中に、君が巢食ったのも」

そしてちらっと振り返った。

「君は？君はカオリに巢食われてんの？」

わけのわからん質問に俺は、どう答えればいいのか戸惑った。相手は何しろお姉さんなのだ。身内だぞ。こうなったら、質問をぼかすしかない。その時、いままでどこかにほっぼってた新聞部としての自覚が、俺の下に舞い降りてきた。

「そんなことより、カオリは、学校に来ていないんですけど、どういうことなんでしょう？」

お姉さんは、まさに得たり賢しといった顔つきで言った。

「巢食っているじゃん。よかったなあ。ふふふ。カオリの詳しい状況は、彼女自身から聞いた方がいいんじゃない？ほら、そのふみのこと」

そう言って俺の手につつまれている手紙を指さしただけだった。

俺たちは、人の頭で黒々となった改札を抜け、すっかり真っ暗な外の空気を吸った。横にいるお姉さんも、暗闇に飲み込まれたと思うくらいに夜に溶け込んでいる。

「あたしも、巢食っている？君の中で」

今度こそ俺はうなずいた。お姉さんは、やはりカオリの姉さんだけあって、とてもいい人だった。いい人としか言い表せないけれど。でも、あんな風貌じゃ、大方の人にはわかってもらえないだろう。

「巢食っていますよ。でも、あんまり、個人的には巢食うって表現がよくない気がします。変えた方がいいかも」

それと、お姉さんの印象も変えた方がいいかも、と心の中でつぶやいた。

お姉さんは、くすっと笑った。

「じゃあね。タクヤ君。カオリによろしく」

彼女は手を振りながら去って行き、少ししたらもう、闇の中だった。

俺も家へと足を向けた。手のなかには、カオリからの手紙がちゃんと収まっている。その手紙には、カオリの、何かしらの俺に対する気持ちと、カオリの姉さんの、俺に対する親密さが巢食っているに違いない。

### 三坂タクヤ君

こんばんは。突然ですがわたしが、このような手紙を書くことになったのには様々な理由があって、わたしが三坂くんの携帯の番号を知らないというのも一つの理由だし、紙とペンがすぐ用意できたことも理由です。

さて本題へ。三坂君、わたしが今いるところに来てくれるかな？今わたしは、すごくつらい事が続いています。周りの人たちは、わたしの欠点しか見ずに、わたしは責められたんだけど、わたしは、「これがわたしだ」というものを、欠点以外で出したいんです。このままでは、何の色もない周りの人と、仕事の出来具合で比べられてしまいます。そうして劣っているとみなされたわたしは、どう自分を好きになれるのかしら？頭に浮かんだ言葉を書き連ねているだけなので、ごめんね。

わたしは、ミズナとか、むかしの友達を、呼ぶことを考えました。でも、みんな、わたしがいなくなっても、ふつうに変わらず生活してるのはみんな、わたしより、もっと仲のいい友達が、いるからです。その様子は窓から見えていました。そう、言い忘れたけど、わたし、今高い塔のような所にいるから、下の様子は見えるんだ。でも、わたしは、わたしらしさが、あると思いながら結局、それを証明できるものは何も下に残せなかったみたいです。

長々と書きちゃったけれど、そこで三坂君に書こうと思い立ったのです。わたしたち、話したのは二度かもしれないけれど、三坂君ならきっと、わたしが、欠点を持っているだけじゃないって証明してくれるように思ったから。

だから来て。わたしのいる所に。わたしは

自分で外には行けないって決まりだから、来てもらうしかないんだ。場所は、メールで送ろうと思います。三枚目の紙に、かいてあるから、そこに送って下さい。大丈夫。わたしは三坂君の動きは見てとれるから。

## カオリ

家に着くが否やこの手紙を開けて呼んだ俺の頭には、カオリが、わけわからん塔で、今にも押しつぶされそうになってもだえ苦しむ様子が浮かんでいた。お姉さんがにやにやする話ではなかった。姉としてどうなんだ、そこんところ。妹の苦しみを理解しているのか。カオリはやっぱりかわいそうだ。ずっと一人だったなんて。まあそんなことはさておいて、俺に白羽の矢が立ったことへの嬉しさもあったことは、お分かりのことだろう。本当に、この手紙が無かったら、俺も何か、世間のお役に立たないものは、生きる資格はないというような、この世界のすぐ地下を流れる大きな潮流に押しつぶされるところだったかもしれない。でもカオリは、ちゃんと去年のことを覚えていてくれたのだ。俺が今日の今日まで、濁流に吞まれながらもすがるようにして大切にしてきたあの出来事は、カオリの中でも生きていた。人と人を強く結びつける体験、それを俺は、ビッグ・インパクトと呼んでいる。おそらくこのことがビッグたるゆえんを理解しているものは少なからう。おこせたものは、もっと少なからう。だとしたら、俺はびっしりとこの世に住まう人間という同じ種族の中で、特別な存在と言えるかもしれない。特に優れているとか、そんなんじゃない。 「君は、いい人だよ」 そう、そうなんだよ。ありがとうお姉さん。いい人こそが、いい体験、ビッグ・インパクトを経験して、もっと幸せを感じ、そして、人々を眼下にとらえなくては。つまり人を知るということは、高みにのぼって、人より多くの景色と、下でざわざわとしている、自分より無知な人とを俯瞰することなんじゃないか。確かに、高く上ると、一般の人は下に遠のいて、距離を感じるかもしれない。でも、逆にそれは誰にも本当の自分を知ってもらえずに、周りから距離があった人と、同じ目線に立てることもある。同じ高みで出会った人から、自分だけに生きがいを与える。そうしてくるくる、高い塔を登るのだ。

カオリ、塔に今いるんだよな？俺も、場所は違うが同じ高さの塔に立っている。だから、人から遠のいたって心配しなくて大丈夫。逆に近づいたから。そう、叫びたかった。

俺のように、地面にいながら塔に立っている人は、果たしてどれだけいるのだろうか？

## ☆

特別な人には、集団は合わない。翌日、まだ冷めやらぬ興奮のまま起きた俺だったが、それでも今日は学校がある。別に行かなきゃ住む話だが、特別な事情の時に限って、理解されないものなのだ。カオリのように。俺は顔だけ出してリビングをのぞく。いつもと同じニュース番組が、朝のテレビの画面を陣取っているし、家族の様子も、テーブルの席の位置もいつもと変わらない。日々は連続してるから。俺だって、手紙のことを隠せば、昨日今日で何の変化もない人にまぎれて一日過ごせるかもしれない。逆にいえば、何の変化もない今日という日を一変させる「起爆スイッチ」は今まさに、俺の手の中にあるってこと。「起爆スイッチ」を手の中に隠した俺は、でも見かけはいつもみたく一日を開始した。

「お早う」

既にテーブルに着いている家族に声をかける。

「お早う。早いね、いつもと比べて」

俺の起きる時刻までよく覚えている母だけでも、俺の手の中の起爆スイッチには気付かない様子。押したらどうなるんだろう。

ご飯をよそって席に着くところもいつも通りをよそう。なかなかもどかしい作業。これから、昨日のように、学校に行って、運動会練習に貴重な我が身を置くのはもっともどかしいけど。スイッチを押すタイミングにこまっていた。しかし幸運は、既にこのリビングに来ていたのだ。俺がご飯をもりもり食べている、まさにその時母の口から飛び出したのが、まさにそれ。

「タクヤ、今日は学校休んで家にいてくれる？」

「え？ちょっと待ってよどういうことそれ？」

「お父さんが、期限が今月いっぱいのパアの国内旅行券を、電車で隣になった人からもらったんだって。予定が合わないってその人言ったみたい。ゴールデンウィークも終わったし、混んでなさそうだから、箱根にでも行こうって。で、カズトは連れてくことにしたんだけど、タクヤは勉強忙しいし、ほら、ピーちゃんの世話もしなくちゃならないじゃない？ちょっと頼めそうな人もいないし。だから、タクヤには家で留守番してほしいんだけど。三日後には帰ってくるから。わるいわね」

「えっ？それは別にいいんだけどさ、なんで学校休まなくちゃならないわけ？」

この、まるで夢から出てきたようなこの状況が、果たして現実かどうか、思わず確かめるように聞いた。

「それは、」

母はあたりを見回した後、低く声を落としてささやいた。

「昨日、うちの周りを、不審な女の人がうろついてたみたいで。もし泥棒とかだったら怖いじゃない？訊くところによると、髪は染めていて、肌は焼けてて、とにかく、ちゃらちゃらした若い人だったみたいよ」

「それはこわいね」

いつもの俺のように、おどけて見せた。

「じゃあ、たのんだよ」

お土産買うから、とカズヤ、うちの弟が元気づけてくれたようだが、俺はすでにハッピーだった。まあ、誰もわからないだろうけど。

そして十分もたち、行ってくる、という声とドアが、がちゃんと閉まる音を聞いたときから、俺は一人の身になった。

一人になると、普段は感じる事のない俺の存在感が、いやがおうにも部屋に充満してくる。俺には、もう一人、喜んでくれる人がいる。嬉しい事にね。「大丈夫。三坂君の動きは見てとれるから」あの言葉を反芻する。となるともしかして、カオリ、てかあの姉さんが仕組んだんじゃないか？これはあくまで仮定だけど、俺はそうも疑ってしまう。カオリは塔の上に立って、俺を必要としたために、わざと俺が彼女の所に行けるように仕組んだんじゃないか？そして姉さんは実

行したと。そうに違いない。

壁にくくりつけられた時間に目が行く。針は八時の位置にある。俺は、学校には、箱根に行くってことになってるから、今すぐにここを飛び出すのは危険すぎる。この時間は、まだ通学途中の学校の生徒がわんさかいる。その間に俺はカオリにメールを送った。俺は、カオリが来てほしいと思っているところに行きさえすればいい。

しばらくして、カオリからきた返事は、場所の他に、もう一つ条件が追加されていた。カオリが、夜の当番として、一人で起きている明日の深夜がいい。その夜じゅうに話をしたい。ということでそれまでにいろいろ準備を済ませてきてとのこと。だけど俺はもう一人身だから、自分のやるべき使命は、もう整っている。今日は、家でじっと期待に胸を膨らまし続けていけばいいのだ。そう思っていた矢先、ふと背後に目が行った。

インコ。

それこそが最大の行く手を阻むものだった。

ピーちゃんを残して去るわけにはいかない。空のような色の小さな鳥の周りをぐるりと、白い金網が張り巡らされている。だからピーちゃんは白い檻を出ることはできないし、俺はピーちゃんがいる限り、ここを出ることはできない、そういう二重鎖。何ていうことだ。

俺は落胆する。そして、茫然と中から出られない鳥を見はじめる。

ピーちゃんが、金網の中にある鳥型の小さい自由な空に、見えるまでのその沈黙の数時間の中で俺が行きついた答えは、「ピーちゃんが生きていることを家族は望むけれど、ピーちゃんをずっと籠の中に幽閉しておくことは、本人も、また他の誰も望んでいない」ということだった。それは自分も当てはまることかもしれない。というかむしろ、ピーちゃんの空色の羽毛に勝手に自分の姿を映しこんでるだけだ、たぶん。俺は無垢な空色の小鳥の瞳をのぞきこむ。お前は、本当は何をしたいんだ？生きて、何がしたいんだ？人を喜ばせること？でもそれが、家族だけだったらさ、お前は、家族でしか必要とされていないんだぞ。もっと広く世界を見なくちゃ。お前は見たことないかもしれないけど。そおして、どこか遠くに自分を必要としてくれる人がいたら、俺らの存在価値は、ずっとひろがるんだ。

これは、ピーちゃんに話しかけてたのか、自分に言い聞かせていたのか。

☆

そうして今、午後七時を迎えようとしている。路上で。インコとともに。まあ、ケータイも大事だから、ポッケの中にあるけども。

数時間に及ぶ、精神的彷徨の末に俺は苦肉の策にたどり着いた。

それは、唯一と言っていいほど数少ない家を知っている知り合いに、インコを預けるというものだった。その知り合いの名は、石上と言う。俺より先に学校を去った男で、今は引き籠りをやっているとか。

彼とは一年近く会ってないが、と言うか家にずっといる彼に会うすべもないが、まだ石上の記憶は鮮明に記憶している。まだ、彼と同じキャラをした人が現れないので、とってかわられるこ

とが無いからだ。そして彼は変人の座を守り続けている。

石上は、普通の人には目もつかないような、氾濫するネットの情報の海の片隅から、知名度が限りなくゼロに近いものを引っ張り出して、それを偏愛してた人、というイメージ。よって彼と話が合う人はほとんどおらず、自分から彼と話を合わせてみたい、と言う人はもっと少なかった。さっきほとんどと言ったのは、一度だけ、俺と彼とに偶然にも共通点が出来てしまったから。残念なことに。

エレヴェータを降りた先の目の前に現れた絶望的に長い廊下は、彼が住む場所へと続いている。廊下をつきあたったかと思えば、実は右にまだ続いている、それも行ったかと思うと、今度は廊下が左に折れながらも続いている。つまり、廊下が直角に曲がりながら、くねくねと進むものだから、いつになったら終わるのかわかりやしない。俺と石上の腐れ縁のように。なんで、助けを求める破目になったんだろう。もうほんとに衝動としか言えない。廊下が続く限り、俺はこんな苦悩に頭を悩まし続けなきゃならない。

着いた。廊下の突き当たり。そして石上の住むところ。

俺は意を決してチャイムを鳴らした。

カオリ、見張っててくれ塔の上から。俺はお前のために、ここに来たんだから。そして、たとい声が届かなくても、俺の行為は正当で、意味のあることだと言ってくれ。

もちろん、そんなことまでメールに書くような仲じゃない。あくまで俺とカオリは巢食いもの同士なんだ。姉さんの言葉を借りれば。

そして、何も言わずにドアだけが開いた。

## 第四章

---

### 第四章

「ほんと大変だったんだから」

と言うのを聞いて、わたし、席を譲りながら、頭をさげて、目は上向きに、

「ごめんなさい」と答えると、

「そう、だって実際にタクヤ君の家の監視するのあたしがやる破目になるし、タクヤのお父さんに券渡したのもあたしでしょ」

と、いう住之江のさざ波のようなささやきが、暗闇から押し寄せてくる。

昼にいた、モニターの部屋の、一つ上に上がったところにある寝室には今わたしたちがいるんだけど、まさか寝室があるとは予想外。

彼女の口から出た言葉はあたりに寝ている人を起こさないよう、音を立てず耳に滑り込んでいく。夜の帳はわたしたち、二人をつつみこんでるから。

「でも結構あたしはラッキーでさ。タクヤ君とも、予期してないのに電車で合うのは、良きことじゃん？それに、タクヤのお父さんに、

ここに来た時にあってきたの。すごくね？いや、あたしがすごいんじゃないって、ここのシステムのこと」

わたしは目を丸くしながら言う。

「じゃ、ここのモニターの機械は本当に、幸福にさせる機械なんだ」

「そう、だから、カオリちゃんは人を幸せにするきかいを与えられたわけ」

わたしは不安げになって、

「そんないいきかいなのに自分のために、このきかいをつかってるわたしは、やっぱ失格じゃないかな？ここにいるの」ときく。

だけどミユキさん、気にする様子は見せず、口元をにやつかせながら言う。

「かつて、ブレイズ・パスカルはこういったの。『人間には三種類いる。神を見出すもの。神を見出そうと努力するもの。そして、神を見出そうともしないもの』」

「そうやって、難しい人を出したら、わたしを説得できると思って愉しんでるでしょ」

「いやいやいや。あたし、マジで信じてんの。

てか、多分真実。しんじつづければ、しんじつ。だって、何億人いる人が、誰でも同じ人間って考えたくないっしょ？いい人もいれば

よくない人もいる」

いい人、よくない人。三坂君と、ヤマキを思い浮かべた後に、わたしは言う。

「でも、わたしは神とか、あんま信じてないんですよ。サンタさんなら信じてるけど」

そこで彼女がにやにやしたのは、たぶん、声を立てずに思いきり笑いたかったから。

「だってここは日本だよ？しかも二十一世紀ときてる。神を信じてる人は、そりゃ少ないっしょ。欧米じゃあるまいし。つまり神はカオリちゃんにとって代わられたんだよ」

わたしは、ずっと何の役にも立ってない、と思うことばかりだったから、その話は、ことのほか信じられなくて。

「わたしが、人の役に立っているなんて、思ったことない」

「だからさ、今やってんじゃん」

「え、でも、わたし三坂君とか、お姉さんとか、わたし関係の人ばかりを幸せにしてるだけだし、わたし」

すると彼女の瞳が何かを訴えるかのようにわたしを捉えるから、彼女の言葉が、目から発せられたみたい聞こえるの。

「カオリちゃんは、あたしとタクヤ君に巢食ってる。それこそが、神なの。いい？人は、心のどっかで、自分が何のために生きているか、考えてるものじゃん？昔はそれが神だった。だから人は地獄に堕ちないように、いい人になってた。今は、それが、カオリちゃん。あ、あたしとタクヤ君の中限定の話だけど。そんなはなしはなしでしょう、とは言わせないよ。カオリちゃんは、神を見出す人と、努力しない人、それをちゃんとわけること。マジでそうしないと、タクヤ君いい人なのにもったいないよ？」

「わたしは、幸せにしたい人だけ、幸せにすればいいんですか？」

彼女はうちうなずきつつ、

「そう！今日はね、あたしを、幸せになったんだ。さっきは文句ばっか言ってたけどさ、本当は、君たち二人の役に立てて嬉しかった。あたしが、意味のある人だって、心から思えたもん」と、ほんとに見てて、嬉しそう。

今わたしのそばにいる、ミユキさんは、当番以外の塔の従業員が、みんな寝静まってしばらくして、わたしの元へ、よくはわからないけど、う～んまあ、何かしらの手段を用いて忍び込んで、わたしをゆすってベッドから起こしたというわけ。これにはほんとに大助かり。わたしが勝手に始めた「三坂君に幸福集中作戦」、一人で始めた時は、すごく不安だったんだもの。ミユキさんは、この作戦、さっきのようにすごく褒めてくれたから、嬉しいっていうか、ホッとして感じ。やっぱりわたしは、前に読んだ本の主人公、唯一(ゆい)ちゃんみたいに、自分の手で、何かしら変えたかったんだなあ、と思う。

そして隣のミユキさんは、もう帰り支度を始めてる。

「帰る時に、見つかったりとかしませんか？だってこの塔、普通の人は入っちゃいけないから、騒ぎが起きるかも」

彼女は布団から出るのを少し止めて言う。

「あ、そうか。もうほんとは入っちゃいけないんだよね。てか見つかったら別の意味で騒ぎになるし。ま、だいじょぶっしょ。まだ幸運が残ってるよ、たぶん」

さっきまで、一応彼女はわたしの布団に身をうずめて、それでも形だけ隠れていたんだけど、もう今はすっぱりと抜け出て、今にも帰る準備が出来てる様子。

「じゃあね、自分のやりたいことを、ちゃんと貫いてよ、カオリちゃん」

「ずっと三坂君に幸せを届けていたら、ほんとに塔まで来られるの？」

彼女はこくりとうなずく。

「うん。たぶんね。そして、見せつけてやりなよ。ちゃんと、自分が巣食っている人がいるって。まあ、あたしもできるだけ協力するけど、三坂君をここまで、引っ張ってこれるのはカオリちゃんしかいないよ？」

「え？」

わたしが思ったのは、ミユキさんがいったことが、前と後とで違うということ。

「三坂君、姉さんにも巣食われているって言ってなかったっけ？」

ああそれね、とミユキさんは、抜け殻のようになった自分が入っていた毛布、それを見下ろして言った。

「タクヤ君はね、あたしがカオリちゃんの姉さんだから、話しかけてくれて、だから友達だって、言ってくれたんだと思う。正直」

そうなんだ……

「じゃ、ばいびー」

するする、音も立てずに引き戸を開けて、できた、ほんのちょっとのわずかな隙間になったところ、そこにミユキさんは細い体を滑り込ませて、暗闇に消えていった。わたしも、毛布の中の暗闇に、身体を落ち着かせて、就寝。

☆

翌日、すでにロビーのテーブルに置いてあった、空気のようなパン二つをほおぼって席に戻ると、昨日の出来事が夢のように、画面上には、ミユキさんの姿が。迷わず今日の幸福を追加するわたし。

そして目を移せば、三坂一家宅。ちょうど三坂君以外の家族が旅行へと旅立つところ。ああ良かった。ちゃんと作戦は上手くいったんだ。その三人に、幸福を与えるか否か。それはちょっと難しいけれど、わたしはこういう結論にたどり着いたの。「三坂タクヤ君が活着ていることは、望まれているけど、この家にずっといることは、誰も望んでない。」わたしなんて逆に家から出てくれるのを望んでいるし。

するとメールが。三坂君から。

もしかしたら、俺のことが、上から見えているかもしれないけれど、今日、塔に行けることになった。くわしい場所を教えてくれるかな？

あっ、あと、木本は今、塔の上で一人だと思ってるかもしれないけれど、塔は、一つじゃないでしょ？スカイツリーのぞいたら日本だって、同じ高さの塔は必ずある。だから、俺は、カオリと同じ、空中にいる気分だから。

うれしい…あっ、でも残念。一番危険じゃなく来るには、わたしが夜の当番の時じゃなきゃ。

三坂君に幸福、与えられないもの。それに見張れないし。明日来てもらお。っと、わたしはメールした。

そんなわけで、午前中は意味のないほど時間の流れがゆったり。たまに、竹西さんという、昨日の、わたしの上司っぽい人が、ソファの後ろをただすっと横切るほかは。三坂くんも家から出ないしね。気を滅入らせるのは、わたしが見続けている光景。わたしの目には、たくさんの人の家、それに人がたむろする店たくさん。そこには何千何万の人の営みがあると思うんだけど、わたしはそれを見ること、それしかできないんだもの。しかもモニター越しでしょう。ミユキさんは、わたしに、自信を持って言ったけど、こうしてみるとやっぱ無理。わたしが出会ったことのない人達が、こうして何の苦もなく、生活しているところを見ては。会ったことある人も、わたし無しでもほとんどが、全然困ってないもん。わたしがいない学校。そこには昔よく話したミズナもいる。

わたしが転校して間もないころ、わたしは、何かに脅える小動物みたいだった。それは、たぶん、今みたいに、わたしがいなくても、いままで学校に通っている人たちは普通に生活してたことを知っていたから。わたしが入る、隙間が無いくらいにね。テニス部に入ったものの、小さい頃に患った、人見知りの持病があったから、存在してないみたいな、雲をつかむみたいな空虚な気持ちしかなかったかな。休み時間も、入って初めはその大体を、妙にすいてる図書室で、一人で本を読んで過ごしてたもの。てかそこくらいしか、わたしを受け入れてくれなさそうだったから。

ミズナは、そんなわたしに、部活ではじめて声をかけてくれた人。ただ、彼女自身、フレンドリーということもあって、テニス部はもちろん、クラスの垣根すら越えた、人脈が、わたしの来る前から育ち済みで、それに、彼女、とても顔がかわいい。ヤマキナオヤ、っていう男子とすごく仲が良かった。一年生からだから、わたしが慣れ染めを知る由もないけどそのヤマキって人、そのミズナに見合う人で、運動がすごくできてかつ、先生や生徒にも、自分の発言をずけずけと言えるほどのリーダーシップの塊。ほんと、あのじしんが羨ましいよ。どこに震源地があるんだろうね。とにかくだからわたしは、うすうすだけど分かってはいたの。彼女に占めるわたしの意味がどんなものかは。

でも、今は違う。あれは過去の話。今わたしには、自分のために思って動こうとしてくれる人が出来た。三坂君。きっと三坂君がいなかったら、こんな無意味な毎日、ほんと気狂っちゃいそうなもの。あ、そう言えば、ミユキさんから聞いた話を思い出す。

「カオリちゃん、夢に会いたかった人が現れるとさ、あたしらは、あたし自身会いたいと望んでたから現れたって思ってんじゃない？でも、平安時代は違ったんだよこれが。昔の人は、誰かが自分のことを想うあまり、その誰かが自分の夢に出るって、そう考えてたんだわけ。嘘だと思ったら伊勢物語見てみ？」

今ならわたし、昔の人がそう思ったわけが分かる気がするの。人は、みんな心の中で、誰かに必要とされたいんだよ。今も、平安時代も。これ言ったら、ミユキさん、どういう感想持ってくれるかな？

学校をずっと見ている限りでは、三坂君もみんなあまり話題には出ていない様子。わたしと同

じようにね。それはとても悲しむべきことでもあるかもしれないけど、わたしは生きる希望を感じずにはいられない。彼の良さを自分だけが知っているということは、私自身の特別感を引き立たせてくれることでもあるから。きっと彼の夢は、わたしだけが出てきて、そしてその夢自体を独占できるかもしれないね。

☆

いつも通りの退屈な一日が、ところが夕方ごろに破られてしまうとは。わたしが、円形脱毛のように、建物がくりぬかれてできたような運動場を、ぼうっと眺めていたところ、三年生とおぼしき人が、昇降口からぞろぞろと、くるわくるわ。しかもみんな体操着を着ているから、白一色が、学校から吐き出されている様子にも、見ようによっては見えるかも。その中にわたしは、ひとり、みんなの前に出て、ピクミンみたいにクラスを整列させている人を認めた。

ヤマキナオヤ、その人。

どうしたことか、後から次から次へと、その後他のクラスがぞろぞろ集まって来て、運動場は、白一色で占拠された。二人三脚を十人位でやってリレーするのがこの学校の伝統なのは知ってたから、運動会練習なのは、容易に想像つくところ。

ということは、ナオヤが、学年全体、三百人くらいを動かしたことに、なるってということなんだよね？なんていう力なんだろう。学校は彼を中心に回っているっていても過言ではないかも。でも、去年と比べて練習始めるの、異様に早くないかしら？

わたしは画面の横に備え付けられてるイヤホンに耳を押し込んで、耳を澄ます。

「みんなダラダラするな！確かにみんなは、貴重な時間が無駄になっていると思うかもしれないけど、これが最後の体育祭だぜ？この三組の、クラスに貢献しよう。いいか？分かってるか？この競技は、誰か一人でも欠けちゃ出来ないんだ。だから、自分だけ抜けよう、なんて思ったりするんじゃないぞ。その一人のエゴが、みんなに迷惑かけんだ。みんなクラスの一員って自覚あるんなら、ちゃんとやれ、わかったな！」

ヤマキの発言は、競技中、みんなが声を合わせて足踏みしてるときでさえも事あるごとにとびだし続けている。

そうしてるうちに、三坂君が、突然外出を始めたことを、わたしは気付かなかった。不覚にも、あまりにも学校に興味を言っていたせいで。まあ、わたしのおっちょこちょいは今に始まったことじゃないけど。

でもあああああ、どこに行ったんだろう？どうしよう？もしかして、今こっちに向かっているの？

わたしは彼が、ゴチャゴチャした街並みに、埋もれてしまったなんて、考えたくもない。あの二人三脚リレーの真っ白な軍勢にまぎれているのが、いやなくらいに、それはいや。絶対にいや。って、あ、そうだ。三坂君は言ってたっけ。「俺はお前と同じくらいの高さくらいの空中にいる」、だったっけ。ほんと、そうであってほしいな。

とりあえず、幸福が切れる日付が変わる時間までに、見つけなくちゃ。絶対に。



## 第五章

---

### 第五章

「久しぶりだな、まあ、入れよ気にすんな」

俺が、二度と来まいとした石上の居城に足を踏み入れたのは、ほんとに確かに久しぶりかもしれない。これでよく、人を通せるなど、感心するくらいにゴミゴミしているのは相変わらず。一週間分の色とりどりの服が派手に脱ぎ散らかさせているんだと俺には見えるが、彼にとっては、床にしつらえたたんすのつもりなのだろう。とにかく、長居はしちゃいけない。

「どう？」

石上は、ブルドーザーのように机の上から様々を雪崩落とした。

「最近僕が何してるか、知りたい？」

「いや、俺今日は頼みがあって来ただけ」

「家に入っておいて、それはないでしょタクヤ」

物の残骸に埋め尽くされている中で唯一、生きていた彼のコンピュータ。そのスリープ状態を彼は解き、ヴン、と機械が息を吹き返した。

「タクヤに見せたいものがある」

その言葉とともに画面上に現れたのは、インターネットゲーム、つまりネットゲと言ったところだろうか。やはり彼が、三大俳人ならぬ、三大廃人になった噂は本当だった。嘆かわしい事に。

「こんなのばかり、毎日やってるのか？」

俺は憐みすら込めた。今、カオリのために自らをささげている自分と比べ、彼は何て言う自己中で、みみっちいんだろう。

「ああ、そうだけど？ほら、ちょっと見て」

仕方なく画面を見ると、馬だかなんだか、よくわからないものが走っている。その行く先にはコインがあって、彼がボタンを押すたびに、じゃらんじゃらんと音がして、左上の数字が大きくなっていく。

で？

そりゃ俺だってゲームはする。けどわざわざ見せなくてもいいだろ。こんなの自慢にする、その意味が分からない。てか何このゲーム。俺知らないし。いかにも石上が、選びそうな、マイナーなゲームではあるが。

「どう？すごいだろう」

「いやさ、俺やったことないから、すごいとか、その基準がよくわかんない。すごいって言う人がいなかったらさ、それはすごくないんじゃないの？」

「分かってないな」

石上はゲームを一時中断すると、画面右下の、「ランキング」という所をクリックして見せた。ふあん、と画面が切り替わる。

「見ろよ、ランキング。世界暫定一位の僕」

確かに、一位には、堂々と彼の本名があるけども。

「お前さ、世界世界言ってもさ、競技人口何人だよ？このマイナーなゲーム」

「何だよ？やったこともないやつには、この面白さはわからんだろな」

「お前は、」

その時気付いたんだけど、俺はいつもよりものを言える度胸があるらしい。

「お前は、自分が、一番になれるような、そんなもんばかりやってるだけだろ。そしてそれを人に伝播させようとしてるときてる。この際言うけど、そんなもの、この部屋から出たら、ただのゴミだ。お前が一番とったところで、世界は何にもかわりゃしない。だってお前の記録は現実世界の記録じゃなくて、お前が今どっぷりつかってる仮想世界の記録だものな。だからだろ、お前が学校をやめたのも」

この考えは、別に今始めたことじゃない。

この前来た時も、もっと前からもううすうすと気付いていたことだ。でも、俺は今まで今回のように、石上に直接言ったことはなかった。だって、こう言われるのを恐れていたから。

「タ、タクヤはどうなんだ？世界を変えているのかよ？」

俺がまさに期待していたものそのものを、石上は、のどからしぼりだした。

「そうだよ。今日、俺が来たのも人のために、なることだし」

このセリフも、今ならさして、嘘でもない。

「何だそれ、教えてくれよ、」

これぞ眼鏡の哀願。この部屋の力関係が、そこでぐるりと回った。この密室に、やっと現実が吹き込んで、石上の目を覚まさせたいらしい。

「タクヤ、ほんとに、人を救っているのかい」

ここにきて俺は後悔せざるをえなかった。口を滑らしたと。そもそも俺がここまで心がふわふわ浮足立ってるのもカオリと俺にしかわからない秘密を、見続けて生きてるからで、これを教えてしまっただけは、その幸福も、水泡に帰してしまうではないか。

「なあ、答えてくれよ。僕だって、ここからでなくちゃって思ってるんだ。けど、ここから一歩足を踏み出せば、たちまちさ、その、ヒョウハクされちゃうじゃん？えっと、つまり、僕のほんのわずかしさ、人に分かってもらえずに過ごすことになっちゃうって意味。そんなので、自分の個性とか、自分が特別でだとか、感じられないでしょ？そうしたら、またこの部屋に逆戻りだ。だから教えてくれよ。タクヤは、誰の役に立ってるんだい？」

ちょっと理解できない。なんで、自分の情報を発信しないと特別感を抱けなくなるんだ？石上は。だって、秘密を教えた方が個性は薄まっちゃうと思うしそれに俺は逆に、俺だけしか知らない、巢食いがあるから今、自分を肯定出来てるのに。ともかくだ、これに真っ向から反駁(はんぱく)しても、彼には理解できないし、俺はカオリとの秘密をさらけ出すことになる。そこで俺は、少し嘘を、吐いてみようと思いついた。きっとカオリは許してくれるはず。だって、カオリのプライバシーのためでもあるんだから。

「俺は、まあ、そうだな、お前みたいに、学校に来なくなった生徒を、こうして更生するよう説得してるっていえばいいかな。その活動を、していることが、俺にとっての幸福だしな」

「うわあ！てことはさしあたって今は、俺が学校に行くようになることが、タクヤにとっての幸福ってわけか！」

「うん...まあ...そうかな」

「じゃあ、僕は、人の役に立てるのか！ボランティアってすごい。される側とする側、どっちも幸せにするなんてなあ」

石上は、ほんとに、愚直なまでに直情的。だが、俺を必要とはしてない。あくまで彼は、自分がより役に立つ人間になって、自信を得たいとしているまで。ならば、そろそろ切り出してもいい頃合いか。ほんとに言いたいことを。

「ちょっとさ、もう一つ、別件で頼みごとをしてもいいか？」

「何でもやるぜ。もっと俺が役に立てるなら」

「ありがとう」

「それはこっちの方だって。で、何？」

「それはこれなんだけど」

俺はこのタイミングまで、こっそり石上の死角においていた、籠を持って来る。

「ああ、確かに鳴き声はしてたよ。きゆるっきゆるってね。まるで呼んでるようなやつをさ。

いや、可愛いじゃないか。青くて、小さくて」

なんだ。気付いてたか。

「明日、ちょっと遠いところまで、俺の前のクラスの、今学校に来てないやつを迎えに行くんだ」

「すごいな」

「で、このインコを預かってほしいというわけ」

「今？明日の学校では？」

「あ、行く気になってくれたのは有り難いんだけどもさ、もう朝には出発してるから」

「休み？学校明日、」

「あるけど、俺だけ休む」

なぜだかは分からないのだがその瞬間、石上は目を見開いた。

「ふーん。家の人に預けないの？」

「俺以外みんな旅行で箱根」

「いいよ。いや、あまりに急だったから、びっくりしちゃって。インコの飼い方くらい知ってるから心配するな。いつ帰るんだ？」

そうだ。決めてなかったなそういや。その塔から、カオリを救いだすから、多めに取って一日かな？

「明後日中には」

「おっけ。てかさ、どうせ家帰っても人いないんだろ？ここで食ってけよ。すぐここを降りたらコンビニあるし」

「え、いや、お前こそ、お母さんは？」

「働いてる。ほら、夜のパートの方が、大変だけど、高いだろ」

「共働き？」

「する必要ないと思うんだけどね。俺への戒めか、あるいは圧迫ってところだろ」

確かに、もし俺が学校を休んだのを仮に怪しいとにらんだ人がいても、ここならその目を逃れられる。そう言った打算的思考が頭の中を陣取り始めた。そしてもう抗えないほどに、それは強固で強い。

「じゃ、お言葉に甘えるわ。ありがと」そう、言わしめるほどに。

「俺はまた人の役に立てる！ そうだよな、タクヤ？」

「あ、ああ」

「いや、この際俺の所に泊まっていけよ。そうすりゃ、インコの世話もギリギリまでできるし、それに家を引き返す必要もないし」

「それは、さすがに悪いだろ」

口ではそう言ったが、石上にとっては全然迷惑でなくて、むしろ幸福であることくらいもうわかっている。

「全然。思ったんだ、今日。やっぱ人と接してないと、現実にて生きる意味が、ほんとに分からなくなっちゃうって。だからさ、役に立たせてくれよ、タクヤ」

「ああ」

俺は結局そこで夕飯を食べ、そしてすぐに予備の布団を引っ張り出して来、そこに身をうずめた。身を隠すように。確かに、食べてすぐ寝るのは失礼なことだけど、石上の場合は別。というのも俺が起きていれば起きているほどに、石上は俺の心の核にまで、ずぶずぶ、入っていくから。そして中から彼が引っ張り出すものはカオリのことまで及ぶ虞もあるし、逆に俺には、彼のどうでもいい事まで産み付けられる可能性があるのだ。もしそうなったら、カオリのように、俺の所に石上が巣食った、そう言いあらわされるのだろうか？俺は、石上の布団に入って、そして見慣れない天井の一点を見つめながら、一人そんな思いに囚われた。そして次第に石上家そのものに、呑みこまれる気すらしてきた。

あああああいやだいやだいやだ。自分が嫌だ。なんでこんなこと、カオリ以外のこんなことを、俺は考えなきゃいけないんだ？俺が、石上に、適当な嘘をついたばかりに。何？俺は人の役に立とうとしてるだって？んな馬鹿な。俺は人の役に立とうなんて、そんな単純で機械じみたこと、考えたことないし。それなのに、俺は嘘をついて、俺じゃない俺のイメージを、石上に植え付けちゃったんだ。

黙っておけばよかったのに。

それに、石上は親切と来てる。この親切って言うずるい鎖が、がんじがらめに俺に巻きついているのだ。確かに、人に親切にすること自体は道德にかなってることを否定はできないさ。でもその正しい事を、押し付けられてしまっただけで、俺も見合う正しさで以てお返しする以外に道は無くなっちゃう。行動が、制限される。まったく、誰のための正しさだよ。俺の正しさの基準は、絶対的にカオリ。カオリのための正しさしか、俺は正しいって認めないから。俺にしかない、俺だけの正しさ。

要するに、石上は、なんか、個性が無い。ヒョウハクヒョウハク言ってるけどさ、もうすでに、

ヒョウハクされちまってるよ。

俺はくらい寢室で、獣のように息を止め、耳をそばだてる。石上は当然のごとく起きている。彼は、学校に明日から行く、そう公言した。まるで自分が正しい事をしたかのように。でもさすがに、この時間まで明日の用意ってことはないだろう。さだめしゲーム。ほんと懲りない。

ゲームも、スポーツも、勉強もおんなじ。どれも、ちゃんと目標になるような正しさがあるから、順位がものをいってくる。そういうもんだ。俺は、そのどれもに、残念ながら、才能を発見できなかった。それなのにカオリは、たくさんいる人間の中で、俺に手紙を送ってくれた。それに、お姉さんはこう言った。「タクヤ君はいい人」って。俺は、才能には選ばれなかったけど、人には選ばれたんだ。

そんなこと、きっとおそらく、形だけの正しさを求めている石上、あとヤマキなんかにはわからないだろうし、わかってたまるかって感じ。俺には、俺にしかない正しさの基準があるって、そう思っていたいから。それっておかしい？

俺はポケットの中のケータイに触れた。万感の思いを込めて。これが俺の宝ものなのだと。これに、支えられているのだと。

「明日になったら、すぐここを抜けだそう。こんなとこいたら、カオリに近づかない。いつまでたっても」

そう俺は呟き、暗闇の中で固く目を閉じた。

そして、彼の部屋の暗闇でなく、自分の瞼の暗闇に、俺は身を置いた。

眠れない。またさっきの考えが、ぐるぐるまわるまわるまわる。

「タクヤ君て、いい人だよ」

その一言を、お姉さんの一言を、思い返した後にはしかしもう、眠りの中に落ちていた。

たぶん、その後なんだろうな。石上が、俺の枕もとに音もなく、忍び寄って来たのは。手にはカメラを持って。

むろん知る由はないけども。

## 第六章

### 第六章

ヒカルが、一日で、余りある収穫を得たことは既に述べたとおりである。

翌日を、そして迎えたが、ヒカルがはなから睨んでいたように、カオリもタクヤも学校に姿を現すことはなかった。ヒカル以外の間では、昨日と今日で、別に何の大きな変化もなかったかもしれないけどもヒカルでは、内面的変化が、それこそペルニクスのどでかいのが起きていたのだ。つまりヒカルからカオリへの同情の波が押し寄せ始めたのである。「木本カオリが、何かタクヤとの間に、特別なものでもあるんじゃないかと、思っていたが、どうも違うみたいだ。彼女が、図書室に足を運んでいたり、転校生だったことを考えたら、誰でもわかるだろう。つまりだ、彼女は、心にさみしさを抱えていて、それにタクヤが、いち早く気付いたってことに違いない。と、いうことはこの長い欠席も、学校にいたことが、ひどくさみしかったからなんじゃないか？」

ヒカルは、もうそれで決定とした。他に考える余地なんぞない。で、今は早速新聞部の連中に、結果をいち早く報告すべく、急ぎ足で、廊下をつっきっているところなのだ。タクヤしか普段は話さないけども、一応新聞部にも、ヒカルと同じクラスの人が若干混じっているから、難しい事ではない。昨日は練習にも出たし、気兼ねなくドアを開けるとヒカルはすぐにアライの姿を認めた。彼も、本職は野球部だが、PRのために新聞部に居座っている。近づきがたい存在だが、今はヒカルに情報という取り柄が生まれたことにより、対等に話し合えるというわけだ。

「ちょっといいか」

「何だ、ヒカル」

「あの、木本カオリの失踪に関してだ」

「は？」

もうアライにとっては、過ぎ去った事となっていたらしい。

「お前、まだそんなの調べてんのか？別に何もでやしないさ。そんなことより」

アライは優越感を、たっぷり顔に、浮かべあがらせながら言った。

「俺はもっとすごい特ダネを、仕入れて来てんだけどね」

ヒカルは自分が阿呆であったことを、またいやでも知ることになった。だいたい、カオリが孤独ゆえに、学校を休んだなんて、そんな新聞にすべき突飛なことでもないじゃないか。

「で？どんな内容だい」

「驚くな。破局だ破局」

「えっ、誰と誰の？芸能人？」

「ばかだな、学校新聞なら、学校で起きたことにきまつてるじゃんか。ヤマキと、ミズナ。昨日の帰りに、大げんかしたらしくてさ」

「ええっ」

よかった。ぎりぎり知っていたことに。その二人ともと、その関係を。

「まあ、記事にはできないだろうけど。さすがに」

でも良く考えると、ヒカルの中で何かが引っかかる。「ミズナさんとヤマキ。どちらも最近、てかこの二日間で知った人だな。なんで知ったんだ、私は？」

その時、ヒカルの脳内で、一昨昨日からの一連の出来事、または情報、それが瞬く間に結びつきあい列をなし、今まで見ることもなかった新しき見解に、ヒカルを運んだ。「もしや、木本カオリが、関係してるんじゃないか？」

もし、ヒカルをよく知らない人が、この場面を見たら、何という名探偵ぶり、と勘違いしてしまうかもしれないが、それは誤りだ。ヒカルは、木本カオリつながりのことでしか、その人を見てこなかったから、二人の共通点に木本カオリを見いだすことくらい、それこそ朝飯前、ピースオブケーキというわけなのだから。

確かにアライの方が、良い情報を得ていたが、ヒカルにはその情報をさらに有効活用できるような手立てを得ている点では一枚、上手かもしれない。

そして昼休み開始の時間が告げられると、まるで誰かに命令されてるかのように、ガタン、と席を飛び出し、ヒカルは一組、つまりミズナがいるクラスへ向かって一目散に駆けだした。

「ヒカル、最近どうしたんだろう」

「さあ。図書室？でも、そんな急いで行くってほどの所じゃないし、それなら今までと変わらないしな」

「恋人でも出来たとか」

「出来ちゃったって？まさか。あんな自己中なヒカルに先を抜かされるわけないし」

あの事件前とは教室も少し変わったようだ。ヒカルが跡を発った教室にはその波紋がメレンゲのように立ったままだった。それもヒカルの行動が、異常なまでに急に変化したからだろう。残されたものの話題は、あろうことかヒカルのことで持ちきりだったのだ。

ヒカルが、おそらくヒカル自身しかしかその意味を知らない疾走を続けていた時、心の中も、心地よい風が吹いているかのような開放感を覚えていた。「みんなっていう全体のためを思って行動するより特定の、人のことだけ思って行動する方が、ほら、ずっと楽しいじゃないか。誰も俺の走るわけを知らないが、実は不登校の人を知る上で、恐ろしく役に立つことをしようとしている。誰も知らないってところがまたええじゃないか。こっそり善を施してるような、そんな気持ちだ、このすがすがしさは」と、いうような。

クラス間の行来きが禁じられているためもあり、廊下は立ち話好きな女子に、埋め尽くされつつあったが、その間を縫うようにヒカルはひた走り、ものの一分で、遠く離れた一組に着いたのだ。そしてさっそくミズナの姿を見つけた。昨日、自分に話しかけてきてくれ、その後彼氏と大喧嘩したような人への第一声をどうしたものか、ヒカルが考えあぐねていると、突然カチン、とミズナと目と目が会った。ミズナはさっと席をはずすと、ドアの方ににこやかに、歩み寄ってくる。昨日のつらい出来事は、つゆほども見られない。

「わあ、斉藤君だ。おはよう」

「お...はよう」

「何しに来たの？」

上目がちにヒカルを見ながら、そう訊いた。

「破局の原因は、木本カオリが関係してる。

そうでしょう」

ちゃんと訊きだす紳士的なステップは、午前の事業中に、ノートにまとめながら考えていたのに、全てヒカルの頭から抜け落ちてしまったらしい。

「え……？ちょ……、いきなりすぎでしょさすがに。びっくりしたあ。そう、うち、もうナオヤとは別れたのはほんと」

「で、その原因は何なの？」

「あ、昨日の図書室じゃないから、安心して。

本当の原因は、そう、言ってたよね？正解。

カオリのことかな。そのことで帰り道、ナオヤと大げんかしちゃったから」

「木本カオリの、どんなことを？」

「新聞にするの？もし聞いたら」

「いや、木本カオリの失踪の真相を明らかにしようっていうのが目的だから」

「カオリの真相？うん、そのことで喧嘩したんだ。ナオヤがヘンなこと言うんだもん」

「どんな？」

さっそくメモを手取る。

「図書室いこ。こんなところでは話しづらいでしょ」

そうしてヒカルはミズナのあとを追うように、再び図書室に向かったのだ。

「じらすなあ、君は」

ミズナは、振り返り、そして後に続いてふわり、と亜麻色の髪がなびく。そしてこう一言。

「すぐ終わる話じゃないからね」

「どういうこと？」

「ナオヤが、カオリをどう見ていたっていうことを説明するにはね、去年にあった出来事を、話さないことには始まらないの」

それは、つまり、ビッグインパクトじゃないか。そうヒカルは思い当たった。「だとしたら、タクヤが見ていたカオリが、間違っていたっていうのか？」

結局昨日に続き、ヒカルとミズナは図書室に足を踏み入れた。今日当番の人は当然のごとくさぼっていたから、図書室難民、ヒカル、ミズナと昨日と同じ顔ぶれがそろったというわけだ。

「おい、カーテンぐらい開けたらどうなんだ」

まだ薄暗かった図書室に、ヒカルが光を差し込もうとすると、いきなりその腕をつかまれた。見るとミズナが、ヒカルのそばに、すり寄っているではないか。

「いいよ。閉めたままで。あんまり目立っちゃ困るし」

それなら、と、ヒカルは二つある図書室の扉、そのどちらから見ても死角になる、扉の間の席を選んだ。

そして、ミズナが正面に座ると、ヒカルは、

有頂天になった。「いよいよだ。木本カオリ失踪の真実に近づけるかもしれない。なにしろあん

なに、カオリは俺しか知らない、みたいなたいそうな口吻で以てヤマキはタクヤに言ってたくらいだからな。どんな秘密を抱えてたんだろう？まあ、今日から私の秘密になってしまうけど。はは。それにしても、他人の秘密とは言え貴重な情報を無料で提供してくれるミズナさんは、何と言う心の広い人なんだろう。まるで太平洋じゃないか。裏が無い事を祈るばかりだ。」

そして、今度こそは、筋道をちゃんと頭の上に思い浮かべたのち、ヒカルは口を開いた。

「まず、ヤマキの話をしてもらえる？彼が去年、カオリとの間に何があったか」

「えっと、秋くらいに開催された、球技大会は覚えているよね？」

「あ、ああ」

球技大会。ヒカルにとっては思い出したくもない代物だ。この、スポーツが出来る人を、明らかに優遇するかのよう大会が、そもそも出来たきっかけは、体育祭が五月に早々と、やってしまうから、とそういうことになっている。二学期は、音楽祭があるだけで、スポーツ関連の行事が欠けているから、付け加えなければならないと。だがヒカルは、年一回の体育祭で、もううんざりなのだ。それが無くとも部活や、体育の時間に、スポーツが出来る人が輝ける時間は十分に保障されているのだから、年二回は、逆に多すぎる。球技大会はだから、スポーツが得意な人が、スポーツが得意な人のためにつくったものだと、ヒカルは前々から見ていた。それ以外にも、冬のドッチボール大会だとか、春のサッカー大会などスポーツが出来る人だけが活躍できる行事が、たくさん創設されたことによって、不得手なヒカルのクラスでの居心地は、悪くなるばかりだ。

ミズナの一言で、ヒカルは、去年の暗澹たる思い出から、現実に戻された。

「そこで、事件が起こったみたい」

「どんな？」

「うちも...あまり詳しくは聞かされなかったっていうか、後の方は頭に来てたから、よく覚えてはいないんだけど、カオリが、わざと手加減して、バスケをしたんだって」

「ヤマキと木本カオリは、二年の時は、同じクラスだったってこと？」

「うん？あ、そうだよ。言ってなかったか。ごめんごめん。うちはちなみに別のクラスだったけどね」

「てことは同じチームだったってことか。ヤマキと、木本カオリと」

「え〜っと、そうじゃなくて、まず、六チームつくってそのクラス内で、序列を決めるじゃない？その時のことらしいけど」

「なるほど。それと、手加減したって、分かったってことは、つまりその、木本カオリはバスケが上手かったってこと？」

「う〜ん、どうかな？でも基本的に、カオリは足が遅かったし、大体部活もさぼるくらいだったんだから、スポーツが出来るって、感じたことはないけどね。わかんない。もしかすると、バスケ部のヤマキにしかわからないことが、あるのかもしれないけど...」

「でも、手加減くらいで、そんな怒る？普通」

ミズナが、むっと眉間にしわを寄せる。せっかくのいい顔が、もったいない。

「いい？ナオヤはね、バスケ部のエースかつ、部長なんだよ？もしナオヤが手加減って、そう思

ってるんだったらさ、本当はナオヤと同じくらいか、それ以上の実力をカオリが持っていることになっちゃうでしょ。それなのに手加減したってことは、明らかに、ヤマキが、部長であるって、その面目を、立たせるためにやったとしか思えない。だって、序列を決めた後は、ほかのクラスの、同じ序列の所と闘うことになるから、他クラスにも、ナオヤが負けたことは、全部わかっちゃうでしょ？それは確かにつらい事かもしれない。でも、でもカオリは、ナオヤを見下してたんだよ。自分より弱いて。ナオヤは、バスケしか取り柄のない人なのに」

「ヤマキ、かわいそうだな」

「てか、カオリがひどすぎるんだよ。そんな人に分かるくらいに、あからさまに手を抜くなんて。それに、ナオヤをずっと見下してたのは、もう、人間として、どうなの？」

確かに、そうかもしれない。ヒカルは今まで、確固として持っていたカオリ像、いつも一人ぼっちで、あまり人に一目置かれるところが無くて、落ちこぼれの転校生。そのイメージが、揺らぎつつある。「というか、今まで私は、カオリに、ただ自分の姿をあてはめていただけだったのだろうか？」これはヒカルにとってショックだった。「私は、真実に、実は一歩も近づいていなかったんじゃないか？」

ミズナから出た怒りの渦は、さらにはナオヤにまでその矛先が向けられた。

「大体、ナオヤもサイテー。カオリのほんとの顔に、気付いていながら、普段一緒にいるうちには、何も言わないって。何？人間が腐ってるカオリとうちを、一緒にさせたかったっていうの？うちも腐れて？はっ、ナオヤの方こそ腐ってるし。もうほんと、ぶちのめしてやりたい」

鈍感なヒカルでさえも、ミズナが、ナオヤの素性に、罵詈雑言を浴びせかけるうちに、普段の天使のような風采がはがれおちて、ミズナ本来の姿が、見え始めたことくらい分かる。ヒカルはただただ驚きあきれ口も開けたままだったから、ミズナが、そっと漏らした一言も、あけっぴろげの耳と口で、見事にキャッチした。

「ナオヤもうちを騙してたなんてね…。ま、これでお互いさまだけど」

そして今度は急に落ち着きが戻ったミズナは、顔をあげ、ヒカルと、また向き合った。

「斉藤くん、ちょっとナオヤに伝言頼んでもいい？」

「もちろん。こんなに情報をもたらしたことへのお返しをしなくては」

「で、何をナオヤに伝えれば？」

そこでミズナは周囲の図書室難民を見渡してのち声を落とし、蛇が舌から出すような声でこう言ったのだ。

「ナオヤにこう言って。うちは、付き合い始めた一年のころからずーっと、ナオヤを心から好きだと思ったことはないしこれからだつてずーっと、ナオヤを好きだなんて、思わないって」

てっきり仲直りの言葉だと思っていたヒカルの頭上に、雷電が直撃し、その振動は、図書室を、はるかにこえて学校全体にまで、広がっていったとヒカルには思われた。

それもヒカルが単に、揺れていただけだが。

「こんな衝撃を、学校全体に響き渡らせたならもう、その時は学級崩壊を免れない。いたずらに人を驚かせるだけの情報を、隠蔽しておくのも、新聞部である私の使命に他ならない。」そう思って口を開こうとしたとき、ミズナの目をまじまじと、みてしまったのが間違いだったとは。ヒ

カルの眼前にたたずむ少女には、さっきのどす黒さは、微塵も感じられない。「ひょっとして、あの時だけ、魔が差したというか、悪魔がとりついただけに、違いない。そうとも！」

気付いた時には、承諾の言葉が無意識のうちに口から滑り出していて、それに気付いてヒカルが己の軽拳妄動を悔やむうちにミズナはもう席を立つところで、

「ありがと。じゃね」

という声がヒカルの耳に届いた時にはもう、ミズナの姿はなかった。

「ヒカル、ありがとな。まさか二日続けて連れて来れるとは思わなかった」

振り返ると、図書館難民の連中が、ぐるりとヒカルを取り囲んでいるではないか。

「いや、でもこれは本当に、『暗黒少女組』が、存在しても、おかしくなくなってきたわ」

常連の一人、杉山がふっと口にしたのもヒカルは見逃さない。

「暗黒少女組？なんじゃそりゃ」

「ああ、俺たちがひっそり図書室で話し合っ、たどり着いた仮説さ」

脇にいたもう一人も、それに続く。

「この学校を、密かに動かしている組織のことだよ。いいか？奴ら、まあ彼女らは表立って活動はしない。その代わりに、彼女らは、

自分たちの思い通りの学校をつくりだすために、彼氏をつくるんだ。それも、ちゃんと全員で、闇鍋食いつつ会議を開いて、計画的にだ」

今度は、さらに隣の人に、リレーのように、発言権が回る。

「もちろん、本心から好きで、付き合いを申し込むわけじゃない。でも、気付かないよな？申し込まれた男どもは。しかも、その女の子が皆そろって美しいときている。まあ、美しい人だからこそ、その美しさを、自分のために、使いたくなるもんだよ。そして男どもは、女の子がそばに

いることで、一気に自信が生まれるんだ。もちろん、実体はないがな。そして、ちょっとそのそばの女の子がささやくだけで、学校の中枢部の選挙に、男どもは乗り出してしまおうわけ」

最後の一人の番が来た。

「そいつの自信に怖気づいて、大体みんな引いちゃうから、たぶらかされた男はみんな、学校の中核を、担うことになる。後は、その女子が、何か頼みごとをすれば、思い通りに事が運ぶ仕組みだ。それに暗黒少女組内で相談したあとで、彼氏にそれぞれが吹き込めば、多数決だって絶対に負けない。ほら、球技大会とか、ほかのスポーツ大会だって、そうやって出来たんだ。中核を担う男子は、スポーツマンが多いだろう？そうやって彼氏が活躍できるところを、増やしているのさ。裏の事情ではね」

まるで、個人個人の妄想が、図書室にて結集し、その後熟成されてさらにリアリティーを失ったような、そんなとんでもない代物だ。ヒカルの口から言うならば。本当に、阿呆である。この人々も。毎日集まって、こんなことしか考えていないというのか。

「実にくだらない妄想だな。自分たちに、甘い体験が無いからって、ほかの人にも無いというほどに、現実はそうキビシイものでもないはずだ」

「いや、ヒカル、あんたこそまちがったよ。全ての愛は、欺瞞に過ぎないさ。ひ、ひ」

三人目の男、ヤマグチは、そう、男も女も寄り付かないような笑い声を立ててそう口にした。「人間なんてそんなものさ。だから、俺たちは、こうして図書室にじっとして、あんたが連れてくる、女の子の表面上の顔だけを、みているだけで、じゅーぶんというわけさ。ひ、ひ、ひ」「え？じゃ、別にミズナさんのファンとかでも何でもなかったってことかい？」「当たり前だ。こんなよくわからん世の中、一人の人だけが、特別だなんだ言って、大勢の人間の中から引き抜くなんて無理な話だろ。

大体、人を完璧に理解することが出来ないんだから。まあ、唯一できっことっていったら、誰も知らない自分だけの秘密を、こしらえることぐらいだな」

話が終わった時、ヒカルは既に図書室を飛び出していた。聞くに堪えない話であったからだ。「確かに、身の回りに真実なんてないし、それは不安なことかもしれない。だが、真実を少しでも多く暴きだして、人々を不安から救うことこそ、新聞部の仕事なのだ。忘れるところだった...どうもあの図書室の雰囲気はよどんでいていけない。」いずれにしろ、ヒカルは、次にヤマキナオヤを訪ねに行かねばならない。ミズナからの悪意のこもった伝言を、伝えに行かねばならぬのももちろんだが、そもそも、カオリを知る上で、ヤマキは重要人物に指定されているのだから。そう、昨日思い立った自分だけの目的を、もっと大切にすべきなのだ。

## ☆

今回は、長丁場になるに違いない。と、そうヒカルは踏んだから、放課後の、全クラスそろって体育祭の練習をする今の時間にヤマキに会おうと、午後の授業で決めていたのだ。茶っけただっ広い大地にうようよしている人間の中から、ヒカルはヤマキの姿を探してみるが、ヒカルのクラスの所からは、見分けがつかない。「うん？おかしい。普段なら遠くからだってヤマキがどこだかわかるくらいに、目立っているんだが。ひょっとして、三人目の欠席者になってしまったのか？」

クラスの人を、死なせない程度にしか取ってないが、それでも一応休憩時間はやって来た。二人三脚の、十人版だから、気安く練習を抜けて休めないのだ。ヒカルは真っ先にクラスを抜け、運動場を横切って、ヤマキがいる三組に近づいた。それでも、クラスの一人一人に励ましというか、喝を入れている普通の光景は見られない。

「ヤマキは、今日学校に来てた？」

「え？どうだったかな？」

三組の中で、初めに目に着いた人は、そう言うと振り返り、ヤマキを探し始めた。

「あ、いた」

結局探し当てたのはヒカルの方だったのだ。

しかし、その「あ、いた」は、ひどく自信なさげに聞こえたかもしれない。

ヤマキが、ヤマキに見えなかったからだ。

確かに顔のパーツ、一つ一つをとってみれば、ヤマキそのものなのだがしかし、遠目でみると、本来のヤマキの持つ、風格というかオーラが、微塵も感じられないのだ。ヒカルはおそろおそ

るヤマキと思われる人に、接近する。ヤマキは、だが魂が抜き取られたように、漫然とした表情を崩さない。

「ヤマキか？」

「ああ、そういうお前は」

「斉藤ヒカルだ。新聞部の」

「ああ」

「どうしたんだ？なんか元気が無いように見えるが」

「それよりさ、何しに来たんだ？」

「実は、ミズナさんより伝言を言付かっている」

「ほう」

あまり期待していないといいが。

「ミズナさんは、君を好きだと思ったことは一度もないし、これからも好きになることはないんだとよ」

ヤマキは、聞いた後も、喜びもせず悲しみもせず、ずっと同じ表情を守り続けていた。

「だが、きっと心の中は、ひっかきまわされたに違いない。かわいそうに。」

「そうか。はあ。それじゃ俺はこの二年間、騙され続けていたと、いうわけか」

ヤマキが力なく笑ったその後もヒカルは何も答えずに、じっと見守った。どんな返事を口にしても、きっとヤマキを、傷つけてしまうだろう。

「俺はミズナに好かれていると思っていたのはただの妄想に、すぎなかったのか？」

「はっ、当然でしょ」

ヤマキの背後から、いきなり声が聞こえてきた。

「ミズナ」

いつの間にそこにいたのか、まぎれもなくミズナ本人であった。

「あんただってうちを騙してたんだから、文句はないでしょ？」

「じゃあ、教えてくれよ。なぜ俺を騙していたのか」

ミズナはヤマキに比べて随分と、背が低いのだが、ミズナはみるみる大きくなって、男子でも背の高いヤマキを優に超すほどの高さから、ヤマキを睥睨(へいげい)した……と、思うほどに普段の力関係が、ぐるりと回転する。

「あんたを、支配したかったから。ん？いや、この学校全部と、言ったほうが正しいのかな？」

男子女子の、スター的存在が、緊迫した空気の中、にらみ合う光景。まさに見ものではないかと、いうことで二人の周りはぐるっと、緊張した面持ちの生徒で埋め尽くされている。「面白くなってきたぞ。だが、不思議だな？三組の最高責任者、ヤマキがこんな状態だから、三組が練習を始めないのは分かる、うん。だがしかし、なんで私たちのクラスは練習が始まらないんだ？それとも、そろそろ休憩終了？せっかくだいいところなのに...」

「だってだよ？うちがナオヤと付き合っていた時、うちの中ではず〜っと、選択権が握られていたみたいなものだったもん。ナオヤが好きなフリをするか、それともほんとのこと言っちゃお

うかって言う二択。うちはその気次第で、いつでもいまみたくナオヤに絶望を与えることが出来たし、今まで思ってきたことは、ずっと、いつにしようか、今にしようか、って、ことだけだから。それが楽しみだったわけ、要は」

つまりは、ヤマキはミズナに踊らされていた、傀儡(かいらい)だったらしい、と、皆合点がいった様子。でも、そんなおどろくことでもない。だれしもが、操られているのだ。それが、美女であるとは限らないけれど。ヒカルはそういう思いだった。「だって二人を見物している野次馬連中も、ミズナに操られたヤマキに操られて、こうして体育祭練習に参加してるんじゃないか。」ヒカルは、人に操られたくない。いやむしろ、操られている暇が、ない。ヒカルには、ちゃんと使命があるのだから。そして群衆の中心では、まだミズナが、しゃべっている。なにしろ二年間も、本当の気持ちを話していないのだ。いくら時間があっても、話し足りないことだろう。

「それに、ナオヤを通して、何でも学校に要求を、呑ませることが出来るって、すごいことでしょ、ねえ？」

「お前に、操られてて、お前の願いを叶えていたわけじゃない。そうすることが、お前の願いを叶えることが、俺の喜びだったから」

「ばあか。それを操られてたっていうことだし。ま、でももう操りたくなくなってたんだけどね。だってもう、ナオヤは賞味期限切れだし」

「何だと」

「思い返したらどう？うちの望みが、あまりにも増えちゃったからさ、ナオヤが、クラスとか、学校とかに命令する機会もそれに伴って増えたでしょ？」

「ああ、だからなんだ？」

「ふふっ、まだ分からないの？あんたはもう独裁者みたいだったってこと。陰ではね、みんな反発してたから。斉藤君にはね、うちがナオヤと縁を切った理由が、昨日の喧嘩だった～って、言ってたんだけど、その前から、別れたかったの、実は。もうあんたもそろそろ願いを叶えられそうにないかなって。寿命？」

何てことだ。まさか、ヒカル自身も、ミズナに騙されていたとは。ミズナは、嘘で出来ていたのかもしれない。ここまで来ると。

「うちは、もう、ヤマキを見捨てて、新しく願いを叶えてくれる人の方を選んだから」

お～い、っとミズナが叫ぶと、まるで申し合わせたように、一人の男が、人を押しのけ押しのけ、衆人環視の中に、入ってくるではないか。

「サキハラ君。斉藤君と同じクラスで、学級委員を務めてる。ま、知ってるとは思うけど」

「当然だ。同じく俺も、学級委員だからな」

まさかのまさかでサキハラだ。覚えているだろうか。ヒカルのクラスで、練習を、やると言いだしたあの、学級委員である。「それでは、あの練習も、すでに仕組まれていたことだったのか？」恐ろしい事だ。

「おい」

文字ではあらわせないが、この時ヤマキは、怒りの底から湧きあがった声で、「おい」と言ったのだ。この凄みといたら。

「また、だますつもりかこんにゃろう。サキハラ、お前は騙されている。ミズナはお前のことを、道具としか思っていない」

「ぬぁに？」

当のヤマキにとっては予想外だったかもしれないが、この時ミズナの横にいたサキハラは、ヤマキの忠告を、有り難く受け取らなかったのだ。

「こんにゃろうはそっちの方だ、ヤマキ。ミズナにフラれたからって、そんな嘘抜かしやがって。俺が騙されて、ミズナをお前に譲るとでも思ったか」

ドゴッ、

「つつ～、何すんだ！俺はお前のためを思っ」

ドスッ、グホッ

さっきまではさっきまでで、それは熱気に包まれていた運動場が、また今度は違う種類の熱気がわきあがった。鉄拳を飛ばすサキハラ。あまりの不意打ちに、身悶えるばかりのヤマキ。中には本気で悲鳴をあげる人。面白半分で、二人の対戦を見守る観客もいる。大乱闘と化したこの運動場の中心で、不敵に微笑むミズナも、忘れてはいけない。

「おい、やめろ二人とも。君たちはまたしてもミズナさんに踊らされているだけだ」

ヒカルがいよいよ堪えかねて、焼け石に水とは思いながらも、戦場から、二、三步離れた安全圏から叫んでいた、

その時。

ヒュオオオオウンン、唸り声をあげながら、巨大な砂の壁が突然現れ、生徒たちがいるところへと、襲いかかってくるのではないか。と思った時には、見える景色は砂色一色になっていた。みんなサキハラとヤマキの戦いに夢中になって、気付かなかったのだ。

ビヒュウウウウオオオオオオオ

「ぐわっ！なんじゃこりゃ」

「目が、目がやられた」

学校の部活かなんかで、春と夏の境目の、丁度こんな時期の夕方に、ポーッと砂だらけの運動場に突っ立っていた人にはわかることだろう。そう、よくつむじ風が発生する。経験のある方は、よく思い出してほしい。その時、空は雲ひとつない晴天ではなかったか、と。そしてこの日も、例にもれず、かんかん照りだった。つまり、絶好のつむじ風日和というわけだ。

と、言うわけで、眼鏡をかけていたヒカルと、幾人かの幸運な人を除いた全員が、砂が目に入ってものが見えなくなってしまった。ヒカルは、この絶好の機会を利用すべく、行動に移った。気違いじみたように、靴を地面にこすりつけながら、ヒカルが生徒の周りぐるっと、いきなり走り出したのだ。たちまち、また新たに、生徒の回りに、もうもうと舞う大量の砂塵が誕生した。

「くそっ、見えない！おい！どこだヤマキ！」

サキハラが、立ちこめる砂の中で、めたらやったら拳を振り上げる。

ドゴッ、

「痛っ！ちょっと、何すんのだよサキハラ君！」

「どこだどこだどこだ！」

ズゴッ

「人違いだおいやめろ！巻き添えにすんな！」

いよいよ混沌に陥ったとみてすぐにヒカルは、ヤマキの腕をむんずとつかみ、その混沌から救いだした。

「こっちだヤマキ、行こう」

二人なき後も、砂が落ち着くまでは延々と、混戦が繰り広げられていた。ようやく事態が落ち着きを取り戻した時、ミズナは、はっとした表情になった。

「ナオヤが逃げた」

☆

一方、ヒカルはヤマキの手を引き、校舎内へ避難していた。土足で。長い廊下の、ほの暗い一角。目指すは、新聞部しか使わないあの部屋だ。つい一昨昨日、タクヤがカオリのスピーチをしたところである。

ガラガラガラ、開けてももちろん人がいるはずはなくて、静謐な空気だけしか部屋には無かった。がらん、としている。「人から離れて、自分のやりたかったことをする人には、誰にも手のつけられてない、こんな広い空間が、手渡されるのだ。」

部屋に入り、荒くなった息を落ち着かせがてら、ヒカルはヤマキを直視した。だが、思っているほどに、怪我はしていない。だが、この数分で、彼は、中身ほとんどを、ミズナに吸い取られたのだ。

「ヤマキ。すまない。私が本当のことを伝えてしまって」

「だがお前が言わなかったら、俺はもっと、ミズナに踊らされていたんだから、仕方ないだろ」

部屋は、二人の会話以外は無音で埋め尽くされていて、話を際立たせている。そして二人の白い体育着だってそう。ほんの数分前彼らの服は、逆にカモフラージュ的な役割を果たしていたのだ。着てるものが、ジャージか体操着かの、違いしかないあの白と、水色だけの世界にいた時は。だが今は、その白の影が、教室に浮かび上がっているのだから。

「だが、別にミズナに騙されてたと知った後でもな、俺の個性とかが、そんな全部なくなるってわけじゃない。俺には、唯一、バスケっていう取り柄があるんだ。ん？唯一？ま、いいけどな。あるだけで感謝せねば」

「そう、」

ヒカルは重要な要件を思い出した。

「バスケで思い出したんだけど、去年、カオリに手加減されたって話、本当か？」

ヤマキの顔からまた生気が抜け、しぼんでしまった。

「だ、誰からその話を」

「ミズナさん」

「馬鹿野郎、お前もミズナに踊らされているぞ」

「うっ、だから私に付きまとっていたのか」

昨日と今日、ミズナと話していた時の、ヒカルの有頂天ぶり。思い出すだけで、ヒカル自身でもおぞけが走る。

「だが、そう、俺は、まあ、そうだな。バスケットでも踊らされてたんだっただけなそう言えば。それを知ったのは、随分と昔の話だな」

「球技大会」

「そう、そうだ。思い出した」

「本当のことを、教えてくれ。私はミズナにも騙された。カオリも、わざとダメっぷりを演出してただけかもしれない。これではカオリ、タクヤ失踪の真実を、いつまでたっても見られない。まだ、私たちは、塔にすら登っていない。地上から、見えない二人を想像しているだけだ。そう、だから教えてくれ。カオリとのことを」

「俺は、カオリを蒸し返さなくてもいいと思ってるんだ。奴は、そうだな、大樹だ。ジャングルの、てっぺんに居座って、日光を全部横どりする大樹だ。バスケット部員でもないんだ。カオリは。それなのに、一度コテンパンに俺をぶち負かした。球技大会よりも前の話だが。俺は、衝撃を受けたさそりゃ。いつも睡眠学習で、寝ているのか起きているのかすらわからないような生活をしてる俺に、俺の、大事なプライドっていうか、陣地をやすやすとられてしまうなんてな。ま、その時はまだミズナがいたからな。俺が、無意味な人間だなんて、思わなかったさ。だがさ、今こうしてミズナが消えるとはっきりした。やっぱり、人間ってのは、絶対的な価値が我が身にないと、不安に感じてしまうってことをね。もうほんと、狂いそうだし！なのにカオリは、無駄なことをして、この俺の、俺の価値を消し飛ばしたんだ！俺はそんなカオリっちゅう大樹の陰で日光が届かなくなって死ぬ草だ！なんか、上手くまとまらないが、とにかくカオリだけは許さない。助ける？いらん。あんな奴。タクヤも無駄な事しやがって」

「それは君が、バスケットの優劣だけで生きようとしてるからじゃないか？私たちは、今はまだ、公立の中学校にいるから、比較的いろんな種類の間があるさ。でもこれから高校とか、行くにつれて、同じ種類の間が、次第に集まってくるんじゃないか？勉強が得意な人同士、バスケットが得意な人同士。そのなかで、優劣だけ気にして生きようになったらどうだと思ってる？本当に、自分に自信が持てる人は、トップに立ってるものだけさ。つまりだ、私たちは、生きるにつれて、自信が持てる人はどんどん少なくなっちゃうんじゃないか？」

「じゃあ、どうすりゃいいんだどうすりゃ」

ヒカルは、いよいよ脂の乗って来た自分の話にすっかり酔いしれ、陶然とした面持ちで言った。

「真実を、見つけることだ。真実は、誰にでも見つけられるし、真実と、真実の間に優劣が無い。神みたいなものだよ。言ってみれば。私はね、君みたいに自身を喪失していたところに、そういう考えが目の前に、パッと、開けたんだよ、って、ほんの数日前だけど」

ヤマキはそれから少し、何も口から出てこなかった。だからヒカルもさらに言う気にはなれず、結果としてまた静けさが、二人を包んだ。二人だと、話すことが無くなってしまふ、とまあそれがヒカルの考えではあるが、今回は違った。ヤマキには、言いたいことが、出来たのだ。そして今それを、口にしようと、口から吐きだそうとしている。まるで魚の骨のように、引っかかっ

ていたものを。

「分かった。俺も洗いざらい話す」

ヒカルにはその魚の骨の、しっぽをつかんだ感触があった。

「そうだ。そうだよヤマキ。真実を、ずっと一人で胸にしまってる、それで特別感を、確かに感じるかもしれない。だけど、自己中だぜそんなの。みんなそんなことするから、不安が、ぞくぞく吹きあがってくるんだ。でもヤマキ、君が話せば、世の中の不安が少し減る。君が、この世の役に、たてるんだよ」

「ああ。俺は、自分の実力がさ、認められるっていうことがイコール価値みたく思ってたのかもな」

「...いいから話してくれよ。何だ？君しか持ってない、その、真実って」

口から、ずるり、ずるり、とその骨が姿をあらわしてきた。

「三坂タクヤがどこにいるか、知っている奴を、知っている」

タクヤの、消息だって！タクヤのいる場所がわかった？ほんとにマジで？「いやいやいや私はもう踊り飽きたぞそんな情報」

「あのさ、君が真実を言ってるつもりでもさ、タクヤの居場所を、直接知っている人が嘘をついてる可能性だってあるんだぜ？」

「これ見たら、信じるか？」

学級委員長ともあろうものが、まさかの違法行為中だったのには、ヒカルも度肝を抜かれた。しかも堂々のスマホ。つい最近まで持っていた自信のたまものに違いないこれは。生半可な自信だけでは、なかなか学校に持ってくるという冒険を起こせないだろう。

「いつも...何のために持ってきてるんだ？」

「だからミズナとやり取りするためもともととは」

ぐはっ、どこまで縛られてたんだか。

「でも最近、このブログを見るためにだよ」

ヒカルは目を疑った。ヤマキのスマホの画面にいたのは他でもないタクヤの眠っている姿ではないか。

「これ、いつの？」

「一昨日だよおととい」

もうその日にはタクヤは学校から姿を消していた。っていうことは。

「つまりこの、石上って言う奴の家に、タクヤがなぜだか知らんが、いたみたいで、それがブログにアップされてるっていうわけ」

「あとインコも」

画面右下にある籠の中には、空色のインコが、ふわふわのはねげをふくらませてじっとしている。たぶん寝ているんだろう。可愛い。

「んなのより、これ見ろよ」

愛に満ち溢れた少年、三坂タクヤ

みんなに大ニュースです！僕の友人には、三坂タクヤって言う、まあ、名前は別にどうでもいいんだけど、とにかくいいやつがいるんですよ。で、ま、僕は学校っちゅう無駄なところには？足を運んでないwwwわけだから、そいつとも、近頃音沙汰なかったわけなんだ。けどさ、今日？びっくりしちゃった。

一週間ぶりに、自分でドアを開けてみたらタクヤがいるんだもん。まず驚きだよ。その後疑問？？へ？？何で来たの？？みたいな。

聞くとそいつも学校から逃げ出してきたみたいでさ。ついに来たかってwwそんな感じだったけど。

話はこっからだよみんな！タクヤ学校休んで何してると思う？僕はさ、僕とおんなじ目的かなーって、思ったんだよ最初はね。で？聞いたらびっくり。俺と反対だったwwタクヤ、こうやって、不登校の人達を渡り歩いて、学校に来てくれるよーに言ってるらしいんだ。

敵だ敵だ敵だって、あるいは邪魔邪魔邪魔って、思ってよねみんな。違うんだ。奴はすげえぜ。僕が生きてる意味を、教えてくれたんだよ！感動。てな訳で、僕は明日から学校行きまーす。

みんな。学校に行かなかっただけの自分の価値が、何の役にも立たないらしいよ！だからみんな！タクヤに会って、開眼しようぜ！今あいつは新宿にある新たなお客さんの家に向かっているらしいから、会えるかもよ？待ち伏せすれば。それに助けを求めるとすごい事なんだぜ。これもタクヤの受け売りwwだから頼んでもあいつ、絶対困らないっていうか、逆に嬉しいんじゃないの？タクヤを見かけた方は、こちらにご報告を。それが君の価値になる！

「いや、絶対嘘だ。なんでタクヤが学校休んでまで引き籠りを訪ね歩くのが、そもそも意味わからん。大体、新宿なんて明らかに通学圏外だろ」

「ん～そりゃさ、書いてるやつは阿呆かもしれないけど、この後ぞくぞく目撃情報が書かれてるんだぜ」

確かにそうだった。この二日間で、どんどん書きこまれている。写真付きで、だ。タクヤの真意は闇の中だけれども、とりあえずささやかな真実、タクヤの今いる場所は分かったのだ。

「ありがとな。ヤマキ。じゃあ、行くか」

「行くかってどこへだよ」

「タクヤに会いに行くに決まっているじゃないか」

「なんで俺が？タクヤの勝手だろ」

とっさにヒカルの手が、ヤマキの肩をひつつかんだ。隠れている身であることも忘れ、叫ぶ。「今この真実は、私とヤマキだけしか持ってないんだ。でも持ってるだけじゃ、何にもならない、分かるよな？行動を、起こすんだ。真実を、知ってる人にしかできない行動をね。なかなか出来るもんじゃないよ！出来ないからいつも私たちは、周りの人に、何となく生き方を合わせるだけに逃げて来たんだ。でも、そんなんじゃないよ君が言ってたように、生きる意味を、見失うのがお

ちさ。て言うかもともと生きる意味発見してないし。私が思うに、生きることが意味のあることだって分かるのは、自分しかできないことをやっている時、これに尽きると思うんだよ。今君は、タクヤは家で引き籠ってるだとか、箱根に旅行中とかデマが流れ飛んでいる中で、貴重な情報を手にしてるんだよ。そしてその情報をつかうことのできるのは君だけだ。な？生きていく意味が欲しいんだろう？だったら自分にしかできないことをしなきゃ。人生、人に踊らされて終わるつもりか！」

ヤマキの目が、今覚めたかのように見開かれ、その中では、新しい炎が点火されていた。

「はは。確かにな。このまま学校にいても、俺のことを道具にしか思わないミズナとか、俺をまるで嘘つきのように思ってる、阿呆サキハラと同じ空間のなかで腐るだけだな。てかさ、...お前は？行かないのか？お前にとってもチャンスだろう？」

「いや、」

ヒカルは、今一度今いる部屋を、眺め渡した。そう、新聞部の部屋だ。まぎれもなく。そしてヒカルはかねてから、あんなスポーツかぶれした部員の書く、部活のアピールのようなものではない、ちゃんとした、そしてみんなが、読んだみんなをアツと言わせるような記事を書き、斉藤ヒカルの名を、この世に知らしめたいと思っていたのだ。おそらく中一のころから。それまで、何の業績も残せず、ただただうすらぼんやり存在してただけの日々が、走馬灯のようにあたりを駆け巡った。

「私はここで記事を書く。ミズナさんの本当の姿、それに今君が話してくれたタクヤの情報を書いて、みんなに真実を知れ渡らせてやる」

「じゃ、もし俺がタクヤに接触したら、お前に送るわ、メールで」

「ああ、ありがとう、助かるよ。お前しかいないものな、そんなことが出来るのは」

さて。新聞部部室に鎮座している一台の古色蒼然としたパソコン。随分と埃が積もっていて、今まで死んでいたみたいだ。最近は無用になくなった、というか、新聞自体、書かれることが少なくなってしまったが、もちろん記事をまとめたりする用だ。唯一ともいえる、新聞部の備品である。

「これに送ってくれ。私は今日学校に張り込みする。一夜じゅう」

「正気か？」

「もちろん」

「じゃあ、言ってくるわ」

「気をつけるよ。見つかなよ」

さてこっからどう狂人化した生徒に見つからずに外へ出るか、ヒカルは全く分からなかったが、よく思い返してみれば、わざわざ校庭を通らなくとも、職員専用の昇降口を使えば抜け出せることだろう。

ふう。

そしてヒカルは記事を書き始めた。

嘘だらけのこの世の中に、どこから紛れ込んだのか。そういった美しい真実をこの白い紙の上にぶちまけるのだ。一つは三坂タクヤの失踪について。彼は今まで特に目立つところもなく、さ

えない男子中学生、としか思われていなかった。

違うんですよ皆さん。彼は立派なやつです。おそらく今は、木本カオリの真実を、見つけるために新宿付近に向かっているだけで、不登校とか、そんなんじゃないんですよ。

二つ目はそう、木本カオリの失踪について。彼女もまた、今までは授業中は決まって夢の世界に旅立ち、したがってこの世界の人達からは、惰眠、怠惰と呼ばれ、しかも特技はこれまた何一つないときてる。そう思われていた。

だけど違うんですよ。これもね。

そして三人目はミズナさん。名字は知らないからそう書くしかない。彼女も学校切ったのプリティガールとしての名をはせていた。

だけどそんな彼女も裏はあったのだ。

四人目はヤマキナオヤ。漢字は知らないからこれもそう書くしかない。彼は何と言っても学級委員長。そしてスポーツも出来る。リーダーシップで身体が出来てるんじゃないかと、冗談やっかみ一対一ででそう言われたものだ。

だけどあいつもかわいそうなやつだ。今になってみれば。

ヒカルは世間にはびこる嘘を吹き飛ばし、嘘の獲物にされてきたこの四人を、救うべく、目の前にあるパソコンに、文字を一心不乱に打ち込んでいく。

それが、ヒカルの役目なのだ。新聞部としての。そして今それがヒカルの誇りであり、生きる意味でもあり、個性でもあるのだ。

## 第七章

---

### 第七章

もう気付けばあたりは闇の夜になっていて、もうわたしは何もできない、ただ泣くほかは。幸福が、届かなくなったから、三坂君は今頃どんな目に逢ってるのかしらん？分かんないことだし怖い。窓は闇に覆われていて、人の姿さえ分からない。ましてや今いる場所も、分からない三坂君なんて。ほんとなら、明日に向けて胸躍らせて、う～ん、ご飯かテレビってところなのに。ちなみに今八時。

むくむくと、時たつごとに不安が私の中で膨らんで、どうしようと思ってばかりで女の人に目が行ってしまい、そして声をかけてしまう。

「あのう、もし、一日ある人を見ない日が続いちゃったら、どうすればいいんでしょうか？」

やはり女の人、ムッと眉根を寄せて、こちらはもう見ることもしないで、

「は？あんたちゃんと今日一日、昨日言われた場所にいる人に幸福与えてたんでしょ？」

でもわたし、ほんとは昨日からすでに、「タクヤ君幸福集中作戦」を、始めてたし、もともと覚える気なんてなかったから無理なんだけどな。

「あ～、どうだったかな？すいません、なんかわたし、こういうの覚えられなくて」

「何言ってるの？だってあんたは選ばれた人なんでしょう？ここに来られたってことは。で？何でその、昨日見て今日見てなかった人がいるとか分かるわけ？」

そうだった。この人、モニターに見える世界、わたしが前住んでたあの広い世界とは、無関係なんだっけ。それにわたしだって、ほんとは知り合いが、いないことになってるんだって、と気付いてちょっと、焦りながらも言う。

「え～っと、その、ちょっと目立った行動してた人だったから」

間違っていないかもしれない、あながちね。タクヤ君は、確かにわたしからみたら特別、目立ってたもん。

「じゃどうせ今日は昨日とは違う行動したってことでしょ。たまに見かけるから。そういう変人。ほっときなさい。そんな人をわざわざ見つけて幸福を与えるなんて非効率的。いつもちゃんと同じことをしてる人だけで、十分。幸せをもらう人は」

でもおんなじことしてるだけじゃ、わたし、きっと三坂君を、ここまで特別に思えなかったのに。この人にはわからないのかしらん？人が、それぞれ違ったことをする良さが。

「人が、毎日おんなじことしてたら、その人の価値は、どこにあるんですかね？」

質問が、まるでわかっていないのか、女の人、何もしゃべらずただむっとり、言葉は空振り空ふわふわで、その態度にわたしはふつつつ、悔しさがこみ上げてくる。

「じゃあ、あなたは自分の価値が、どこにあると思うんですか？いつも機械みたいに画面見て、何の私情も差し込まずにただボタンをぽちぽち押しているだけのこの仕事でも、やってれば自分に価値を、感じられるようになれるんですか？」

「は？」

またしてもかすめただけ。届いてない。

「私はちゃんとこの組織に選ばれたの。十年くらい前に。それに元をたどれば小学生の時にはもう、選ばれていたんだけど？価値があるから、選ばれたんでしょう？あなたも？ねえ？」

こんなことに、時間を割きたくなんかないという、明らかないらだちが、彼女のあちこちから噴き出してきて、その空気に、いよいよ堪えられなくなってきたその時、三坂君のことがまたふっ、とよぎる。そうだ。三坂君は、わたしに逢うために、ちょっと早めに家を出ただけなんじゃないかしらん？あ...でも、三坂君のそこから新宿まで、二日もかかるっけ？うん、でも嬉しい。いくらここの周りにいる人と話がつうじなくても、ちゃんと今のわたしの気持ちを分かってくれる人がいるから。頑張ろう、と思ったその時、言えなかったこの塔への不満が、口までこみ上げて来て、いよいよわたしは吐きだしてしまった。まだ入ってほんの、三日目なのに。

「もう、無理です。本音言わせて下さい。わたしここ、だいつっつきらいなんです。本当に。この組織に選ばれたから、あなたは自分に価値がある、って言ってましたけど、そもそも組織は、あなたの何を選んだんでしょう？従順さ？それともこのつまらない仕事にも、何も感じない鈍感さ？あ、すいません、」

見ると女の方は、凌辱された怒りを遥かにぶっばなし、ただただ青ざめているから、反射的に、懐柔策として謝る。でもわたしは折れない。

「すいません、でもわたし、あなたたちの組織とは、もうやってられないなって、気付いちゃったんです。だって、見てる景色が違うんですもの、根本的に。わたしは、モニターでは映らないものも、見えてしまうんです」

それは記憶のことなんだけど、と心でつぶやき、ふとわたしは確認のためか、モニターをちらり見てしまう。やっぱり、学校一つを見ただけで、数えきれないたくさんの思い出が、巢食われたわたしの心から浮かび上がって。そしてその記憶を辿った先には、あの球技大会の出来事がある。わたしと三坂君だけにしかない記憶。

「そうです」

まだ文字一つ分も声が出ない相手をいいことに、今度はこう切り出してみる。

「こういうことですよ。つまりわたし、ここに来る前から、すでに塔に、登ってたんです。それもここよりずっと高い、スカイツリーよりも、もっともっと、というような。だから逆にここに来たとき、自分の視野が、逆に狭く感じたんだと思います」

「と...、当然でしょ。だってここはモニターがあるから高く見えてるだけで、実際はもっと低いもの」

そういう話じゃ全然なくて、ただ「見え方」の話をしたかっただけなのに、女の人から、すっとぼけた発言が飛び出る。

「そうじゃないんです。わたしはただ、昔はあなたよりも幸せだったってことを言いたかっただけで。あなたの言う幸せは、全然幸せそうに聞こえないから」

「何？何であなたと私が違うわけ？ここにいる人はみんな同じ感じの人生でしょ？あ！もしかして」

はっ、と急に女の人、顔をこわばらせたと思ったらいきなり、ピッとわたしを指さして、わめ

きたてる。

「大変！大変！早く来て！侵入者よ侵入者」

さっ、とあたりにいた人が振り向きざまに、わたしの方へ視線の集中砲火を浴びせかけてきてびっくり。もしかして、今夜の侵入者、三坂君のこと、なんかほのめかすこと言っちゃったかしらん？と、さっきのわたしの発言をそろそろとたどるうちに、思いがけない方向から声が飛んでくる。

「何が起きたんです？」

男の声。振り返ると、見覚えのある顔だった、けどタクヤじゃない。初めの日から、ちょくちょく顔を見ているあの監視役の人。

「何ですか？こんな大声を出して」

「こいつ、侵入者ですよ竹西さん。なんか初めから、挙動おかしいと思ってたんですけど、わたしはあなたとは違う所に昔いた、みたいなことを、とうとう口走りましたよ」

と言って指さした方向は...って、わたし？

「本当ですか、木本さん？」

どうしよう、頭がぼうっと真っ白くぼやけてしばらくはものも考えられない。おどおどした言葉が、口から垂れ流されてゆく。

「えっと、その、ちょっと仕事のやりすぎで、頭がおかしかったんですか、ね。あはは」

「まあ、優秀な人ほど変った所があるものですからね。この組織ならよくあることです」

そこで素直に緘黙を、貫いていればいいところを。竹西っていう人も優秀か否かという目でしかわたしを見てないことに、わたしのなにかが突き動かされたようなの。

「わたしは優秀？じゃあ、この仕事を、まじめにやんなかったら、優秀、って文字はわたしの中からはがれおちてそのあとわたしはどうなるの？価値はなくなるわけ？」

「はい？」

「そう、それに気になってただけど、この組織は、存在する意味があるの？悪いけどわたしが見たところではね、みんなこの組織に貢献してるから、自分に意味があるって、そういう考え方してるみたいなの。でも、組織に意味がなかったら、それこそ本末転倒でしょう？」

「それは、幸福を与えるためじゃなくて？」

「あのねえ、こんなことしなくても、みんな、この世の中の誰もがみんな、幸福を人に与えられるって知らないの？ほんとみんなは何も知らないんだから。見えないの？世界の構造」

「失礼ですが、カオリさんは、誰からここへの招待状を、受け取りましたか？」

「え？ミユキさんですけど？」

「誰ですかその、ミユキさんは？」

「うっそ、関係者じゃないの？ここの？」

ガッ、腕をつかまれている。わたしは悪くない。ミユキさんも、悪くないと思うのに。「ちょっと事情を聞かせてください。こちらに」

そうやって運ばれてゆくわたしの目が、最後にとらえたのは、からっぽのわたしの席と、その先に広がるわたしの街。

ここからしばらく、あの街に幸福は訪れなくなる。エレヴェータの扉が狭まり、細長くなってゆく視界の中でわたし、声を振り絞って叫ぶ。

「あなたがたは、どんな種類の人間ですか？神を見出している人間ですか？神を探そうとしている人間ですか？それとも神なんて、探そうともせず、組織にいてだけで、満足している人間ですか？」

## 第八章

### 第八章

ほんと、人間一人にならないとやりたいことが見えなくなっちゃう。と、こう思い出したのも俺が早朝起きてすぐに、石上の家の布団から抜け出して、石上家の縁からも抜け出せたから。まだ石上は、寝ているだろうか。そうであるといい、と思いつつ、すでに行動に俺は移しつつある。

五時。誰にもまだ手つかずの、歩道を歩いている。音も見た目も静かな光景。こういう所で一人黙々と思考に身をうずめなければ見えてこないこともあるのだ。

いましがた気付いたのは、人間、一人でも生きられる、ということ。そして一人になった時の自分が、本当の自分自身なのだ。

しーん。桜の青々とした葉がすれる音がするだけ。

確かに歩く俺の周りには、静かさが横たわっているだけで、俺のことを見てる目はない。壁に耳あり、障子に目あり、とはいうものの、ここには壁や障子すらない。どこまでも広い街々が、線路の向こうに見えるだけだ。低く東に浮かぶ太陽の逆光で、その向こうは白く光りに包まれている。

あの向こうに、新宿はあるのだろうか。

話をもどそう、歩きながら軽く肺に朝の空気を吹き込み頭を落ち着かせる。

俺の周りには今何もない。その状態になって初めて、人は頭で自身の周りに何かを作るのだ。ま、腹が減ったからご飯を作るみたいなもんか？

想像でつくるもの、それは塔。世界を、より広く見渡す塔。そこで他の人には見えない景色を見続ける。

俺も、こうして道端を歩いては、いるけれど視界は既に塔に釣り上げられている。

そこから見える景色はすごい...って、ここまで来ると頭がおかしいと思われるかもしれない。でも、景色は共有できないからしょうがない。まあ、とにかく景色はすごいのだ。ところどころに、緑がこんもりと茂る大地を覆い尽くすかのようにビルやマンションがびっしり張り付いて、道路がその上を張り巡らされている。そして目線の高さに青く抜けた空。全体像はそんなもん。その一つ一つを見ようとするけれども、ぼんやりと白く霞んでいるものだから、よく見えない。「一人一人にその人なりの、生活があるんだよねえ」って、言う人がいるけどそんなの気にならない。こんな広い大地にびっしりとつくマンションの、一つ一つの窓の中の生活なんて、世界丸ごと一望したら、どうでも良くなってしまう。特に石上家とか、ほんとにどうでもいい。こうして世界を見ると、石上は矮小化されるのだ。

下に見るものがないから、俺はその塔の窓から、丁度同じ高さの所を見つめる。自分と同じように、世界を感じている人が、果たしているのか。そうなんだ。人を想うということは、極言すれば、その一言に尽きる訳。

俺は窓から目を凝らす。すると朝日で白く、滲んだ東の空に、おぼろげながら立つ、塔の存在

を感じる。

カオリ。

道を歩くなかで、俺は一人を感じる。だが、一人になった時、人の価値は決まるものだ。俺は、一人でも、その「塔からの目」からは、カオリがいる塔が見える。たぶん新宿らへんに。コクーンタワーよりも高い塔が、想像上には存在する。そして俺とカオリの、塔と塔の間を、無数の巢食いの糸が、走っている。

だから俺は、新宿に行くのだ。こうして一人になっても、新宿に行くのだ。

さくら歩道橋を渡った先に、南大沢駅の姿が見えてきた。駅に行くのは、カオリの姉さんと、会った時以来だ。

駅に近づくと、まあ少なからず人には会う。気持ち良さそうにぽっぽっぽなく鳩にも会う。でも、俺のような目的で、駅に来て電車に乗るものがあるのだろうか？、と思いつつ、改札をくぐって、階段を、ぱたぱたと下りる。

後少しの我慢だ。ホームに降りても、ぽつんと辺りにたたずむ死にかけた、無表情な他人の顔には目をそむけ、ひたすら俺の頭に屹立する、塔の景色に集中していると。

ふぁーんふぁーん、間もなく二番線に、各駅停車、新宿行きが参ります。

たまらなくなつて身を乗り出してみると、ぐんぐんと、銀色に光る電車がこちらに向かって伸びてきたあと、目の前を滑る窓ごしに、中の席に座る人が見える。

って、え？始発の電車って、こんな混むもんなの？

電車の一つ一つの箱は、人でぎっしりの、それこそ缶詰状態だった。まだふた駅しか通っていないのに、だ。

しばーん。目の前の扉が縦に、真っ二つに割れると、中から飛び出す人、人、人。

なんじゃこりゃ、って思った時にはもう手遅れだった。

「うおー、愛の伝道師！タクヤ！」

「俺を救ってくれ、タクヤ！」

「うわ、マジ本物だ」

どこで俺が待っててもいいように、まんべんなく散らばっていたんだらう。電車が駅に停車すると、あちこちの扉から中学生くらいの少年少女がわらわら飛び出して来て、俺の方めがけて走ってくる。目の前の扉からも、人間が嘔き出しているの、とりあえず電車は諦めて、いったん改札に抜けよう、と後ろを振り向くともう時すでに遅し。二本の階段から、人がどぼどぼ流れてきている。まるでプールの栓を、抜いた時のようだ。

この状況が起きた理由を考えるより、先にこの状況から、抜け出せる方法を考えなくては。俺は人が押し寄せてくる電車からさっと離れる。そして考える。周りの人も、あまりの人の多さに、誰が三坂タクヤか、分かっていないらしい。その時俺の目に入ったのは、上り専用のエスカレーターだ。俺は目立たないように人の陰に隠れつつ、じりじりと、今はほんとに天国への階段に見えるエスカレーターに近づく。もうそろそろいいだらうか。

走れ。

俺はエスカレーターを駆けあがる。はるか上に見える改札階の床との距離を急速に縮める一方、

目立ったために、タクヤだと分かってしまい、エスカレーターの脇の階段にいる連中たちの、何十本もの手がこちらににゅーっと伸びる。

そして手を振り切り改札階まででたはいいものの、後を大勢の人が追いかけてくる。そして目の前には、新たに少年少女が、改札を通して、加勢している、という光景。逃げ場なんか無い。なんてついてないんだ。

鬼ごっこで、挟み撃ちにあった時のような、絶対的敗北を感じ取った俺は、走る足を止め、茫然となった。

「タクヤ、捕まえたぞ」

「タクヤ！タクヤ！タクヤ！」

タクヤの合唱の中で、俺は次のステップの行動に出る。

なんでこうなってしまったのか。なんでカオリに会いに行けなくなったのか。それに着いて考えなくては。

俺の周りには、人がたくさん群がりつつある。みんな手には、携帯電話を持っている。何をするつもりなんだ？

と、一斉に携帯を、銃口のように俺の方に差し向けると、次の瞬間、辺り一帯カメラのシャッター音が鳴り響くではないか。

そのすきを見て俺は満腔(まんこう)の力を込めて改札に向かって突進し、何とかその場を抜け出すのに成功した。

走りながら、何とかポケットからスマホを出して、「三坂タクヤ」の名前で検索する。は、ばかばかしい。が、万が一だが、俺がネットで騒がれているっていう可能性だってあるのだ。

そしてその予感はずばり的中した。

「閲覧数十三万って…」

全ての悪の源泉は、石上のブログだった。何が開眼しようだばかやろう。喜ぶわけない。こうやって、どうでもいい連中の相手をしていると、俺のほんとにしたいことが、見えなくなってしまう。これでは、俺が学校に行った時と、全く変わらないじゃんか。

俺の何を石上は知ってるんだ。石上の言う俺の姿は、どうでもいい人と付き合う上で仕方なく作った、表面上の自分、自分の幻影なのだ。それは俺ではない。俺という存在は、ビッグインパクトを抜いては語れないのだ。だがそのビッグインパクト、それを知っている人は、俺を除いて一人しかいない。それ以外の人に、俺を語る権利なんてない。よくも俺の幻影を広めやがったな、石上。

駅から少し離れたところにある、立体自転車駐輪場に、俺は一時、身を隠す。

さてどうすっか。とりあえず、南大沢駅は、使えない。京王堀之内まで迂回して、そこから新宿行きの電車に乗る？いや、すでに「俺が新宿を目指している」という情報は、もうブログに書かれている。石上め。俺が寝ている隙に、俺の寝顔を撮っただけでなく、携帯を抜きとり、カオリからのメールを盗み見やがって。まあでも、カオリが転校してくる前に、石上は本人いわく、学校っちゅう無駄なところには足を運ばなくなっているから、カオリが俺にどんな意味を持っているかなんて、分かりはせんだろうけれど。とにかくそういうわけで、新宿が目的地って分か

ってる以上、南大沢から新宿までのどの駅に、「俺の幻影の信者」、つまりひきこもりから一時抜け出たひきこもりがいてもおかしくはない。

しかし一体どうしたことだかこれは。揃いも揃って俺を付けまとうなんて。どうして、たくさんの人が、同じ俺という存在を、追いかけているのかよくわからない。カオリみたいに、俺と同じ目線で景色を見ているわけではあるまいし。まあ、おそらくさみしかったんだろうなみんな。あんなつまらない石上のブログ見てたほどだから。集まるきっかけさえあれば、何だってよかったのだ。俺に白羽の矢が当たったってところがついていない、という一言で片づけられてしまう。

仕方ない。まだ時間は一日以上ある。

カオリに会いさえすれば、俺は本当の自分になれるのだ。いや、今も本当の自分だから、本当の自分を理解してくれる人が出来るって言い方の方がいいか。

すうっ、と、息を吸い込んだ後、俺は新宿目指し、歩き始めた。まだ塔の上にある目は、カオリのいる塔を、しっかりとらえている。

## 第九章

---

### 第九章

ヤマキが南大沢駅に着いた五時の時間帯の、しかも新宿行きとなれば、当然ガラガラである。その状況下において、横に伸びた席の端っこに座ることは、別にヤマキに限ったことじゃない。普通、そんなに席が空いているなら人の隣をわざわざ選びとる変人なんかいない。

はずじゃなかったか。

何だ、この女は。

自分と関わらない方が身のためですよと身体全体で主張しているような姿の女が乗って来たのは、京王線調布駅に着いた時だ。数人がそこで降り、女を含めたこれも数人が乗ってバランスを保つ。当然また、周りとスペースをとって座るだろう、と、ヤマキは何も気にせず悠々と、端の席を満喫するつもりだったのだ。

馴れ馴れしくこっちの方に近づいて来た時点で、ヤマキはおとなしく、端の席を明け渡していれば。

いきなり肌と肌がすれ違ってしまうほど、ヤマキのすぐそばに腰を下ろした女に、何の迷いもなかったのだ。

「あのう、端の席を譲ってくれてもいいかな？」

耳元に、生ぬるい息が吹きかけられたその時からもう、ヤマキは身に降りかかった災難に、うすうす気がつき始めていた。

「...？」

「やっばいやだよねそりゃ。ごめんごめん」

腕が触手のように、ヤマキの肩に絡みついたまま、彼女は話す。

「いつもならあたし、はじっこの席に座ってるはずなんだけどね。ね、なんでだかわかる？」

「いや」

こう言うのは適当に、相槌でも打っていたほうが無難か。と、思いながら一縷(いちる)の希望を持ってあたりを見るが皆、単なるいちゃついたカップルであると思っっているらしい。扉は当然閉められており、外の景色が過ぎさっていく様を、窓越しに見つめることしかできない密室空間に逃げ場はない。

「横に座った人と話すから、でした正解は。ほらさ、端じゃないと隣に二人人が座るじゃん？やっば一対一じゃないとね、話すときは」

ちゃんとヤマキに話しているのだと言いたげに、ヤマキの目をまじまじと見つめてくる。

「てなわけで、新宿までの間、よろしくっ」

いつの間にか、その一言で丸めこまれてしまった。

「ねえ、なんか話してよ」

「は、話？」

「じゃあさ、君かっこいいからこんな質問しちゃお。あはは。ねえ君、彼女いるでしょ絶対」

それを周りに聞こえるくらいに大声で話すものだからたまったものではない。ヤマキはその勢いに、完全に狼狽(ろうばい)している。

「名前を聞くより、彼女の有無の方が先、ですか」

「うん、先。え？聞いちゃまずかった？」

まずいも何も、ヤマキは今日別れたばかりなのだ。そんな人生の汚点みたいなことを、こんな見ず知らずの人に言う気には、普通なれないだろう。だがヤマキの場合、特別だった。元彼女のミズナは、その表面上の可愛さで学校を洗脳しているから、ヒカルを除いては、誰も悲劇に見舞われたヤマキの話、つまりミズナがどす黒い性格であることを信じてくれる人はいないのだ。サキハラにいたっては、ミズナにぞっこんなあまり、ヤマキをぶん殴りさえたほどだ。今ヤマキが必要としていたのはたとえ目の前にいるような、不良の風采をした人だとしても、彼の話をも素直に信じてくれる人なのかもしれない。

「俺は、今日彼女と別れました」

「あらま。悪かったねこんなこと聞いちゃって。で？どんなふうに分れたの？なんならヨリ戻す方法教えるよ？こう見えて、あたしその方面には詳しいから、心配すんなって」

「いや、ヨリなんて別に、戻さなくてもいいんです」

「うっそ、もったいなくね？何？二股かけてたパターン？」

「いや、彼女は俺を、一度も好きだと思ったことはなくて、ただ学校を支配するためだけに、俺に近づいただけだから」

気がつけば、言葉が口から滑り出ていた。学校で聞いてから、その後心の奥深くに隠し、はるばる調布まで運んできた言葉を。

「ふーん。で？君は彼女が陰でうごめいてるところ見たんだ？」

「いや。直接彼女から話を聞いただけで」

「今まで好きと思ったことないっつう話は？」

「それは新聞部の奴から聞きましたけど」

女の人は愉快そうに口元をにやつかせながら言う。

「君は？君はどう思うの？」

「え？」

「だってだよ？少なからずってか何、二年も付き合ってたんでしょ？それなのに、そのコの知り合いでもなさそうな新聞部からみた彼女のイメージを、君は鵜呑みにするわけ？」

「いや、それは…」

「君は彼女と二年一緒にいた時、どう感じたのって聞いているわけ要は」

「彼女は、本当に楽しそうでした」

ヤマキにとってこんなことを他人に話したのは、初めての試みだった。

「初めに近づいてきたのは彼女の方でした。彼女は何もしてなくても、接触した男子全てに言いよられたと思います。顔も性格も、他の女子に比べて頭抜けていましたから。でも実際は、入学してすぐに俺と付き合い始めたんで、男子は彼女に流し眼を送る代わりに、俺を羨望のまなざしで見ただけでしたが。俺も幸せでした、この二年。こんな素敵な女の子とずっと、朝家を出る

ときから夜家に帰るまで一緒にいられて。彼女も、繰り返しますがいつもにこにこ幸せそうで。彼女を俺は幸せにしているって、いつも思って喜びに浸っていましたね」

「うわ〜めっちゃいい感じじゃん」

「でも新聞部は別にしても、彼女は自分で俺を操ってたと、面と向かって言ったんですよ？」

気がつけば、ヤマキの言葉に熱がこもり始めていた。

「そんなことはないって。好きだって言う気持ちに、嘘がつけるわけない。大体人を好きになるのって、自分に正直になるからこそできることっしょ？」

「本当ですか？」

「じゃなきゃ初対面の人に、好きな人がいるとかって話さないでしようが。あたしはさ、人の中にある、ほんとの感情と話がしたいの。好きって言うのは、人間の数少ないほんとのきれいな感情」

女の方は、急に何かを思い出したかのように、にんまり顔になる。

「そうそう、こないだも、そう言う人にあっただった。その人、あたしの妹のこと好きみたいなんだけどさ、妹もその人のこと想ってたみたいで。なんと、妹はそのひとに手紙をかいていたわけ。で、わたしはその手紙を丁度もってたから、その場手わたしで渡せたっていう偶然。驚きっしょ？てか、すごくない？」

「世の中に、そんな純愛って、あるんですかねえ」

「何言ってるの。君のもそうだってだから。あはは。だから、周りには、彼女が君を、好きなフリしてただけに見えても実は、君が付き合っている時見たその彼女の姿の方が、ほんとの彼女なんだって」

「何ですかそれ。裏の裏は表、みたいな。じゃあ、どうして彼女は俺を操ってるって言ったんです？」

女の方は、その大きな疑問点にも、にやにやするだけで、何もひるむ様子はかけらも見られない。かといって、その訳を、説明する気もないらしい。どうやら彼女は、ヤマキとタクヤが積み上げてきた真実を、もっと根本的なところからひっぺがえすつもりらしい。

「人と深くかかわるってのはねえ、その人の新しい姿を知ることでしょ？で、君はその彼女と昵懇(じっこん)になって、彼女が君を好きっていうさ、新しい姿を見たわけじゃん？で？人から彼女の違った一面聞かされたらもう、その自分で見た事実は諦めちゃうんだ？君はもっと自分に自信を持たなくちゃだね。他の人の言葉に、すぐひっくり返さないくらいの。簡単簡単。自分に正直になりゃ言いだけの話。このあたしみたいにさ」

そう言うと、女の方は、どぎつい色の服の上から、胸をぽんっと叩いてにやり。

「君は、自分の声だけに、耳を傾けていればいいんだって」

自分の声。

「そんな急に言われても無理です」

「大丈夫だって。君は、神を見出せるよ」

さっきからむちゃくちゃな恋愛論をべらべらしゃべると思ったら、今度は口から神の言葉が飛び出した。彼女が胡散臭い酔っ払いでなくて、果たして何であろう。

「神？」

「そう、神。まあ、あと一步ってところだねえ。だって神を信じる人はさ、信じない人にとって、ぱったり信じんのやめるわけじゃないじゃんか」

ヤマキは別にどうでも良かった。神の信者であろうとなかろうと。そんなことより今は、タクヤの居場所を突き止めることの方が意義のあることなのだから。

「別にどうでもいいですそんなこと」

だからと言って、自分の本音をぶつけることはなかったと、言った直後ヤマキは反省した。

「君は分かってないねえ。神を信じる大事さが。あはは」

しつこく神の話題を押し付けてくる。そうか。この人は教団のまわし者だったか。ヤマキはようやく合点がいった様子。

「なぜ神を信じるか。それはひとつしかないっしょ。それは、自分に価値が生まれるから。信じ続ける自分にね。信じるってすごい事なんだよ。だって信じなきゃ神なんて無くなっちゃうもん。そうやって信じ続けて生きている姿を、神様は、見えないどっか天国で素晴らしいって、そう思って下さるんだもんね。今でもそうだよ。今でもこの世の中の人々の大半は生きてる意味を、神のおかげで見つけてるんだよ？あはは。だって人の価値って、自分自身の中からじゃなくて、他人から生まれるもんだもん。スポーツや勉強とかは、その実力を、人に認めてもらって価値になるけどさ、神を信じることは、実力じゃなくて、その信じるひたむきさを認めてもらうだけの話」

「は？はあ…」

ヤマキは、一刻も早く、このヘンな宗教の手先のような女の人の話とぷつつりおさらば出来ることを願って扉を見た。と、急にあたりがぼんやりとした鈍い光に包まれた。新宿に到着したのである。ヤマキはとてもあつという間に感じた。まるでこの電車が、新宿までワープしたみたいに。

ヤマキはまだ見ぬタクヤに引っ張られるように、そして脇の女の人から逃げるように、いち早く腰を浮かせて逃げる態勢に入った。

「ん？あたしに端の席譲ってくれるの？」

「いや、俺はここで降ります」

しかし彼女の腕は頑丈にも、ヤマキの肩に絡みついたまま、離れようとしなない。

「ちょい待ち、まだ話したいことがあんだってば。あたしら、友達っしょ！」

「は？」

「神を語り合った仲」

一方的に、話し掛けてきただけだろ、という言葉も、ヤマキはぐっ、と呑みこんだ。もがけばもがくほど、それこそ蟻地獄のように、深みにずるずるはまっちゃうものなのだ。その代わりにヤマキの視線は駅構内をくまなく動き回っていた。脱出の手口を模索していたのである。

「あのね君、神を信じることはみんなやってんだって。あたし前に、君と同じくらいの歳で、神を見出してる人見たんだから」

「ふーんそうですか」

ところてんのように話を右から左に受け流しながらヤマキの視線はままだも泳ぎ続けている。二人は腕が絡み合ったまま、いよいよ改札はもう目の前に迫って来ている。南口に行く方の改札の方だ。ヤマキの方に、一応行き先決定権があった。

「あの、ちょっと右手使わせて下さい」

「おっとごめんね、あたしとしたことが」

二人はこの時だけ二手に分かれ、改札をくぐろうとする。

「ねえ、君の名前聞いてなかったんだけど、何て言うのか教えてもいいっしょ？」

ひらっ、とそこでヤマキはバスケ部らしく華麗に身をひるがえして、改札をくぐらずに離れたあと、間逆の方向にある西口の方の改札めがけて走る。

「君？ちょっと待ってよねえ！」

しかし女の人の行く手を改札と、そこからとめどなく流れている人の流れが阻む。彼女は既に、改札を出た後だったのだ。そこからまたホームに戻るのは至難の業である。

そうこうしている間に、ヤマキは大勢の人ごみの中にまぎれ、その跡を人の波がきれいに洗い去ってゆく。もう見つかることはないだろう。新宿駅はとてつもなく巨大なのだから。ヤマキはやっと神神神言う人の束縛から抜け出すことに成功したのだった。

嬉しいのはそれだけではなかった。スマホを開くと、西新宿でタクヤが見つかったという情報が、アップされたばかりだった。これを幸運と呼ばないで何と呼ぶ。

そして夜六時を回った新宿駅。ヤマキは小田急の出口あたりから、地上に姿を現す。すると目の前に、巨大な塔が姿を見せる。コクーンタワーといい、ヘンテコな姿をしている。初めて新宿に来たものは決まって空を仰いで眺め、その塔のヘンテコな姿を記憶に焼きつける。その塔から見れば、視界に映るヤマキというのは、新宿にいる何千何万の人間の中に存在しているヤマキなのだ。その何千何万の人間を一望する時、ヤマキだけを見る人はいないだろう。昔のミズナならヤマキだけ見たかもしれないけれど。ヤマキはその塔を眺めながら思った。みんなは塔を見られるのに、塔はみんなを一人一人区別して見られない、と。人間だれしも、一人になったらこんなことをつい考えてしまうものだ。

視線を遥か上から、人であふれかえった地面に戻す。とりあえず、あたりを埋め尽くす人ごみに注意を向けながら歩く。じっと見なくてはならない。ほんの目をそらしただけで、目の前をすれ違う人はべつの人と入れ替わってる。普段は人たくさん、としか見ないけれども、よくよく考えてみれば、人一人レベルでは、どんどん入れ替わっているのだ。ゆく川の流れは絶えずして、しかも、元の水にあらず。人の流れだっておんなじだ。ヤマキ自身だってこのまま大勢の中に存在する一人、として一生を終えてしまうかもしれない。というえもいわれぬ恐怖が、ミズナが抜けて空っぽ同然のヤマキの心に入りこんできた。

ヤマキがふと、そんな虚無感にとらわれたその時、タイムズスクエアをふらつきながら歩く、見覚えのある姿を発見した。気付けば名前を呼んでいた。

「タクヤ！」

タイムズスクエアで、死んだ目をしてふらふら歩いているタクヤは文字通り、肉体的にも精神的にも三途の川に片足を突っ込んでいた。タクヤの目的は、当初よりはっきり彼の塔から見えていた。すなわちカオリを牢屋のような悪魔的空間から救いだすことである。その目的だけ追っていれば、何も問題なかったのだ。問題なく本当に自分がやりたかったことを出来たはずなのに。石上と、石上に扇動された連中め。

南大沢で、奴らから逃げ出したはいいものの、タクヤが電車に乗らなかった、という情報は石上のブログに乗って、瞬く間に連中を駆け巡ったせいで、主要道路に、彼らは拠点を移したのだ。

「タクヤだ！」

「何で学校にも行かずに不登校の人の家を訪ねてるんですか」

「巡礼頑張ってください！休みませんか？俺んちで」

行く先々で、タクヤを追っかけまわし、近づこうとする人たち。タクヤの心も悲鳴を上げ始めた。

「俺に関わらないでくれ。俺はお前たちの物じゃない。俺には、俺しか知らない、俺にしか見えない、使命があるんだ。そして俺は、その使命に、素直に従って行きたいんだ。心から。それ以外の頼みごととか期待とか助言なんて、いらないんだ、義理だよ、義理！やりたくないけどやるしかないって、あの！そうだ、俺の周りにはいつも義理が付きまどっていた。ちゃんと学校に行く、ちゃんと寝て起きる、ちゃんと息を吸う。うんざりだ！どうしてやりたくもない事を、好きでやっているように、見せかけなくちゃならない？そして何でほんとの俺を殺さなくちゃならない？そんな中で、ほんとに、ほんとにカオリだけだった。ほんとの俺を、俺の中から見つけてくれたのは。カオリはあの時の球技大会で言ったんだ。三坂君、ありがとうって。俺は何もしていないのに、ただ自然に許しただけなのに、そう言ってくれたんだ。名指しでね。そして今度はそばに来てほしいって。あの、「いい人」の三坂君と、会えるだけでいいって。そうだよ、使命って、こう言うことだよ。俺だからこそ、みたいな。俺の実力とか、顔の良さとか、気が利いているいないとかとかじゃなくて、ただ丸ごと俺を、欲してくれている。俺から出た、ほんとの気持ちや言葉を、欲してくれている、って言うような。だから繰り返すがやめてくれ、俺は人にいい事をするのが好きじゃないんだって。義理だからそう言っちゃたんだって。だからすまん、俺に、本当の使命をやらせてくれ！」

これがタクヤの中にいる、本当の、真実のタクヤによる本音だった。タクヤはひきこもりの人に追いかけられる度に、大音量でこの言葉を心で叫び、周りのタクヤを呼ぶ声をかき消した。というか本当に消えてほしかった。周りにいる人には。タクヤとビッグ・インパクトを経験していない人、つまりタクヤと本当に心から出た言葉を交わしあっていない人は断固お断りなのだ。

そして連中を避け、蛇行に次ぐ蛇行を繰り返すものだから、新宿まで行く途中で夜を明かす羽目になってしまった。それでもタクヤは義理を作らないことを貫き通すため、集まり寄ってくる連中の誰の家にも泊まらずに、そして足も止まらずに、不眠不休で走り続けた。もし路上で寝てしまったら、きっと起きた時には奴らに取り囲まれていることだろうと思っただけのことだ。死んだ

ような眼をして青息吐息でせえせえはあはあよたよた走る、二十四時間マラソンのような光景を見た道行く人は、きっとタクヤを変な人だと思っただろう。そもそも普段着を着て夜中に一人で走る人だって普通道にはいないのだ。だがタクヤにはどうでも良かった。いくら変人と思われようと。いくら変人のような動きをしても、そんな彼を待っているカオリがいるのだから。カオリはタクヤが変人のような動きをしていたって別にかまわないのだ。カオリは、タクヤという人間の、根本的な、本質的な部分を知っている。そしてタクヤだって見かけはふらふらに見えていても、おそらく塔の風景を見ているであろう彼の目はぎらぎらとしていて、使命を果たす渴望が中で踊り狂っていた。

タイムズスクエアに着いた時も、憔悴(しょうすい)しきっていたとはいえ、そんな状態は変わってはいなかった。さっそく塔を探すが、それらしきものは見当たらない。コクーンタワーは確かに見えるが、あれは大学の物だろう？カオリが幽閉されているとは思えない。もしかしたら、たくさんのビルの陰で、見えていないのかもしれない。もしくは人が大勢歩いているから見えないのかもしれない。

だんだんと、タクヤの目の中には、渴望だけでなく、焦りさえも浮かんで来て、いっそう目をぎらぎらしたものにさせた。日はゆっくりと、暗くなりつつある空に呑みこまれてゆく。周りの景色も闇に呑まれ始めて、その輪郭を失いつつある。周りが見えにくくなる。塔も余計に見えなくなっただけに違いない。

どれだけ歩き回ったか、精も根も尽き果て、またタイムズスクエアに戻って来たその時、背後からタクヤは聞き覚えのある声が聞こえた。

「タクヤ！」

☆

振り返ったタクヤのぎらぎらした目に、ヤマキの姿が写りこんだときに心が発した声は、またか、というため息。「また邪魔をしに来た人だ。いよいよ学校の連中にも気付かれてしまったか。俺が学校を休んでいた理由が。」

「タクヤか、どうしたその顔？何があったんだ？てかどうして学校を休んでんだ？」とヤマキは言いながら、もうその腕でがっしりタクヤを拘束する。その後タクヤに話しかける前に、ポケットから携帯を取り出して、誰かと話し始める。警察か親か、学校以外であってほしい、とタクヤは、ぼんやり霞んできた意識の中で願っている間に、ヤマキはぼそぼそしゃべっている。

「ああ、見つけたぞタクヤ。連れて帰れるか？いや、それはこれから事情を聴いた後からで、な？」

タクヤの恐れていた言葉が、ヤマキの会話から立ち上ってくる。「まずい、つかまっちゃう、このままだと。カオリとの約束はどうなる？俺がカオリに、嘘ついてしまう結果になった時は、もう、それはおしまいだ。おしまい。今までのカオリとの心のつながりが断たれてしまう。早く逃げないと。つかまる前に、カオリの所へ行って、救いださなくては」

「おい、どうした？」

タクヤの意識が現実に戻ると、ヤマキは、すでに電話を終えていた。

「なんかお前、ひどく疲れ切ってるようだけど？」

「お前には関係ない」

こんな言葉を言ったところでヤマキが「はいそうですか」と言って引き下がるわけでもないのは明白なのに、タクヤはなぜか必死に叫ぶ。

「関係ない。俺の邪魔をしないでくれ。お前には関係のない事」

「俺が、お前の何を邪魔しようとしてるって？」

沈黙。

「おい、答えてくれよ」

タクヤの瞳は、ぐるぐるまわりながら、ヤマキではなく、どこか、どこか遠くの空に向けられている。口はぽかんとあけたまま、沈黙。

「何？熱でもあるのか？脱水症状か？なんかほしいものは？」

「カオリ」

「は？」

タクヤはヤマキの質問に答えていたわけじゃなかった。もうその時にはタクヤの意識は現実ではなく、タクヤの心の奥深くへすっ飛んで行ってしまっていたのだ。

「カオリ、どこにいるんだ？これじゃあ、俺は使命を果たせない」

「おいタクヤ、カオリがどうしたんだ？」

タクヤの心からしぼり出た声が、のどを通過してヤマキの耳に入っていく。

「うん、そうだな。カオリはきっと、別にいいよって、言ってくれるんだと思ってた。だって俺は、一心にカオリの姿を塔から見て、ここまでずうっと歩いて来たんだもん。だけど、俺は助けたいんだ。俺でいいなら、助けになりたいんだ。俺は何より、カオリの役に立ちたい。今こうしてカオリのことを想うことは、きっとカオリの心を巣食っている、いや、救っていると思うけど。俺はカオリを、その悪魔的空間から救いだしたい」

「じゃあお前、カオリに会うために、新宿に来たってことか？」

「そうだよ」

「なんだって！」

「そうだよ、俺だってカオリが思ってくれていたことに救われてたんだ。俺の生きる意味が、俺が、俺であることの意味を、カオリ、君が教えてくれたんだ」

これもタクヤのひとりごとだった。

「そうか...お前もすごい執念だな。どこからやってくるんだか。心からの愛なんて、世の中にそんな簡単にあると思うなよ」

ヤマキの心に、すっ、と一瞬、ミズナの姿が映し出された。

ヤマキはカオリを思い出す。バスケットで軽々ヤマキをぶちのめす潜在能力を持っていながら手加減して見下していた、あの心の汚いカオリ。きっとタクヤはカオリに潜む心の汚さを知らないのだ。知らないで、好き好きうわごとを繰り返してるのだ。ヤマキがミズナを好きだったのと、

そっくりおんなじ感じで。盲目的な愛。カオリやミズナは周りの人が、思ってるような人間じゃない。いや、人間全体だ。人間の本当の姿なんて、本人以外分からない。二十四時間同じ人を、監視することはできないし、ましてやその人の内面まで二十四時間読み取るなんて、雲をつかむような話なのだ。

だからこの際、タクヤには本当のことを知ってもらわねば。つらいことではあるが。と、ヤマキは決心を固める。ヤマキだって、タクヤと同じ、被害者なのだから。言わなければタクヤがこの後もずっと、カオリの幻影に踊らされることになる。何にも得意なことがなくて、へまばかりしている、偽のカオリ像に。

許せ、タクヤ。

ヤマキはぶつぶつ一人でうわごとを繰り返すタクヤの肩に、がっ、とその逞しい腕でつかみかかると、ゆっさゆっさと揺さぶりをかけた。それまでタクヤから離れ、新宿上空をふわふわ浮遊していたのであろう彼の魂が、揺さぶるにつれ、タクヤの元へ帰っていき、ようやくしばらくして、タクヤは現実の世界に顔をのぞかせた。

「なんだよ、ヤマキじゃないか」

いつもの、ていうか学校にいた時と変わらないタクヤの正気の時の顔。さっきまでの異常な目のぎらぎらは落ち着き、穏やかさを取り戻している。

だが、少し罪の意識がヤマキの心にかすめた。「きっと、さっきまでのタクヤ、カオリのことしか頭にないタクヤこそが、本当のタクヤだったんだ。それなのに俺の余計な揺さぶりで、学校にいた時の、本心を隠したタクヤの幻影を呼びもどしてしまった。」

「大体、好きになるって、自分に正直になるからできることっしょ？」

ふと、さっきのちゃらちゃらした女の人の言葉をなぜかヤマキは思い出した。ヤマキだって、あの女の人から出た言葉は、ちょっと胡散臭く感じるけど、でも。「もしそうだとしたら、俺がタクヤにカオリの本性を伝えてしまった時、タクヤはカオリが好きっていう自分の気持ちを、もう信じられなくなっちゃうかもしれん」

ふいーん、とヤマキの頭の中で時間が巻き戻されていく。あの、ヒカルからミズナの真実を聞かされた時の所で停止。

「ミズナさんは、君を好きだと思ったことはないし、これからも好きだと思えることはないってよ」

俺はあの言葉を聞いたかったか？、とヤマキは記憶の中の、運動場で考える。続いてまた逆再生をスタートさせ、ミズナとの甘い日々までさかのぼる。「確かにミズナといた時、俺が一番正直に生きてたかもしれない。今は？今は、ミズナのことを諦めきれない往生際の悪い自分がいるだけだ」

ヤマキはまだ、ミズナのことが好きだったという自分の心の声を、ようやく聞いたような気がした。「やっぱり人間、自分の気持ちをそんなすぐには変えられない。結局、真実を知ったとしても、自分の気持ちは残ってしまうんだな」

だとすれば、今タクヤ、息も絶え絶えにヤマキと向かい合っているタクヤには、二つの未来がぶら下がっていることになる。

すなわち、カオリの本性を知らないままに、好きと思い続けるか、あるいはカオリの本性を、知った上でずるずると、諦めきれない思いを引きずって生きるか。

ヤマキは、後者の未来にいる。引きずってる方。そのヤマキに、決定権が握られている。

「タクヤ、」

「ん？何だ？」

「お前カオリのこと好きなんだろ」

ズドーン。言葉はタクヤの心を打ち抜いた。

「で、お前カオリに会うために来たんだろ？」

またしてもズドーン。

これこそが、真実なのだ。人の奥深くの心にまで、やすやすと突き刺さり、本当のその人を揺さぶる言葉。

「い、いや…」

タクヤはあくまでも白を切る。無意識のうちにしゃべっていたということはする由もない。

「タクヤ、お前、これ以上嘘の自分を通さなくてもいいんだぜ？」

ヤマキの言葉は、本当のタクヤを覆っていた、その幻影を、吹き飛ばした。おそらく一年以上、外されることのなかったタクヤの仮面がはがれおちた。

「分かったんなら、邪魔、しないでくれ」

しょうがない。これがタクヤの本心だ。

「俺はカオリのために生きたいんだ」

という赤裸々な告白も、本心ならでは。

「ヤマキ、お前は馬鹿だと思ってるんだらう。俺のことを。だって、お前はカオリを、何も出来なくて、ぐうたらしてるだけとしか見てないものな」

「いや、」

ヤマキは何か吹っ切れたまっすぐな眼差しで、タクヤのことを見つめる。

「お前の信じるカオリを、俺も信じる」

目が見開かれたまま、タクヤは動きを止めた。

「俺も、信じ」

「ふざけんな！」

キイイイイインン、と、純粋な痛みがヤマキの身体を刺し貫いた後、あたりの景色が、バチッと、白い火花を立てて消えて、後は暗闇。

「ふざけんな！」

再びの激痛の後、ぬるりとしたものがヤマキの鼻の下を流れ、それが半開きのまま閉まらなくなった口の中に流れ込むと初めてそれが血だとわかった。目の前に突如現れた暗闇に、方向感覚を失い、コンクリートの地面に頭がぶち当たったのを感じた。

これはタクヤがやったのだろうか。今は奴は本心だ。やってもおかしくない。今奴の前に善悪は無い。あるのはカオリの幻影だけだ。

手探りでケータイを出して、ヒカルに掛ける。

「たぶんタクヤに殴られた。交渉決裂」

とだけつぶやいたところで体力が切れた。ケータイが力なく開かれた指の隙間から落ちる。そして仰向けに倒れた後は、もう動けなくなった。

ヤマキの目は見えないが、まだ頭に浮かんだ映像は見える。しかしその映像も、ぽたぽたと垂れ落ちる墨汁のような闇に蝕まれていく。

「あたし前に、君と同じくらいの歳で、神見出してる人に会ったんだって」

貴重な消えゆく意識の中で、あの女の人を思い出すとは。ヤマキは自分自身の間の悪さにがっかりだった。

でも、もしかすると。

神見出してたのって、タクヤだったんじゃないか？

あの女の人と前に会ったの、タクヤじゃないか？

そうでなければ、あんな良心のかけらもないことしないはず。

タクヤにとって、良心より、カオリの方が大事なんだろう、きっと。

あの女の人に聞きゃあよかった。

そして女の人姿が掻き消え、また別の影が現れた。

ミズナ。

今、ヤマキには、普段の自信や、スポーツ万能の健康などが、ことごとく失われてしまった。奇跡的に残ったのは、ミズナへの想いだった。

ミズナの姿が目の前に現れる。

運動部員とは思えない、ミズナの白く澄んだ肌。日に当たってるわけでもないのに亜麻色につやめくミズナの髪が、揺れ動く度にふわりとなびく。すいこまれそうな大きな目を見て、よく話したこと。鈴の音のような、透き通るような声。

「ナオヤ」

「ナオヤ」

「ナオヤ」

ミズナが呼ぶ声が繰り返される。

ああ、俺も、信じ続けていたならば。

あの、昔の、俺と二人の時のミズナを、信じ続けるべきだった。

ミズナの姿が、真黒な闇に包まれていく。

そして、ヤマキの意識は、ゆっくりとヤマキを離れ、いってしまった。

遠のいてゆく思い出のミズナの中で、ヤマキは意識を失った。

☆

拳でヤマキを殴りつけた瞬間から、タクヤは、完全に一人になった。自分を理解してくれる人は、この地上には一人もいなくなったのだと。先ほどの一部始終を見た人は絶対にタクヤが極悪乱暴者だと決めつけ、彼の狼藉を、気が狂ったから起きてしまったとしか思わないだろう。だ

が当のタクヤはというと、彼は全く気がくるっていたというわけでもなかった。ちゃんと殴る理由があったのだ。

「俺の信じる物を、他の人に信じられたくない」

と、タクヤの心の声が叫んだ。カオリを本当の心を信じる者は自分しかいない、とそれだけを一年前から思い続けてきたからこそ、タクヤは学校に何とか通い続けていられたのだ。自分だけが知っていたから、自分が生きる意味をカオリに見いだせていたのだ。というわけで、どうしてもタクヤが信じるカオリ像をヤマキに教える訳にはいかなかった。

とはいってもタクヤの話聞いてもなぜぶん殴ってしまったのか、それを理解してくれる人はまずいないだろうし、あの現場だけ見て、「タクヤの行動ももっともだな」と肩を持ってくれる広い心を持った人なんか限りなくゼロに近い。いや、心の広さの問題でもないのかもしれない。

タクヤの理解者は、ほぼゼロだった。

カオリを除いて。

全てはカオリのためなのだ。カオリを思っただけのこと。そう分かってくれるのは、全てを見下ろす塔にいるカオリだけ。タクヤが、極悪乱暴者、というレッテルから逃げ伸びるための救いは、もはやあの球技大会の出来事だけだった。しかもあの時タクヤが何と言ったか、聞いていたのは言われた本人であるカオリだけ。

「三坂君は、いい人だよ」

会った時、カオリがそう言ってくれると信じている。

だがその間にも、心の中を孤独がだんだんと占めてゆき、タクヤの孤独濃度は次第に高まりつつある。自分は、本当に頭がイカれている気違いだったんじゃないか、と考えるくもない恐ろしい仮説が頭をもたげつつある。自分のさっきした行動が、自分でも理解できなくなる。

「三坂君は、いい人だよ」

早くカオリに会わなければ。

すっかりあたりの新宿は闇に呑みこまれてしまい、すぐ目の前にある建物ですら、さっぱり形が分からない。塔も見えない。なにもかも、なにもかもが見えない。

タクヤはカオリに場所を聞こうとメールを送るが、受け取られない。さっきからずっとそうだ。カオリの身に、何かあったのだろうか。「俺はもう、手遅れなのかもしれない」目の前を、会社帰りなのか、たくさんのスーツを着た人の集まりが、黒い洪水のようにタクヤを押し流す。新宿には、これだけ大勢の人がひっきりなしに往来しているのに、誰もタクヤに手を差し伸べてくれる人はいない。周りを行き交う名も知らぬ人にとっては、タクヤなんか、大勢の中の一人、としか思われていない。タクヤを特別だと思ってくれる人はいない。

「みんな、真実が見えてないからなんだ。俺が、特別な、いい人である、という真実を」

そう思いたい、それを証明してくれる人はいない。

空を見ても、黒々とした空間に、看板の光がぽつぽつ宙に浮いているだけ。塔は見えない。タクヤはもう、何も見えなくなってしまっていた。

無力の涙が、タクヤの目から一筋、ふた筋伝い落ちる。この涙に気付いてくれる人も、この地上にはいないのだ。自分の価値に、気付いてくれる人だって。

信じなくては、カオリを。信じ続けろ。信じ続けろ。信じ続けろ。  
信じ続けるその行為こそが、タクヤの価値に、他ならないのだから。

☆

寝耳に水だった。

携帯を手にしたままヒカルは驚愕する。何が、起こっているのだろうか、新宿では。しかしながら、とりあえず残されたものの使命、と題し、ヤマキのこれまでの足取りをパソコンに打ち込む。そして安否が分からなくなっていることも。

今はヒカルが暗闇にいるようだった。文字通りの暗中模索。ヒカルがじっと使われなくなった教室を占拠し、黙々と作業に従事する間に、刻々と見えないところでは世界が変わり続けているのだ。今回ヤマキは、その「世界の変わり目」をおそらくちょっとだけ見たのかもしれないが、タクヤにぶん殴られ？意識も、「世界の変わり目」を見た記憶も遥か彼方へすっ飛んで行ってしまった。

ヤマキは垣間見ただけだが、タクヤはなぜか「世界の変わり目」に陣取っている。調査しに来たヤマキも追い払い、その変わり目を、ほしいままにしている。

タクヤめ。学校に来なくなった間に、いつの間にそんなトップシークレットの場所に入りこんだのだろう。

そもそも、「世界の変わり目」とは一体どんなものなのだろう？誰が世界を動かしているのだ？新聞部としてそれは是非知りたいところだ。世界をつかさどるところに行けば、記事がバンバン書けるかもしれない。

行ってタクヤに会うしかない。で、世界の変わり目について教えてもらおう。

だがその前にしておかなくてはならないことがある。

ボタンを押すと、にゅーっと、出来上がった新聞がプリントアウトされて出てきた。これをさらに印刷するためには、同じ階の、ここから少し離れた印刷室に行かなければならない。慎重に。見つからないように。もし、どこからともなく、学校の真実を書いた新聞が大量に、湧き上がるようにして出現したら、あまりのセンセーショナルぶりに、内容が何であれ皆目を丸くして、我先に新聞を読むに違いない。

それゆえ、印刷室で印刷しているところを見られてはいけないのだ。絶対に。これは、「どこからともなく出現した、真実を見通す新聞」という触れ込みにしないと。もちろんヒカルの名は伏せて。

実際、本名を公にして、センセーショナルなことを書くよりかは、名前を伏せた方がずっと話題性がある。

ヒカルはドアを細く開け、その隙間から滑り出るように、そっと抜けた。既に真っ暗になった廊下を音ひとつ立てずに、印刷室に向かう。と、タン、タン、タンと階段を上ってくる音がしてきた。誰だ。とっさに近くの教室に避難し、息をひそめる。じっとりと濃密な、緊迫した空気が立ち込める。こんな中では息もできない。窒息してしまう。

ガラガラガラガラッ

！！！！見つかった！

「ナオヤ？ねえ、そこにいるの、ナオヤなの？」

寝耳にミズナ。寝てないけど。

ヒカルはホッと安堵の息をゆっくりと吐きだし、姿を見せる。

「斉藤君かぁ」

一応ミズナさんも、昨日まではヤマキの彼女だったのだ。一応話しておかないと。

「ヤマキナオヤを探してんのか」

「う、うん。ちょっと、ね」

「今ヤマキは、新宿で消息を断っている。タクヤに殴られたらしい」

ミズナの美しい顔が、音もなく凍りついた。

☆

「こんなことは初めてだ」

わたしをずるずる引っ張ってゆきつつ竹西さんはそう言った。

「初めて？」

「そう。だから折檻のための部屋とかそもそも作られてなくてさ。君は想定外だった」

じゃあ今ここにいる人たちは、想定内の生き方だけをしてきたのかしらん？お寿司の皿のように、レーンで決められたところを黙々と。もしかしたら彼らは、レーン以外の生き方を、知らないだけじゃなくて？

「何でわたしがつかまならくぢゃならないんですか？」

「君が、ここの、方針に背いたから」

「何ですか、この方針って」

ずるずるはなおも続いて、階段を上り、寝泊まりする部屋にまで来てしまう。

「方針？全ての人の幸福をつかさどる、世界の変わり目に決まってるじゃないか」

「こんなことしてても、人は幸福にならないと思う」

「おい、ここに来てまだ言うか」

おとなしくしてろ、と竹西さんはわたしを、わたしの寝室に放り込む。

「君の処遇は、ここの支部長が決めるはずなんだが、あいにく今はいない。失踪してしまったんだ、一年くらい前に」

「ええ！」

戻ってくるまでここで待機してろってこと？なんだそりゃ。

だけど、思ったよりずっと早くにやって来てしまうとは。

わたしと竹西さんだけしかいない、進展の兆しさえ見られないこの階のよどんだ空気を、本来モニターの前に、座っているべき男の人の来訪が破ったのだ。その男は、普段は知らないからかぜいぜいと、息を口から洩れいだしながら開口一番、

「支部長、帰ってきました」

「何！」

したからざわめきが聞こえる。そしてそのざわめきが、次第に大きさを増していった。

支部長がやって来たのは竹西さんが、わたしを完全に部屋に押し込み、ボタンと扉を閉めてすぐの事。

「おい、いいか木本。支部長が君と二人きりで話して決めたいそうだ」

という竹西さんの声が、扉を突き抜けわたしの耳に入る。

わたしはどうなってしまおうだろう。でもちゃんと話すんだ。そう決めてる。わたしはこの塔が、今のままでは何の役にも立たないことを伝えたい。同じ人が、みんなに幸福を与えたら、それは既に幸福じゃない、ってことも。

ガチャ。

入って来たのは。

「あれ？ミユキさん」

わたしの引越すする前の、中学の先輩。そして、引っ越してからは一緒に暮らしてる。ミユキさんは、わたしを妹のように見てくれてたんだ。

「何でここに？」

☆

カオリがミユキさんに会うより少し前に、ミユキさんはタクヤに会っていた。

「おお、タクヤ君久しぶりー」

人間の波にのまれていたタクヤを、その一言が引っ張り上げたのだ。

「カオリのお姉さん」

「ま、君がここに来ることは知ってたけどね。カオリに会うんでしょ？」

何で知ってるんだ、と気付くほどの理性も残っていなかった。タクヤは心の声丸出し状態だったからだ。

「でも、どこにいるのか分からないんです」

「あはは。知ってるから心配すんなって」

お姉さんがタクヤをぐいぐい引っ張って、着いた先は、これで今日三度目のタイムスクエア。その賑やかさから離れるように、交差点を渡ってさらに少し行く。

「ここ」

カオリさんが指さしたのは、どっしりとした両端の建物に押しつぶされて、長細くなったようなたたずまいの建物だった。

「もっと自分は、塔のように高いところだと思ってました」

「いやね、入ったらほんとに高く感じんだってば」

その言葉も聞き終わらないうちに、タクヤはさっそくその建物に飛び込もうとする。が、お姉さんがそれを押さえつける。すごい力。

「ダメダメ、ここは一見さんお断りなんだって」

なのにそういうお姉さんは、さっそく入ろうとしている。

「タクヤ君は、この非常階段を上って、五階の所で待ってて。で、そうだなあ、七時になったら、かぎ開けるから急いで入って」

「何かいけないことしてるようなんですけど」

「あはは。まあ、そうかもしれないけどさ。君ならオーケー。このあたしが許可します」

このお姉さんが許可した所でな、と思った後、ようやく正気に戻ったタクヤは、気になっていたことを思い出した。

「ここは、何をするとところなんです？」

お姉さんは、にやりと笑った。

「世界の分かれ目を作りだすところ」

☆

そのころの時間帯は、新宿から出る下りの電車が混んでいるのは当然だ。だが、なぜかこの日は、新宿へ向かう電車も大変に混雑していた。

タクヤが新宿で見つけたことで、今まで分散して待ち構えていた、元ひきこもりの皆さんが、新宿へと向かう動きが一つ。彼らは、誰よりも早くにタクヤを目撃し、石上のブログに乗せ、自分の存在を、現実よりも、ネットの方に載せるのに躍起になっているのだ。

後もう一つの流れは、サキハラ率いる上宮中の集団だった。

「新宿に行け！」

サキハラのこの発言が全ての発端だった。彼はカオリ目当てでも、タクヤでも、ヤマキでもない。

ミズナだ。

ミズナはヒカルからヤマキの安否不明という知らせを知るが否や、踵を返して真っ先に駅へと向かったのだ。ヒカルは、これも話題づくりと考え、「ミズナも新宿へ向かう」という記事をさらに追加したものを、大量に印刷した。

この新聞は、ヒカルなき後、ちゃんと体育祭の練習で残っていた生徒たちの間を乱れ飛んだ。現在ミズナの彼氏となっているサキハラは黙っておかなかった。

「ミズナを見つけろ、みんな！」

その一言に、みんな流されてしまった。サキハラは既にミズナと接近しているので、かなりの力を持っているのだ。また、単にミズナのファンもいたことだろう。

かくして、大量の人を、京王線は新宿まで運んでいたのである。

センセーションが渦を巻く。

## 第十章

---

### 第十章

わたしが今まで見てきたミュキさんは粉々に砕け散り、疑問ばかりがうずたかく積もって。

「ミュキっていう名前も嘘だったんなら、この二年、ミュキさんはわたしに嘘をつき続けていたってこと？大学に行くと見せかけて、この塔に来ていたってこと？」

「んなこと言ってないじゃん」

しいっ、と唇に人差し指を押しあてながら、ミュキさんはそう返す。

「だから、大学に通う前の話よ、あたしがここにいたのはね」

「どうやって、出られたんですか」

この塔に入ったら、よほどのことが無ければ出られない、らしいけど。

「古文」

へ？というわたしにはまったく、何が何だかわからない。

「この塔の資料が見つかったんだよ、あたしが来て一年ちょいに」

で、それを読み解くという名目の元、下界に初めて足を踏み出せたのだ、というようなことをミュキさんは言ったあとで、

「ま、国文学は面白い事限りなしだし大学もいいところだったけど、あほらしい塔に帰ろうとはさらさら思わなくてさ。あ、ここは逆説じゃなくて順説かな」

「やっぱり、ミュキさんも同じこと考えてたんだ」

ミュキさんは、音を立てずに楽しそうに笑った。たぶん大声で笑うことが昔、出来なかったからかしらん？

「てかさ、ふふふ。てか、あたしがカオリに、あたしとおんなじ気持ちになってくれるように仕向けたから、当然なんだって」

？？どうということ？？わたしはミュキさんに操られていたの？

「こんな塔にいたってきっと分からなかったと思う、絶対。人を遠くから見下ろしてるだけじゃ。ラッキーなことにあたしは気付いたけれど、あたしだけの力じゃ、ねえ。そこでカオリ、あなたの出番ってわけ」

ビッ、と人差し指の先っぽが、わたしの顔の方に飛んできたものだから、それはびっくり。白羽の矢？

「幸い、まだそんなときカオリは中二だったんだよね。あは、精神的じゃなくってリアルにね。いいぞ、中学生って。しかも公立でしょ？いろんな価値が混濁してて。将来、違った生き方をする人でも中学はおんなじとこ通うんだもんな」

二年前。わたしは十二、ミュキさんは十七。奇跡的にも一年間、同じところに通っていたってこと。

「あたしの知り合い最年少のカオリなら、公立の中学校に通えるってことであたしはわざわざ呼んだわけ」

一年前。わたしは十三、ミユキさんは十八。まだわたしはあの日のことを、覚えてる。

☆

ミユキさんが学校を卒業して行ってしまってからというもの、学校に溢れかえった生徒の中で、わたしの意味みたいなものが溶け出しつつあった二年生の時のわたし。あの時もわたしを氾濫した人間の中から掬いだしてくれたのはミユキさん。忘れもしない。

家の人がほとんどの来客であるあの学校で卒業生が来ること自体珍しかったのだ。しかもわたしに会いに来てくれるなんて。

ミユキさんは、テニス部でわたしの先輩に当たっていた人で、慣れない環境におどおどしていたわたしに、やさしく接してくれた恩人なの。上宮中に、移った時にもミユキさんのような人が部活にいたらよかったのに。

「一年ぶりだね、カオリちゃん」

そう言って久方ぶりにミユキさんが現れた時のわたしの喜びようと言ったら。お互い抱き合っ、再会をかみしめてただけど、今思い返すとわたしだけじゃなくてミユキさんも、塔の所で、今のわたしのように孤独に身体を蝕まれていて、下界にでても一年前のわたしのようにうまくいってなかったんじゃないかな。きっと知り合いはいなかったんだろうし。

ちょっと仕事を手伝って欲しいから、て理由だったかそうでなかったか。まあどっちでもいいんだけど。わたしはあの学校から、牢獄のようなあの学校から逃れられるんだったらどんな理由でも良かったから。まあでもわたしの長期休学を学校が許してくれたんだったら、きっと塔のために古文を読み解いてくれる人が必要だとかなんとか、言ったんじゃないかしら。あくまで推測の話。

かくしてわたしはわたしの幻影のような人で埋め尽くされた前の学校を離れて、晴れて東京に移り、ミユキさんの家に棲みつつ上宮中に通う生活が始まった、ということになる。

☆

...というようなことをわたしはいまでも忘れていないんだ。

「でも、」

ミユキさんから真実を、伝えられても出てくるのは疑問ばかり。

「わたしを何で呼んだの？」

「決まってんじゃん」

決まってる？ミユキさんが思っていた通りの道筋を、わたしは歩いてきたってこと？

「カオリとあたしでこの腐れバベルの塔を、ぶっ潰す」

その言葉から生まれたわたしの疑問は二つ。バベルの塔っていうのは、旧約聖書のバビロンの街に建設されつつあったと伝えられている塔で、残念なことに高みに登るこの塔が神様の怒りを買ってしまい、完成されずに終わってしまったことだってことは知ってるけど。何でバベルの

塔なんて言葉を使ったのか、これが一つ。そしてもう一つはぶっ潰すっていう言葉。どうやってぶっ潰すんだろう？旧約聖書の神様でもあるまいし。

「そうなの、カオリ。あんたをここに呼んで、公立の中学校に通わせたのも、そういうわけ要は。でも、きっと分かってくれるんじゃないかな。わたしがバベルの塔をぶっ潰す理由が」

「バベルの塔って？」

ミユキさんは座った状態で、人差し指をくっ、と床に突き立てて言う。

「ここよここ」

なぜバベルの塔なのか。明らかに正式名称ではないっぽいこの名前で呼ぶに至った顛末が、ミユキさんから語られる。

☆

いい？

この塔は、何のために作られたか、正直なところよくわかんないんだ。まあ、前任者からは、大昔に、それこそ奈良とか平安とかに作られたって言ってるけどさ。古文で書かれた文書も見つかったわけなんだけど。でも、それはこの塔が、由緒正しきものだと言いつけるためにわざわざ後の時代に作った偽物かもしれない。要は、この塔が昔からあるってのも胡散臭いわけ。

これはあたしの推測だけど、塔が出来た理由は何か宗教とかと絡んでんじゃないかな？これ思ったのは、大学に入った後なんだ。それからいろいろ神にまつわる話とかも読んでみたわけ。パスカルのパンセとか、ね。んで、あたしがたどり着いた結論は、人間はみんな、生きてる意味を、神を使ってとらえようとしているってこと。神を信じるってことが意味のあることだって思うあまり、信じる者が救われるっていうさ、何？ディエス・イレみたいなもんが考えだされたんじゃない？つまり信者の論理は、生きる価値のあるものが救われて、その意味って言うのが、神様の教えを守ること、みたいな感じなんだよ、きっと。

そう考えたらこの塔もおんなじじゃないか、って思ったの。塔の建設にお金を出して、生きる意味を見出す、みたいな人間の心理から生まれた偶像ってわけよ。それがさらに高じちゃって、あたしたちみたいな人のための学校を作ってその後あたしたちを、この塔に住ませる、みたいなことまでしちゃってさ。あはは。

あくまで推測だよ？もうほんとに塔が作られた意味を知ってる人はいないから分からない。真偽のほどは。

でも、塔の出来たいきさつはもう関係のないってか、どうでもいい事なのかもね。塔はただそこにあるだけの存在になっちゃったし。え？あのモニターで幸せを与える？あはは。マジで信じてたのあれ？んなわけないじゃん。たぶん宗教の名残だよ、あれは。昔はさ、塔が宗教と結びついてたかもしれないけど、今はどう？誰もあの塔拜んでないっしょ？みんな同じ何かを信じるって、出来なくなったんじゃないかな？みんな同じものを見ているわけじゃない。ね、カオリ。あんたとタクヤだってそうじゃん？二人は、他の人より深いところでつながっているんだもんな。きっと今新宿を歩いているたくさんの人それぞれにだって、神のように、守るべき何かがいる

、そのために生きてるんだ、て思うよ。カオリにとってのタクヤのようにね。もう、神は多様化しちゃったんだ。バベルの塔のときだってそう。知ってる？これも本で読んだんだけど雷みたいのがバベルの塔に落ちた後、塔を建設していた人達が話す言葉がバラバラになっちゃって意思疎通も不可能になったから、もっかい立て直しは出来なかったのね。今は、言葉がバラバラになっただけじゃなくて、みんなが思い思いの神を頭に思い描きながら生きてるんだよ。逆にこんな塔をお金出しあって作ってみんなですそれを拜むって、んなのはもう昔の、過ぎ去った話なわけよ。時代遅れ。塔は廃棄物でしかない。

で、時代遅れを一向に気付かないここの連中も廃棄物確定。あ、カオリ以外の、だよ？奴ら、神をまったく信じてない。もちろん昔のように、塔を拜みもしないし、最近の人達のように、それぞれの神を思い浮かべたりもしない。阿呆。何のために生きてんのあいつらは。カオリだって嫌気さすでしょ？黙々と意味のない「幸せを与える行為」しちゃってさ。まあ、あたしだって昔はそうだったかも知んないけど。塔の奴らは、あれする以外の生き方を知らないんだと思う。学校入って、さらに塔に入って一生を終える、それだけの人生。奴らもかわいそうっちゃあかわいそうなんだよな。学校から既に寮暮らしで、塔に来てからも寮暮らしは変わらずに。こんなんじゃ、他の生き方をしてる人との接点がまったくない閉鎖空間みたいなもんだもん。周りのつまらない生き方に合わせていくしかない。

だからあたしは、繰り返すけど塔をぶっ壊す。全ての悪の原因は塔。今は塔なんて誰も必要としてないのにあるのがいけない。で、塔にいたみんなを開放して、今までの人生のくだらなさを、気付いてほしい。

だからカオリ、タクヤとあなたのつながりを、巢食いを、互いの巢食いをもう一度見せて。昔あったんでしょ？それでカオリはあたしみたいに、塔のくだん無さに気付いたんだよな？

あの、神を見出してない人間にも、信じることの大切さを説くの。巢食いを見せることでね。

だからバベルの塔ってあたし呼んでんの。今あたしとカオリは、神みたいにより広い視野を持ってんの。少なくとも塔の連中よりかは。だからあたしたちには、道理に合わない、無意味のこの塔を、ぶっ壊す権利がある。権利、よりも責務かな。

お願い。わたしの言うことを聞いて、カオリ。

☆

実をいうとミユキさんの話の意味は、頭で像を結ばずに、ただうすぼんやりとしただけ。わたしはミユキさんの意志に合わせて動いてたの？そういう恐怖も話を聞いている間に一度は、現れたものの、わたしはミユキさんのことを少しも恨んでない。逆に感謝しなくちゃ。ミユキさんが、あの、名前を聞いただけで身震いする学校に姿を見せて、わたしを連れてってくれなかったらきっと、塔で黙々と作業をすることだけが人生だ、って思ってただろうし。それに、三坂君にも会えなかった。

いくらミユキさんが扇動してたとはいえ、それはわたしのやりたいことだったのだ。上宮中で過ごした日々、あれこそわたしが本当に欲しかったもの。

そして今回の頼みも、やるべきか、やらざるべきかって悩むより以前にわたしは「やりたい」の。三坂君に久しぶりに会って、わたしはもう、塔の人間じゃないことを証明して見せる。「わたし、やる。三坂君に会いたいもの」

これがわたしの、心からの答えに他ならない。

「そう！それでいいんだ、カオリ。あんたの、生きる意味を、心に巣食う神を、見せるだけでいいの」

おそらくミユキさんは、わたしが正直に、自分の心の声に正直に従って、やりたいことを心おきなくやってほしいって思ってる。

「でもどうやって？ここからは出られないんでしょう？大学でまた研究するって言って、わたしも連れてってくれるってこと？」

「いや。てかさ、それだったらわざわざあたしがカオリを塔まで呼ばないって」

わたしに届いた塔からの召集。あれはミユキさんからだったとは。

「大体大学もうやめたしね」

それにはわたしもそうか、と納得。ここ数カ月のミユキさんの自由奔放、というか無軌道ぶりを思えば。髪は染めるし、ピアスは着けるし。あれじゃ会った人に悪印象を与えかねない。でもいいの。ミユキさんは、更に人生の上のステップに登り、もっと素敵な生きる意味を見つけたんじゃないかな。

「でも、それじゃどうするんですか」

「もうタクヤ君は、この塔の外の螺旋階段にいる」

「えっ」

見失ったあげく、折檻されてたせいで、来てたなんてつゆほども知らなかった。

来てくれたんだ。

じわりとわたしの胸を締め付けるような、けれどもそれでいて、心をふわりと浮かせるような、そんな気持ちに包まれる。

「でも、カオリにはカオリでやってほしい事がある」

「なんでもやる」

まだ会ってはいないけれど、もう心同士はさっきのミユキさんの言葉でもう、三坂君に会ったも同然。今三坂君とわたしの目的は一つになった。

「カオリ、今何時？」

「六時五十分」

「じゃ、そろそろ始めるか」

バベルの塔を、ぶっ潰す。

☆

カオリがミユキさんと話している頃、普段なら会社から帰る人が次々と吸い込まれるはずの新宿駅に、ぞくぞくと人が集まっていた。ミズナをもとめて新宿に来たサキハラ一行の中では、すで

に大半の人の意志と行動が乖離しつつあった。

「さすがに親、心配してるだろうな」

「時間が阿呆みたいに過ぎてく。サキハラ、このヤロウ。いくらミズナの彼氏になったからって」

南大沢から新宿までは早くても四十分。さすがに、ヒカルの新聞のかけた魔法がその効果を失いつつあった。学校の非常事態、といった感覚が揺らぎつつあり、現実に戻されて正気に帰るのも時間の問題だった。電車の窓を飛ぶように流れる、家一軒一軒の光の集まりも、彼らに、もっと違った時間の使い方があったのだとそれとなく示していた。

だが、現実に戻されつつある一方で、上宮中の面々の中で、新たな流れが起きていた。

日常を、ぶっ壊すものを見たい。日常がぶっ壊れるところをこの目で見たい。

ミズナのことしか頭にないサキハラとごく少数の人を除いた全員は、皆この思いがあったからこそ、未だ正気を戻さずに、新宿まで足を運べたのだ。正気だったら学校帰りに新宿へは寄らないだろう。いくらその後、塾へ行く予定があったとしても。

一方、タクヤ信者の方々はというと、タクヤを見ることで頭がいっぱいだった。タクヤに人を正しい道へと導く力があるという、石上の嘘を信じているから、というわけではない。彼らは彼らで、日常をぶっ壊したかったのだ。

彼らは、自分の存在が、学校にも家にも無いと思いながら、くすぶった日常を送っている。それゆえもし、何か発信すべきことができたなら、一躍「発信者」としてネット世界に顔を出せるのではないか、という希望を常に抱いていた。その発信できる場所を作りだしたのが、タクヤを祭り上げたほかならぬ石上であったことは言うまでもない。「もしタクヤのアップ写真、若しくはツーショットが取れた暁には、タクヤを追ってここにきている人たち全員の憧れになるし、ネットにも名前がとどろくに違いない。」と、そう考えていたわけだ。

それがさらにエスカレートした原因は、上宮中の誰かが落としたのか捨てたのか、電車に落ちていたヒカルの新聞を、一人のタクヤ信者が拾ったことだった。

その信者が、ネットにさっそく書きこんだのは言うまでもない。彼らには今、発信することが全てなのだ。自分の記事に興味を持ってくれるかが大事なのだ。

タクヤが同級生を殴った、という事実は、タクヤに懸ける、信者の心に火を付けるに値する、センセーショナルぶりだった。もしタクヤが逮捕されるところに居合わせ、更に警察を助けでもしたら、自分の存在は、瞬く間に知れ渡るに違いない、と。

タクヤが最後に確認された、タイムズスクエアに、信者は我先へと駆けこみ、たちまち人だかりができた。

「おい、何だあれ？」

そういうサキハラが見た異常なまでの人だかりが、まさにそれである。

「行ってみよう」

日常をぶっ壊すものでもあるのかと、信者の群衆に上宮中の連中が混ざる。それを新たなタクヤ信者と勘違いした信者の方々は、更に競争心に火がついた。それに伴い、ビッグイベントのようなものに自分がいるのだという高揚感も付随した。

しかしこんなに人がいながら、すぐ近くの建物の螺旋階段にタクヤがいるのを、誰も気づきはない。

ただ彼らは、無意味にこの異常な空気を楽しんでいたのだ。事件にすぐ首を突っ込むくせに、彼らは自分では事件は起こさない。ただそれを見るだけで、自分がつまらない人生から離れた気持ちになってるだけ。

とにかくこうして、西新宿は、普段の人通りの激しさに輪をかけるように、人々で埋め尽くされつつあったのだ。

☆

タイムズスクエアの喧騒から少し離れた、光さえも届かぬような、狭く人通りの少ない裏通り。未だにヤマキは意識不明のまま横たわっており、光のない路地の暗闇に溶け込んでしまっていた。と、その時一人の人影が、音もなくヤマキがくたばっているすぐ手前を横切る。手に持っているスマートフォンの光が、ほんのり闇に浮かんでいる。その人はおもむろに立ち止まると、どこかに電話をかけ始めた。

ヴーヴーヴー。という叫び声とともに、ヤマキの手から滑り落ちてその後ずっと死んだようにひっそりと転がっていたヤマキのスマートフォンから白い光がほとぼしり出る。人影はさっ、とヤマキに駆け寄ると、その前にひざまずいた。

光を発し続ける二つのスマートフォンが、どこまでもくらい路地で浮かび上がるこの光景はまるで深海にいるかのようだった。ひざまずきながらたたずむ人影の口から、よわよわしい声が漏れた。

「ごめん、ナオヤ」

☆

「ごめん、ナオヤ」

その言葉に呼応するかのように、完全に深海に沈んだかのようにだったヤマキの意識がゆっくりと浮上する。

ヤマキがうっすらと目を開けて見えたものはしかし、彼が意識を失う最後の景色そのものだった。「また夢の続きを見られるとはな」おぼろげにもヤマキはそう思った。

「うちは本当にサイテーの人間だよ」

自分の記憶力すらおぼつかなくなったのか。あいつはこんなしみったれた言葉を吐かなかつたぞ。どこでこんな記憶にすり変わったんだ？

「せっかくナオヤと友達になれたのに、学校を支配することばかり考えてて」

そうだ、あいつそんなこと言ったな。何も思い出したくもない事言わなくても。これは俺の幻影なんだから。夢なんだから。無意識が見せる映像なんだから。

「そう、そうなの。人と一緒になると、すぐうちの願いを聞いてほしいと思っちゃうの。うちは

わがまま。わがまままでサイテー」

いや、でも俺は好きだ。それでも愛してるって、意識が飛ぶ前そう思ったじゃないか。

「でも、うち、ナオヤのこと、愛してる。心の底から。ずっとずっと。一年の時から。初めて声をかけた時から。でもね、あのころはずっと、自分がわがままってこと隠してたの。ナオヤに好きって言われた時、うちの心はそれこそ締め付けられて、苦しかった。もし、うちがわがままって知ったら、うちのどす黒さに気付いたらナオヤ、うちのこと嫌いになるんじゃないかって。だからうち、ナオヤに好きって言う前に、自分のことを全て打ち明けたかった。初めて人に言ったあの時。自分の心の汚さを。ちょっと盛ったけどね。だってこれから先、もっと自分のわがままがひどくなっちゃうかもでしょ？将来を見越して。なんて、何言ってるんだろうね、うち。ほんとだったらその時、ナオヤが『サイテーだなミズナ』って言ったらうち、ナオヤからもう離れようと思ってたし、『それでも愛してる』って言ってくれたら、初めて素直な自分を出したんじゃないかな。それまでうち、ずっと人に、偽の自分を見せてたから、ほんとの自分を受け入れてくれる人が欲しいって、ずっと願ってた。それなのに、まさかこんなことになっちゃうなんて」

今までヤマキが見たどのミズナでもなかった。そしてこれが本当のミズナだった。本人いわく心がどす黒く染まったミズナ。でもいいのだ。ヤマキは、ミズナを丸ごと愛すと決めたのだから

。そう思った瞬間、ヤマキの意識が、遙か水底から立ち上がり、一気に水面へ駆け上がった。目を見開くと、そこには泣きはらしたミズナの大きな目があった。瞬間、それまでどこか、心の奥深くに眠っていた、ヤマキが最も言いたかった言葉、それが口まで一直線にこみ上げてきたのだ

。「好きだよ。俺はミズナの全てを愛している」

ヤマキとミズナは、だんだんと満ち溢れてくる幸福に包まれながら、じっとお互い見つめあった。くっつきそうなほど、顔を近づけながら。あまりに近いのできつと、ヤマキの吐いた息をミズナが吸って、ミズナが吐いた息が、今度はヤマキに吸い込まれるのだろう。と同時にヤマキの心を占めていたもやもやも吐きだされ、それをミズナが丸ごと受け入れるかのように吸いこみ、ミズナの心にわだかまっていたものが、今度はヤマキに吸い込まれてゆくのだろう。

目の奥が緩んでしまったのか、ミズナの目からは涙があふれ出て、ぽたぽたとこぼれヤマキを湿らせた。つられたのか、同じ気持ちだったのか、ヤマキも、言葉より先に、涙が出た。

二人を包む幸福は、霧のようにあたりを霞ませる。周りは見えない、過去は思い出せない。今どこにいるか、そして今まで何をしてきたか、そんなことを、まっさらに消しとばすかのように

。ヤマキは、自分が再び生まれた、という気がした。初めて生まれた時の、あの純粋な自分に戻れたのだと。生まれ変わったヤマキは、まるで脱皮でもして、自分の抜け殻を眺めるかのごとく、今までの自分を思い返し始めたわけだ。

阿呆だ。思い返せば返すほど。「俺は、なんであそこまで、多くの人の役に立ちたかったんだろう？」

できるだけ、たくさんの人の支持をえられるように。そんな焦りが頭の中を飛び回っていたヤマキは、ミズナの扇動以前から、「リーダー」になることに闘志を燃えたぎらせていた。リーダーになることは、たくさんの人の役に立つ。てことはたくさんの人の役に立てれば、自信が、手に入れられる。そう信じていたからこそ、生徒会長、部長、その他もろもろの役職を、歴任したというわけだ。

だが、そこで得た自信は、何への自信だったんだろう？自分が仕事をたくさんして、人の役に立ったことか？もしそうだとしたら、仕事をしなくなった時、俺はいったい、どうなってしまう？価値が無くなるのか？

発言権の座に勢力の手を伸ばしてきたサキハラを見るたびにヤマキは、そんな恐怖に襲われるようになった。少し気でも抜いていたら、サキハラに追い越されてしまう。サキハラから逃げるように、ますます「人の役に立つ事業」、つまりは、ミズナのお願いに、力を注いだわけだ。

それが、あの、とんでもなくハードな体育祭練習の、発端、ということになる。

もう終わった話だけど。

体育祭がどうだとか、人の役に立つために、役職がどうだとか、どうでもいいのだ。いまさら。幸福に身を預けながら、夢心地にヤマキは思う。自分のそのままを、愛してくれる人がいるのだから。心を締め付けていたわけのわからん焦りがゆるりとほどける。もうどうだっていい。

役職なんぞ、サキハラにくれてやる。

サキハラはまだ知らんだろう。本当の幸福というものを。役に立つことを考えなくても得ることのできる、安心というものを。

これだ。これだけが幸福だ。

ヤマキとミズナは、二人ぼうっと、よりそいながら、新宿の街を眺める。

二人はもう、新宿でこれから何が起きようと、どうでも良かったのだ。

☆

陽動作戦だ。

最後にミユキさんは確認のためそう告げた後で、気持ちいいほど何のためらいもなくドアを開け放ち、作戦通り、宣言に。

「話し合いの結果、カオリはこれまで通り、塔の監視の役のままと決めました」

ドアの周りで、ぞろぞろと、待ち構えていた人たくさんにそう高らかに言い放つと、わたしをひつつかんで部屋から押し出したミユキさん。ここまでは順調。いい滑り出し。

「さ、使命に取り掛かりましょ」

ミユキさんのこの言葉に押されるかのように自然を装いつつわたしは、一日ぶりの持ち場に帰ろうとする。ここでドアの周りに集まっている好奇心、つまりゆかしが溢れる人どもも帰らなくてはならないというのにも関わらず、一歩たりとも動きはしない。当然なことなんだけどね。ミユキさんの、古文書調査の結果をいまだ聞いていないのだから。

「あの、支部長？調査の件は？」

皆を代表して、竹西さんが珍しく平身低頭でミユキさんに訊く。

「あ、そうだった。まだ言ってなかったか。すっかり忘れてた」

今気付いたように言い、笑うべきか、黙ってその言葉をスルーすべきか、どっちつかずのあいまいな空気を作りだしたミユキさんだけれども、陽動作戦のうちなのかもしれない。監視室、つまりモニターがある部屋に向かうわたしは背中越しに、ミユキさんの声を聞きつつそう思った。ミユキさんの研究の成果を聞きたいのは山々なれども、わたしには今、時間がないのだ。

ミユキさんもミユキさんで、立ちながらもなんだから、と支部長専用の部屋で、研究発表会は執り行われるみたい。それもわたしに気を使ってのことかしら？

エレヴェータでモニターの部屋にまで戻ると、そこには人一人としていなくて、どこまでも静か。時間が止まったような部屋にわたしは足をおそろおそろ、踏み入れる。

しかしこの塔の人は皆阿呆だ。ミユキさんの予想のままに、みんながみんな研究発表会に行ってしまったのだ。ほんとお暇な人達としか言いあらわせない。そんなことして楽しいのかしら？ 周りに合わせて、行動するだけなんて。ま、でもこの部屋に人が居残っていたら、ミユキさんの陽動作戦はおじゃんになってたわけだけど。

わたしは周りに流されない。すべきことは見えている。この塔から逃げる。そしてこの塔をぶっ潰すこと。三坂君の、手を借りて。

ミユキさんより手渡されたハンマーを握りしめた時はさすがに持つ手が震えた。ほんとに、こんなことをすることが正しい事なのかと。でも、とわたしは思いなおす。ミユキさん、三坂君がやりたかったことなんだしそれに、人の助けになれるってことそれは、何しろわたしのやりたいことでもあるのだ。確かに、大勢の人のためになることでもないのかもしれない。けど、そもそも人が本当に望んでいることなんて、大勢が望むものと同じ、っていうわけでもない。

人は、誰かに、自分のことだけを想っていてほしいって思ってるんだから。

だからわたしはそんな人のことだけを想って、行動しなくちゃいけないんだ。

わたしはじっと、モニターに映るわたしの街の夜景を眺めた。三坂君を探すわけじゃない。大体夜なんて、ぼつぼつとともる家々の灯りくらいしか見えないし。そうじゃなくてわたしは、今までの、学校の出来事を思い返していたの。ここでの一年が、塔になって立ち上がり、次第に世界を見下ろすまで高く。そして見えたものは、やっぱり三坂君だった。

この塔があるからわたしは生きているのだ。そう思う。神だ。この塔は神だ。今いるこのぼろっつい塔じゃなくて、わたしの心の中に、そびえたっている思い出。わたしは、それだけを信じて、今生きてる。

その神に、突き動かされるがごとく、気付いたときにはわたしはハンマーを振りかざし、モニターをぶったたいていた。みしみしと表面に細かい亀裂が入って、もうモニターが何も映さなくなったことを確認するやいなや、隣の台に移る。そして叩く。これを繰り返す。ただひたすらに。

ドカン、みしみし。ドカン。みしみし。ドカン、みしみし。ドカ

ウーウーウーウー。せっかくいいところまで来ていたのに、さっそくサイレンがけたたましく鳴り響いて、わたしははっ、と我に帰る。まずい。サイレンだったら、発表を聞いてる方

々の耳にも届いているかもしれない。

モニター室を埋め尽くしつつあるサイレンの音に、押し出されるようにわたしは、よろよろと後ずさりながら部屋を出てしまう。まだ途中なのに。でもそんなこと言われる場合じゃない。まるでわたしがいけないことをしたかのように、サイレンはなおもわたしを威嚇する。わたしの膝ががくがくふるえるだけで、何をすべきか、まったくわからない。予想外の展開。捕まってしまう、という考えも浮かんできた。もし捕まったら、せっかくのミユキさんの編み出した陽動作戦が、ことごとく水泡に帰してしまう。陽動作戦、とはつまりはおとりのことを指すわけだけれど、研究発表というおとりを使えるのは当然一度きり。二回目なんてない。

いよいよその時は来た。エレヴェータの扉の裂け目から飛び出してきた、人だかり。ミユキさんも、とめることはできなかつたのかしら？

度重なるゲームで、最近はなりを潜めていたわたしの頭が久しぶりに高速回転する。といても特別よい方法があるわけでもない。モニター室にでも入ったら、逃げ場はないし、もしかしたらわたしじゃなくて、モニター室の方を先にみんなチェックする可能性もある。わたしは非常階段、あの白い巻貝のような階段が付いていたことを思い出し、そこへ向かって一目散に駆けた。でも非常階段へ続く扉には鍵がかかっていた。まあ、当然だけれど。結局行き止まり。わたしはすでに袋のネズミ。

「いた！ やっぱりあなたは侵入者だったのね！」

誇らしげにそう叫びながら、群衆の先頭を走るのは、もちろんわたしの隣の席にいた人だ。その彼女とわたしの差はぐんぐんと縮まっていく。

もう、終わりかもしれない。あの時わたしはそう思いさえした。

後になって考えたのだけれど、こうなることを、ミユキさんは初めに予想していたのかもしれない。

なぜなら、この後起こることが、まるで奇跡のようだったから。

塔の人達の手が、後数センチで、わたしにいたろうとした、丁度その時。見計らったかのよう。

背後の、非常階段へと続く扉が開いた。

わたしの体の周りに、彼の腕が回された。外の世界に引きずり出してくれる、強い力を、そのときわたしは肌で感じた。

☆

腕時計の画面は、午後六時五十八分に切り替わる。

魚の骨のように貧弱な手すりから、ちらちら窺う下の世界は、実に混沌としている。建物が立ち並ぶ街、その地下に身をうずめる新宿駅から、地上へと、人々がわきだしている、とめどなく。上から俯瞰すると、人の区別は全くつかず、人の形をした影が、うごめきあい溶け合って、黒々とうねる波と化す。

この波が、カオリを苦しめている。カオリは、この波にのまれているのだ。

腕時計の画面は、午後六時五十九分に切り替わる。

タクヤは、腕時計に合わせるように、下の異様なざわめきを消し飛ばした。

下の景色は見てはいけない。俺は、塔を見続けねばならんのだと。

タクヤは今、塔が見える。見えるどころかその塔の非常階段で息を殺し、建物内部に続く扉を目の前に、手すりにつかまってすらいるのだ。

塔を見ろ。

視界を塔で満たせ。

これは、俺にしか見えない塔だ。俺にしかできない仕事というものがあるのだ。俺の能力じゃなくて、俺が今までしたこと、つまり思い出。過去。それがあからこそ選ばれたのだ、「いい人」に。

だから俺は、混沌とした、新宿の街に呑みこまれることなく今、塔にいられる。

時計の秒の数字が、一つずつ大きくなっていくにつれ、何か、タクヤが助けねばならないこと、そして闘わなくてはならないものも、大きさを増してゆくように思われた。

六時五十九分、五十七、五十八、五十九。

今。

重要な実験並みの正確さで以て、タクヤはドアノブに手をかけた。

☆

カオリが、迫りくる塔の連中のあまりの気迫に、のけぞったせいで、不安定になった彼女の身体は、

タクヤは、ドアを勢い良く開け、ついに塔に、外の空気を、夜の澄み切った空気を送り込んだと同時に、

カオリの身体は突如出現した、外の世界の、自由な空間に投げ出され、

タクヤの開いていた腕の中に、すいこまれるように、

カオリがタクヤに飛び込んで。

タクヤは状況を、まったく理解し得ないままに、カオリの手を引き引き、螺旋階段を駆け降りた。

☆

しかしなぜか、結界を張ったわけでもないのに塔の追手達は、開け放たれたドアの前で踏みとどまっていた。誰も外に出ないのに、ドアにどンドン追手が集まってくるせいで、ドアの前の人口密度もどンドンと増加。そんなわけで、もう何人いるかなんぞ、数えられやしない。ドアに溜まる人それぞれが混ぜ合わさり、群衆に、ただ人の塊へととなっていた。

「何してんの！」

いきなり飛んだこの一喝の出どころはミユキの口だった。

「早く捕まえなくちゃ。ダメっしょ、この神聖な塔を知る人を、下の世界に野放しにしちゃ」  
その言葉が、背中に直撃でもしたのか、急に、人の波が、ドアの外にあふれ出る。  
人の命令に従うことだけが、人のためになるって思いこんでんな。  
そう言いたげな、ミユキの冷ややかな目は、螺旋階段を流れ落ちていく、人の波に向けられていた。

とはいえ、ミユキのシナリオ通り、なのである。

☆

「何してんの！早く捕まえなくちゃ、ダメっしょ」  
ミユキさんの言葉が背中越しに聞こえるが、かまってる時間などない。タクヤは、生まれて初めて、本気で走った。いや、タクヤの本気は、普段と同じで大したことないことには変わらない。ただ、心から走ろう、本気でそう思ったのだ。人間が走る意味なんて、徒競争で、一番をとることではまったくない。

「三坂君」

はてもなくぐるぐると、滑り落ちていく先にはしかし、荒れ狂う人間の波が、大波が迎えうつ。

「タクヤだ！いたぞ！」

見ると、どこから来たのか、大量の人間が、今度は螺旋階段を下から呑みこんでゆく。

「三坂君、ここから飛び降りるしかないよ」

身体が急に、思いがけない力で引っ張られた、と気付いた時にはもう足は天に向けられていた。頭は地面にぐいぐい引っ張られてゆく。

したん、ぼす。

想像と違い、さかさまのまま宙に浮いた後、ひんやりしたアスファルトに顔が触れる。身体を起こして見たものは、タイムズスクエア、を覆い尽くすほどの、人の波のうねりだった。

「うわっ、これ、どういうこと？ねえ、三坂君？う、うん、とりあえず、駅の西口はいけそうもないね。とりあえず右にぐるって曲がって、南口とか、東口とか、人がいないところで、電車に乗ろ」

この人の大洪水は、西口から噴き出しているのかもしれない。

☆

その時、タクヤとカオリが、飛び降りて抜け出した例の螺旋階段はというと、上から駆け降りてきた塔の追っ手、下から這い上がって来たタクヤ信者の方々、この二つの流れが混ぜ合わさったことで、更に大きな波に変貌を遂げた。と同時にカオリを追う追っ手、タクヤを追う信者、この二つの目的も混ぜ合わさり、一つの目標が今誕生した。

カオリとタクヤをひっ捕らえよ。

夢中で逃げている二人は、気にもしてられないだろうが。

☆

ぐるり右に身体をねじる、が、周りにひしめく人々の分厚い壁を、通り抜けられそうにない。怖気づき、足を止めようとしたものの、隣を走るカオリは微塵の躊躇もない。むしろ加速し、そのまま突っ込む。

「うわっ」

人の波は口々に叫び、カオリから飛びのき、飛び散ってゆく。その代わり、突如開いたその空間に、これ幸いとまた別の人が、ケータイの、カメラ片手に現れたりなんかするがそれも結局、猪突猛進するカオリから飛びのくしかない。寄せては返す、波のように。これが繰り返される。入れ替わり立ち替わり、人がひっきりなしに接近するが、蹴散らす、全て。ボートが水面を走ると水しぶきが揚がるような、モーゼが、荒れ狂う海を真っ二つに割って、その裂け目をよう突き進むような、そんな感じである。人の海を二つに裂くようにカオリとともにただただ突っ走り、あたりに人しぶきを生みだして。

これこそが、これこそが本当に生きるということだ。周りの人をはねのけてでも、一緒に走る人がカオリだけだとしても、自分の意志というものを、けして曲げてはいけないのだ。

南口へと続く坂を走るところには、西新宿の人のうごめきの海を、抜け出していた。が、海は引っ張られるように、長い濁流と化して、カオリと走る後ろから、一気に追いつけてくる。

「ねえ、三坂君、道を全速力で走る人ってさ、」

背後のうねる濁流から、噴き出すように察せられる「タクヤ」、「カオリ」という言葉。それがあらゆるところから、聞こえてくる。いつの間にか、道路を挟んだ道にも人は流れ、そこからも、叫び声がする。

「待て、タクヤ」

「カオリ」

その叫び声は、たがいに溶け合い、唸りとなって襲いかかってくる。

「道を全速力で走る人って、変な人か、あるいは逃げてる泥棒か。そう思われるのが常じゃない？でもね、走るってわたし、すごいことだと思うんだ。他人に理解されなくても、必死に何かを求めているってところが」

☆

さっきからのカオリの言葉に、タクヤが何の返答も返さなかったのは、別にカオリを無視していたわけではもちろんない。じゃあ何か、と言えればそれは、タクヤのあまりの疲労に他ならない。新宿に到着するまで、不眠不休で走り続け、酷使し続けたタクヤの体力が、そんなすぐに回復するわけがない。今走るタクヤの肺には、血の味が立ち込めており、息を吸うだけで、突き刺されるような激痛が走るほどにもなっていた。

さて、タクヤとカオリは、新宿駅にたどり着くために、駅の西口側から南側、東側と回り込む、という迂遠なルートで走っていたわけだ。肝心の駅西口は、人という人でびっしり埋まっていた。

その原因の一つでもある、サキハラ率いる上宮中の連中は、午後七時、タクヤ信者の方々の後ろあたりで、人がここまで集まったその原因を探っていた。

すると今まで視界にすら入っていなかった、白塗りの細長い建物から、人があふれ出たところを、偶然そこに目を向けていた上宮中の一人の生徒が目撃する。

「おい、あれ、何だ？」

その声を引き金として、前方をぎっしりと埋める人の合間から、上宮中の生徒は好奇心あふれる目を凝らす。

「何？何があったんだ？」

ドドドド、と前を占めていたタクヤ信者の方々が、急に動き出す。建物から溢れた人と、そのタクヤ信者がまじりあい、大群となったものは、一気に東側、上宮中目線では左側に走り出したのだ。

もちろん、その大群の中心で、蹴散らしながら走るタクヤとカオリは見えやしない。

しかしその人ごみの中心で、何かすごい事が起きている、という感触が上宮中の一行にはあった。

ということで、さらに上宮中の一行もその流れに乗る。それが起きている原因は何か、知らないままに。

人の無秩序なうねりは、さらに大きさを増していったわけだ。

☆

新宿駅南口は、道路を挟んだ向こうにあるが、すでにその対岸は、追ってでいっばいだった。道路を渡ってその波が押し寄せてくるものだから、南口とは反対の方向に向かわねばならない。サザンテラス、と呼ばれる広場のようなところに向かって走る。

「エスカレーターを使おう」

そのエスカレーターを上がった先は、下の道路をまたぐ、橋になる。その橋を渡った先には、待望の駅の入り口が、待ち構えているはずだった、の、だが。

「大丈夫？」

足が、生まれたての鹿のように、ふらふらよろめいた後、タクヤはどうと倒れる。荒い息が肺から噴き出す。

「もう無理だ」

息絶え絶えの、タクヤの目の先には、さっきまで蹴散らしながら、走っていたとは信じられないほどにピンピンとしたカオリが立っている。

そもそも、カオリがあそこまでの俊足だったことも意外だった。タクヤの記憶の中のカオリは、たとえば体育祭の時とかは、腕を振り、顔を真っ赤に火照らせて、懸命に走っていたが、必死

具合と比べ、速さは全然だったはずなのだが。

「ごめんね。そうだよな」

なにがそうなのか。

「わたしの背中につかまって」

最後の力を振り絞ってしがみつくと、カオリはもっと、さっきよりもっと速く、エスカレーターを、はねるように飛び抜けた。

さっきは、合わせてくれていた、ということなのか。

周りの景色が、あたりのぼんやりとひかる、赤緑黄、様々な光が、カオリの背中の上で飛ぶように流れてゆく。

空には、登り始めた月が、浮かんでいる。

満月だった。

「わたしはじめてかも。こんなに走ったの」

そういうカオリの呼吸は、まったく乱れていない。

しかし、カオリの身体能力でも、解決できない窮地に立たされる。

前方、新宿駅へと続く方からも、人の波が、なだれ込んできたのだ。

挟まれた。

前からも後ろからも、人の波が。

カオリはうろたえ、足を止める。

俺の信者か、カオリの追っ手か。よくは分からないが、捕まればきっと、大変なことになる。

もうどうしようもないけれど。

二つの波に、呑みこまれる、まさにその時、

「タクヤ、そして木本カオリ！いよいよ見つけたぞ」

前方の人の波の奥の方で、そんな声が聞こえる。

「そしてタクヤ、君に木本カオリについての、衝撃の事実がある」

衝撃の事実。その一言に、埋め尽くしていた人は、その言葉を発した人物に、道を開ける。皆が皆、衝撃の事実を、誰よりも先に知りたくて、たまらないのだ結局は。

「ヒカル」

そこに立っていたのは、ヒカルだった。

「何だヒカル、その事実って」

息も絶え絶えに、タクヤはそう言う。

「カオリの、うすらぼんやりしてる普段の姿。あれは、全部嘘だ。欺瞞だ」

「ん、んなわけ無いだろ」

「カオリは、実は、運動能力に優れている。しかしそれを表に出さず、運動できないと思わせていた。それで、そんなカオリの本性を知らずに運動が得意だ、と思っているヤマキとかを、密かに見下していたのさ」

「カオリはそんなことしない」

「いや。ほんとのところは、そうなんだろ？木本カオリ」

横のカオリは、目を丸くして、ただ黙っているだけ。

「そうなんだろう？」

「わ、わたしは...」

「カオリはね、かぐや姫みたいなもんよ」

そう言いながら今度は後ろの人ごみの中をかき分け、カオリのねえさんが登場する。

重要発言をしたこの人に、周りの人はまたも道を開ける。

「ミユキさん」

カオリはそう言った後で、意を決したのか、とつとつと、話しだした。彼女の今までの。ここに来るまでの彼女の色々を。

息をのむタクヤとヒカルの周りで、たくさんの人も、スマホや携帯片手に、一言も漏らさず話を聞く準備に入る。

### 最終章

そう、わたしは、言ってしまうばかりかぐや姫のようなもの。

かぐや姫は生まれた時から身体が光りだして、入っていた竹の中から、竹林に光を注いでいたらしい。わたしも、生まれた時は身体が光り輝いていて、夜空には無数の流れ星がきらめき、奇妙な、極彩色をした大きな鳥が、家の上を飛び回って、一声、鳴いた。

な～んてことは一切なくて、わたしは東京から少し離れた地方の、ごく普通の家で、ごく普通に生まれたの。

じゃあ、何でかぐや姫なのか。それをお話ししなくちゃいけないね。

わたしの普通の人生が、狂い始めたのは、ランドセルをしょって、小学校に通ってからのことなんだけど。

わたしは、そのころも、今と変わらぬような、どこにでもいる九歳の女の子だった。

あの日までは。

ところがかぐや姫は、生まれて三カ月で、大人になったってミユキさんから聞いた。

わたしも、九歳のころに、「三か月」がやって来た。ただわたしは、外見は普通の女の子のままだったけれど。

外見は。

「三か月」の後、わたしは、脳から身体能力にいたるまで、全てが急成長を遂げていた。一つ一つ語る時間は今ないから、それは御想像にお任せするとして。

今までのわたしのイメージが、すっかり定着していたクラスは、それこそ全てがひっくりかえっちゃうことに。クラスのなかの人にはそれぞれ、何か得意なことがある、そうわたしは思う。運動に限らず、絵とか、器用さとか、そのほかなんでも。

その全てのトップに、急にわたしは躍り出してしまうの。

何でも、それこそジャンケンでも、わたしに並ぶものはいなくなった。「自分には、他の人には負けないところがある。」そんな人の心のよりどころを、わたしは根こそぎ奪ってしまう。

クラスみんなはわたしを気味悪がったけれど、わたしの方が気味悪かった。わたしはみんなに悪いと感じていた。わたしだって、好きでやってるわけじゃないのに。

わたしはそのことを、先生に思いきって正直に打ち明けてしまうと、その一ヶ月後くらいに、二人か三人の大人達が、学校にやって来たの。そしてわたしは変なテストを受けた。

それからはもう、みんなに迷惑を、かけることはなくなった。

もう学校に、行かなくなったから。

実を言うと、「転校」したってところかな。わたしの学校に、やって来た大人達の所の学校に。

その学校は、「三か月」を経験したような、人並み外れた人が、入るところだった。というか、そうじゃないと、きっと入れないところなんだと思うけど。

コンクリートむき出しの、殺風景なところにわたしが足を踏み入れた時、わたしの心は、どんよりとした不安に覆われていた。

もし、もしわたしの「三か月」、あれが魔法のようなもので、いつかその効果が切れる、ものだとしたら。もし魔法が切れた時、わたしはどうなってしまおうのだろう。どう生きればいいのかしら？

学校にいる間、わたしは自分の心から浮き出てきたそんな恐ろしい考えを、思いだしてはその恐ろしさにずっと、震えてて。そう、ちなみに今度のわたしの学校は、家からずっと遠くの、そそり立つ山の間のような、所にあたってこと、言い忘れてたね。だからわたしは、寮暮らしをしていたんだ。小学校から中学校まで。学校自体は、高校まであるのだけどね。

その学校に通っている人は皆、わたしとおんなじくらいの、ずば抜けた能力の人だらけだった。って言っても、そもそも人数が少ないんだけどね。

ともかくも、わたしは自分から出てきたわけじゃない、魔法の力のせいでその学校の一員になった。その学校を選んだのは、わたしじゃなくて、魔法をかけられたわたし。ただのわたしの居場所なんて無い。

その学校の、人達は、全国に散在するという、塔の職業を目指していたの。みんながみんな。でもわたしは塔の職業ってものがよくわからなかったし、もっと自由になりたかった。

高い山に囲まれたあの学校は、わたしは閉塞感漂う、檻にしか見えなかった。

そんなわたしを、外の世界に引きずり出してくれたのが、この学校の卒業生で、わたしの恐ろしい魔法の話を聞いてくれた、ミュキさん。ミュキさんは、この学校の他の生徒と、昔からどこか違っていたように思う。なんか、外の広い世界が、見えているかのような。

「塔って絶対くだらないと思う」

そんなこともよく口にしていたミュキさん。

まあそういうわけで、わたしはミュキさんの家に移り、そこに住まわせてもらいながら、上宮中に通い始めたってわけ。

で、ここからが本題の所になる。

そう、だから今までの話からも分かる通り、上宮中にいた時も、もっと言えば今も、魔法はかけられたままなんだ。

上宮中に移った時、わたしはその「魔法」を一番に恐れていた。魔法が発覚すれば、小学校の時の二の舞になるのは避けられない。わたしはまたみんなの得意なものを、奪い取ってしまう。そもそも上宮中に移る意味は、魔法を隠して、普通の中学校生活を送ることにあるのに。

わたしは、授業中に寝たり、分からないフリをしたり、わざと遅く走ったり、いろんな形で、必死に隠し続けた。わたしの魔法を。

だけど、ついにその時は来てしまう。

しかも結構早くに。

二年生、入ってすぐの、たぶん体育の授業かな？バスケをしたんだ、クラスで。三坂君、覚えてるかな？

あそこでわたしは、「魔法」を発動してしまう。

体育の授業ごときでも、試合に情熱を燃やす人はいるもので、特にわたしのチームのキャプテンはそういう類の人だった。でも、相手チームには、ご存知、ヤマキがいたんだ。ヤマキは本当に、一人でどんどん点を入れちゃう。見ていて気持ちがいいくらいに。だけど当然わたしのチームのキャプテンは、気持ち良くなるわけなくて。何とか点を取り返そうと、相手のゴール付近で突っ立っているわたしに、ボールを飛ばす。実は、女子が点を入れたら五点分、という、反則みたいなルールがあったのだ。わたしのチームのキャプテンは、その五点で、がっぼり点を取ろうともくろんでいたの。でもわたしは魔法を発動しないと誓っていたから、シュートでわざと弱弱しくわたしが投げたボールは、ネットにかすりすらしない。

「何やっとなんじゃゴラァ」

女子の人気を、全く気にしないキャプテンは、わたしが失敗するごとに、そうどなり散らす。わたしは、その言葉を聞くごとに、申し訳ない気持ちになってゆく。わたしは、誰の役にも立ってない、自分勝手なやつなんじゃないかって。

わたしは、魔法を発動した。

ヤマキからボールを奪い取り、次々とわたしはボールをネットにくぐらせる。ただ、ヤマキチームを抜かすより先に、タイムアップが来てしまったのだけど。

幸いにもこの出来事は、わたしのチームが負けたせいもあって、まったく広まらなかった。

ただ、ヤマキは覚えていた。悔しさとともに。

だけど、それからはわたしはまたひたすらに、「魔法」を隠した。そして、今日逃げる時までずっと、発動しなかった。

これが、わたしの真実。

☆

ミユキさん以外の人々は皆、驚愕のあまり、口を開いてその話をポカンと聞いていた。最初に声を発したのはヒカルだった。

「ほらな」

ヒカルはタクヤの方を向く。

「本当だったんだ。魔法とか言ってるけど、結局木本カオリは、お前より優れているんだ」

「やめてよ、その言い方」

そう言うカオリは、絶望しきった顔をしている。今まで隠していたことが、タクヤにも知られてしまったから。カオリの目からは、涙があふれ出て、ほおを伝い落ちる。

「お前は、偽のカオリ像ばっか見てきたんだ。お前の塔は、崩れ落ちた。透き通った。見えなくなった」

タクヤは何も話さない。

「どうした？何か言ったらどうだ」

「俺は」

タクヤが突然に口を開いた。

「俺は、ヒカル、お前よりも先に、カオリの、本当の姿を知っていた」

カオリは、驚きのあまり泣くのをやめる。

「カオリ、あの、球技大会のこと、覚えてるよね？」

「う、うん。そうだけど？」

「俺はあの時、本当のカオリを知った」

タクヤは毅然と言い放つ。

「だから後からカオリの新しい一部分を知ろうと、カオリに対する、俺の気持ちが、揺らぐことなんてない」

カオリは泣きじゃくった。悲しみからではなく、嬉しさ、そして魔法にかけられた自分を認めてくれたことへの安心から。

「言い忘れてたんだけど、カオリ」

タクヤはカオリと向き合う。

「俺は、本当に、君が好きだ」

カオリはほおをさくらんぼのように染めた。ヒカルも、いや、その他大勢の聴衆も、タクヤのこの赤面ものの言葉に気恥かしくなった。まさか、こんな衆人環視の中で、堂々と言っているなんて。

「わたしも」

カオリがもじもじとそう答えた後、ぎこちない空気になったところに、ミュキが入りこむ。

「みんなで、この二人を祝福しましょう！」

橋の周り、その下の道路、そしてタイムスクエアに続く人の波から、拍手が沸き起こった。

しかし、これはすべてミュキのシナリオ通りだったのだ。そしてその描いたシナリオ通りに、バベルの塔は、人々の中から消え失せ、透き通ったのだ。ぶっ潰れたのだ。

実際、今タクヤとカオリを見ている人は皆、塔を思い描くことをやめていた。

塔の人達は、人の幸せが、モニターの装置から来るものではないと悟った。

タクヤ信者の方々は、顔も知らない人に、自分を発信しなくていい、むしろ、自分の全てを、受け入れてくれる人を探すのが先決だと、そう気付いた。

上宮中の連中は、誰かれ構わず人のいいなりになることは止め、自分が最もよく知る人のことだけのために生きようと決心した。

バベルの塔は崩れおちた。二人の愛の雷に。

ミュキは、一人にやり、と笑った。

目的は果たされた。

さて、タクヤとカオリに、いいところを持っていかれたヒカルは、目の前で起こっていることが、信じられなかった。結局、タクヤが最も真実をつかんでいたのだ。しかもヒカルは、球技大会の出来事とはいかなることか、さっぱりわからなかった。

その事実さえ、つかんでいれば。

「タクヤとカオリは、誰にも知られずに、世界の境目を作りだしていたのだ。私だって...センセーショナルな新聞を書いていた。だが、その新聞のネタは、世界を動かす力は、全部あの二人か

ら生まれたもの。センセーショナルなのは、あの二人だけだ。私は、私は二人の力に便乗しただけだ。...くそっ、私は、どうやってつまらない日常を壊せばよいのだろう？何でタクヤとカオリは、日常を突き破れるのだろうか？」

そのボヤキを、ミユキが聞いていた。

「それはね」

ミユキはヒカルを向いて言う。

「愛が、あるから。あの二人には。あなたも、あなたも人を愛しなさい。画面越しに、アイドルを眺めているだけじゃダメ。当たって砕けろ、男子ども」

狼狽するヒカルに、「最後にこれだけ」と言って、ミユキは続ける。

「トルストイの、戦争と平和の中に、こんな言葉があるんだよ。

われわれは、むしろ人から受けた善のためよりも、人にほどこした善のために、その人を愛するものである」

くるりとミユキは振り返り、幸せな二人に身体を向ける。

「ありがと。ほんとに思い通りにことが進んだ。カオリ、タクヤくん。あなたのおかげでね。あたしも、もう思い残すことはないかな。...って、忘れてた。ごめんごめんカオリ。まずはあなたの魔法を解かなくちゃだね。普通の女の子に戻って、タクヤとお幸せに」

ミユキはさっと手をカオリにかざし、

「ちょっと、待って、ミユキさん。あなたはもしかして」

カオリが言い終わる前に、ミユキの姿はそこには無かった。

彼女の行方は杳として分からない。

ただあの時、夜空には、大きな満月が浮かんでいた。(おしまい)

補遺

ひとめぼれなんて、お米の名前でしか使わない言葉だと思ってた。

けどあの時の俺は、まさにひとめぼれだったんじゃないかな。

去年の十一月十七日。学校で、「もう一つの体育祭」と言われる球技大会の前日。球技大会、とはいうものの、クラス委員長がバスケ部部長ヤマキなもんだから、バスケしかやらないのだけれど。

球技大会の前に、クラス内でチームの序列を決めなくてはならないらしい。クラス内での順位が同じチームごとで明日やるためだと。

ただでさえ、明日の球技大会が憂鬱なのに、今日もバスケをしなくてはならないということで、俺はブルーに染まっていた。

俺は、運動がそんな得意ではないのだ。じゃなかったら新聞部なんかに入っていない。

クラス委員、ヤマキからチームが言い渡される。俺のチームは、俺も含め、ぱっとしない人が集まった。そのぱっとしない人の中に、カオリも含まれていた。でもまだその時俺は、「わざと雑魚チームにしやがったな」としか思っていなかった。

でもあのカオリの言葉を聞いた今は、ヤマキは、わざとはわざとでも、カオリを負かすために、カオリ以外のメンバーを雑魚で埋め合わせたんだと、そう思う。ヤマキは今度こそ、カオリにリベンジする気だったのだ。確かに、思い返せばあの時は、女子五点のルールはなかったような記憶がある。

試合形式はリーグ戦。運命のいたずらか、それともヤマキが仕組んだことなのか、ヤマキのチームとは最初に戦うことになった。

ピー

ダンダンダン。シュツ、パスツ、ドンドン、キュッキュツ。

ピー

あっけなく負けた。一点も取れなかった。カオリは、一点も取らなかった。

その時、俺は当然だ、と思って別に、がっかりも何もしなかったけど。

ここからは、カオリから、後で聞いた話だ。

☆

ヤマキは、試合中も、不機嫌だったが、試合が終わるとさらに慍然さは増し、カオリの方へ詰め寄って来たらしい。そして、こう言ったそうなのだ。

「お前、わざと負けただろ」

本人いわくその言葉に心臓を突かれたそうなのだ。自分が、偽の自分を演じていることを、ヤマキは見抜いていたのだと。

恐怖が、恐ろしい悪夢がカオリの中に沸き起こって来た。「わたしはなんて最低な人間だろう。今までわたしは、平気で手を抜いていたんだ。他の人が頑張っているのに」

こんな思い悩まなくても、と俺は思うのだが、その時カオリは、同じチームのみんなに、罪悪感を抱いていたらしいのだ。

カオリはどうするべきだったんだろう？次の試合から魔法を発動する？でもそしたらヤマキはこう思うだろう。「俺に華を持たせるために、俺の時だけ手を抜いたのか」これではさらに怒ってしまうのは明らかだ。じゃあ何だ？魔法を隠して手を抜く？それじゃ何の解決にもならない。

実際は、このどちらでもなかった。

カオリは、目の前に控えた、絶望の二択のことを思い、ぶるぶる震えていた。偶然にも俺が、そこを目撃する。

しかしまあ、よく話せたな、俺も。

「大丈夫？」

同じチームとして、声くらいかけねば、とその時俺がとっさに思わなかったら、今とは全然違う結末になったのだろう。

しかし俺は、奇跡的にも言ったのだ。

「大丈夫？」

「う、うん。ごめんね」

「え？何？木本なんか悪いことした？」

「いや、さっきの試合。わたしのせいで、負けちゃって...」

カオリは偶然にも、心の不安を吐き出したのだ。

「え？全然いいって。俺、そんな小さい事こだわらないから。ってか、一番足引っ張ってたの、俺の方だし」

これは自虐ではなく、真実だ。

「本当にごめんね」

このごめんねは、心からのごめんねだったのだ。まだその時俺は知らないけども。そして俺が返した言葉も、心からの、素直な言葉だったのだ。

「だからいいって。ってか、大丈夫？なんか具合が悪そうだけど。保健室行く？」

震えるカオリとともに俺は、試合に夢中になっているクラスの人達の後ろを通り、保健室へ向かった。

これが、俺の、ビッグ・インパクト。

保健室のドアをノックする前に、カオリは震える声で言った。

「三坂君、ありがとう」